

日中翻訳文化教育研究

No.5

The Academic Journal
Of
SETACS
2020



一般社団法人

日中翻訳文化教育協会

Tokyo

Beijing-Dalian-Jinhua

日中翻訳文化教育研究

No.5

The Academic Journal
Of
SETACS
2020



一般社団法人

日中翻訳文化教育協会

Tokyo

Beijing-Dalian-Jinhua

目 次

語序の翻譯·····	林 璋	3
解説系サインにおける文化語彙の日中翻譯·····	宮 偉	9
日語教學中形式名詞分類問題研究·····	劉 曼, 杜 勤	18
《紅樓夢》概念隱喻的日譯研究 ——以“芙蓉喻黛玉”為例·····	蔡春曉	28
林房雄《中國千夜一夜》與明清白話小說·····	匡 伶	41
李白の詩歌における人物呼稱の日本語訳の考察·····	陳慧玲, 舒 熾	51
中國日語翻譯研究一瞥 ——以 1978-2018 年間的期刊論文為考察對象·····	方芝佩	62
在日漢語學習者和網絡流行語 ——問卷調查的分析研究·····	鄭劍華	73
翻譯是難以言表的滿足而又幸福的过程 ——閻連科小說日譯者谷川毅訪談錄·····	盧冬麗	84
論文執筆者一覽·····		92
『日中翻譯文化教育研究』論文執筆要領·····		92
協會彙報·····		93
一般社團法人日中翻譯文化教育協會會員規約·····		95
2020 年度役員·····		95
『日中翻譯文化教育研究』既刊号目次·····		96

INDEX

On the Translation of Constituent Order	LIN Zhang	3
A study on the Chinese translation of culture-loaded words on information boards	GONG Wei	9
A Research on the Classification of Formal Nouns in Japanese-language Teaching	LIU Man, DU Qin	18
Study of the Japanese Translation of Conceptual Metaphors in Dream of Red Chamber ——Take “DaiYu as FuRong” for Example	CAI Chunxiao	28
Husao Hayashi’s Tsyu Goku Sen Ya Ichi Ya and Vernacular Novels in Ming and Qing Dynasties	KUANG Ling	41
A Study on Japanese Translation of Addressing of Characters in Li Bai’s Poems	CHEN Huiling, SHU Man	51
A Review On Japanese Translation Studies In China In The Past Four Decades ——Based On The Analysis Of Journal Papers Published During The Period Of 1978 To 2018	FANG Zhipei	62
Researches and analysis of a network buzzwords questionnaire for Chinese language learners in Japan	ZHENG Jianhua	73
Translation is a process of unspeakable satisfaction and happiness —— Interview with Tanikawa Tsuyoshi, Translator of Yan Lianke's Novels	LU Dongli	84

语序的翻译

林 璋
福建师范大学

1. 前言

语序的翻译问题，是翻译中的老话题了。一般的翻译教材都会涉及。比如梁传宝、高宁编著（2000）有“第九章 顺译”和“第十章 倒译”，陶振孝编著（2005）在“第四章 方法论”的第二节讨论“顺译与倒译”，高宁主编（2008）在“第十章 同义句与翻译技巧”之下讨论“倒译与变译”。那些标题给人的感觉是，似乎谈论语序的翻译问题，不外乎照搬原文的语序与改变原文的语序 2 种。而且只是作为技术处理的手段。

从语言学的角度看，语序问题中有语法的问题也有语用的问题。从翻译的角度看，语序不仅仅是词语的排列顺序，更是观察的顺序。因此，处理好语序的翻译问题是有必要的。

2. 语序种种

语序问题是语言学研究的一个重要课题。范晓(2001a)区分“词序”和“语序”。“在语法现象里，实际存在着两种序列：一种是各种语法单位的排列次序，可简称为“单位序”。”“另一种是语法结构体（主要指短语或句子）内部的各种结构成分的排列次序，可简称为“成分序”。”“词序”是指词的排序或语法单位的排序（即“单位序”），而“语序”是指结构成分的排序（即“成分序”）。二者的关系如（1）。

（1）狗咬猫。←→ 猫咬狗。（“狗、猫”词序不同，但语序相同：都是主动宾、施动受）（范晓 2001a）

本文所说的语序，与上述引文所说的语序相同。这个意义上的语序，可以从各种角度来观察，比如基本语序。“他动词句中，日语主要使用 SOV 语序。”“在承认 SVO 语序是汉语基本语序的同时，也承认汉语中存在 SOV 语序。”（盛文忠 2014：33）

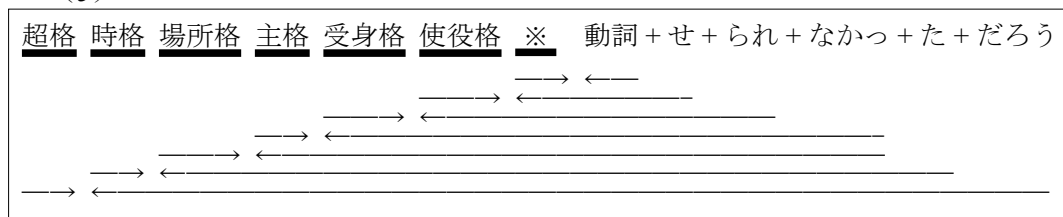
（2）太郎はリンゴを食べた。（SOV）

（3）太郎吃了苹果。（SVO）

（4）太郎把苹果吃了。（SOV）（盛文忠 2014：33）

基本语序，除了最基本的 S/V/O 这 3 个成分之间的顺序之外，还可以在更大的序列中来考察。北原保雄（1981：111）列出了日语的“基本结构”，即整个小句的基本语序及其句法结构，如（5）。其中的“※”表示各种格成分，如宾格。

（5）



从语序的角度看,这种基本结构相当于范晓(2001b)所说的“常规语序”。范晓(2001b)中与“常规语序”相对的是“非常规语序”,指的是“倒装语序”,如(6)。

(6) 我们已经讨论过三次了,这件事。(范晓 2001b)

本文主要探讨翻译中的语序问题,不对语序做过于细致的分类。本文使用的概念主要有这么几个,首先是“基本语序”,比如汉语是 SVO,日语是 SOV。其次是“常规语序”,观察的范围比基本语序大,涉及整个句子,例(5)的语序就属于常规语序。本文所说的常规语序,不仅包括(7)这样的无标记的语序,还包括(8)这样的特殊句式的语序。

(7) 昨天小明在百货商店买了一条领带。

(8) 台上坐着主席团。

作为与常规语序相对的概念,本文使用“语用语序”。语用语序是出于表达上的需要进行调整的语序,是有标记的语序,包括上述的非常规语序。以下的(9a)是常规语序,(9b)是语用语序。

(9) a. 张三装兜里 2 块巧克力。(常规语序)

b. 张三把 2 块巧克力装兜里。(语用语序)

c. 张三往兜里装了 2 块巧克力。(语用语序)

(10) a. 太郎が次郎に花子を紹介する。(常规语序)

b. 花子を太郎が次郎に紹介する。(语用语序)

c. 太郎が花子を次郎に紹介する。(语用语序)

日语的(10)可以有 6 种组合,而汉语的“介绍”则做不到,(11b)是不成立的。

(11) a. 张三把李四介绍给王老五。

b.* 把李四张三介绍给王老五。

可见,语用语序的调整是有限度的。

范晓(2001b)区分句法语序和语义语序,如(12)。

(12) 武松把老虎打死了。——老虎被武松打死了。(主状动 / 施受动——主状动 / 受施动)(范晓 2001b)

各个语言对句法成分的称呼并不一致,比如(13)中的“老虎”在不同的句法位置上表现为不同的句法成分,而在日语中都是用宾格助词「を」来标记,都是宾语成分。

(13) a. 武松打死了老虎。(宾语)

b. 武松把老虎打死了。(状语)(范晓 2001b)

不仅如此,像(14)这样,句法成分的名称不一样,讨论起来就特别费劲。

(14) a. 去学校。(宾语)

b. 学校へ行く。(补语)

因此,在考虑翻译问题的时候,语义语序比句法语序更便于观察和分析。在(12)和(13)中,不论“老虎”出现在什么句法位置上,其语义角色都是“受事”,(14)中的“学校”都是目的地。

3. 语篇中的语序翻译

在语篇层面上，作者会对语序进行调整。这里先看 2 组例子。

(15) a. 各地で局地的な突風 山形・埼玉で負傷者相次ぐ

3 日午後、局地的な突風が吹き、テントが飛ばされるなどしてけが人が出る被害が出た。

午後 2 時 1 0 分ごろ、山形市の県あかねヶ丘陸上競技場で、突風にあおられてテント（幅 5.4 メートル、奥行き 3.6 メートル、高さ 1.8 メートル）が飛ばされ、陸上競技大会に参加していた女子高生 6 人が下敷きになるなどして軽いけがをした。（朝日新聞デジタル 2010 年 5 月 3 日 21 時 16 分）

b. 小中学校への携帯電話持ち込み禁止、文科省が月内通知へ

文部科学省は 2 1 日、小中学校への児童・生徒の携帯電話の持ち込みを原則として禁止する通知を、月内にも各学校に出す方針を固めた。

同省は昨年 7 月、全国の公立の小中高校に携帯電話の取り扱いに関する指針を明確化するように通知し、これに対する各校の対応を今月 2 3 日までに報告するように都道府県などの教育委員会に求めている。（YOMIURI ONLINE 2009 年 1 月 21 日 11 時 52 分）

(16) a. 宝马车冲进巴黎披萨店致 1 死 13 伤 已排除恐袭因素

人民网巴黎 8 月 15 日电（何蓓）法国当地时间 14 日晚，一辆宝马轿车冲进巴黎东郊一家披萨饼店，导致一名 13 岁女孩死亡和 13 人受伤。伤者中的 5 人伤势严重，包括一名 3 岁的儿童。

当地时间当晚 20 时 30 分，一名男性驾驶一辆灰色宝马轿车冲向赛特所小镇的一家披萨饼店，当时正有 20 多人在餐厅露台就餐。当晚在店内吃饭的布丽吉特后来向《巴黎人报》描述，她正在柜台交费，突然听到身后剧烈的撞击声，然后看到餐厅四处是玻璃渣和血，有一个人被卡在吧台和汽车之间。（人民网 - 国际频道 2017 年 08 月 15 日 15:26）

b. 苏丹要求联合国为该国收容的 200 万难民提供资金

苏丹政府 1 4 日呼吁联合国提供必要预算，以满足在该国的约 2 0 0 万难民的需要。

据苏丹媒体报道，苏丹国际合作部部长伊德里斯·苏莱曼当天会见联合国难民署驻苏丹代表吉田教子，苏莱曼表示，“因为目前难民的存在已经对苏丹现有的资源构成了额外压力”，希望国际社会提供必要预算以满足在苏难民迫切需求。（新华社 2017 年 08 月 15 日 14:20）

从这 2 组报道可以看出，时间成分出现的位置是一致的。报道突发事件时，时间出现在句首，而报道政府的行为时，时间则出现在话题的后面。如果翻译这 2 组报道，那么时间成分的位置可以保留，也应该保留。

但是，我们也会遇到难以保留语序的情况，如（17）。

(17) 昔、学校で教えられたのは、わかりやすい区分だった。狩猟や採集で生活す

るいかにも原始的な縄文人と、水田を耕作し、集落をつくって生活する現代人に近い弥生人である。近年、縄文時代の豊かな文化を証明する遺跡が次々発掘されて縄文観が大きく変わりつつある。

縄文の世界に大陸や半島から先端文化、つまり金属製品や稲作が流入し始めたころのことを想像する。（天声人語）

划线部分语序是「～に～から～が」，而常规语序应该是「～が～から～に」，正好相反。这是出于语篇衔接的需要，前文说的是「縄文時代」和「縄文観」，这个句子将「縄文の世界」放在了句首。但是，汉语中无法将终点放在起点之前。

在文学作品中，语序更多地表现为观察的顺序。比如以下这个「雪国」的例子。

（18）国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。

（a）信号所に汽車が止まった。

（b）向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、「駅長さあん、駅長さあん。」

（c）明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

（d）もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

（18a）不是常规语序，常规语序应该是「汽車が信号所に」。问题的关键在于：作者为什么要改掉常规语序？一个可能的解释是确保观察的连续性。第一句描写的是穿出隧道进入雪国时的场景变化，第二句描写车窗外的景色变化。这2句话的内容，都是主人公观察车窗外的场景获得的。这个第3句，由于信号所在前火车在后，所以是先看到信号所，然后才感觉到火车停下来。这是非常自然的衔接方式。如果使用常规语序，表达的则是“火车”在信号所停下来。但是，火车不是“窗外的景色”。从窗外的景色直接转入火车在某个特定的地方停下来，这种衔接是很奇怪的。但是，从（19）可以看到，5个汉译本无一例外都是火车在前，信号所在后。

（19）a. 火车停在信号房前面。（侍桁译 1981）

b. 火车在信号所前停了下来。（叶渭渠译 1985）

c. 火车在信号所前停了下来。（高慧勤译 1985）

d. 列车停在信号房的前面。（尚永清译 1997）

e. 火车在信号所停了下来。（林少华译 2012）

从汉语表达的角度说，在句子层面上看，火车在前比较自然。也许正是因为这样，5位译者都选择了火车居前的语序。但是，前面说过，从语篇的角度看，这种语序是不合理的。而汉语有条件来调整这个语序，如（20）。

（20）到信号所前火车停下了。

由于从第1句开始，主人公在看窗外的时候，火车是在移动的。用“到”可以配合

表达火车的移动。

(18b) 是存现句(林璋 2015), 这种句式的语序是固定的, 即处所居前。第一段描写的是车窗外的情景, 第二段的开头通过处所「向側の座席」将视线移到了车厢内。如果是施事居前的普通的动作句, 那么最合理的解释应该是那个施事在站台上。但原文显然不是这个意思。5 个汉语译文, 译作存现句的仅有 (21d)。

(21) a. 一个姑娘从对面的座位上起身走过来, (侍桁译 1981)

b. 一位姑娘从对面座位上站起身子, (叶渭渠译 1985)

c. 姑娘从对面的座位上站起身来, (高慧勤译 1985)

d. 从对过儿的座位上走过来一位姑娘, (尚永清译 1997)

e. 少女从对面座位起身, (林少华译 2012)

对 (18c) 和 (18d), 林璋 (2018) 有较细致的分析。简单说来, (18c) 的「明り」、「男」和「襟巻」跟观察的顺序有关, 因为是黑夜, 所以移动的灯光是最容易观察到的, 随着人物向主人公方向不断移动, 于是可以确认是男子, 然后才是服饰细节。5 个译文中, 最合理的是 (22a), 最不合理的是 (22b)。

(22) a. 拎着提灯, 踏着雪缓缓走过来一个人。他把围巾一直围到鼻子上, 皮帽耳扇也耷拉着。(尚永清译 1997)

b. 一个把围巾缠到鼻子上、帽耳耷拉在耳朵边的男子, 手拎提灯, 踏着雪缓步走了过来。(叶渭渠译 1985)

而 (18d) 中的「もうそんな寒さか」, 是主人公看到站长的装束后的第一反应。然后才是基于这种内心反应的观察以及观察到的情景。日语的基本语序 SOV 为这种内容展开的顺序提供了最大的便利。5 个译文中, 有 4 个译文的主人公出现在句首, 保持了原文语序的只有 (23)。当然, (23) 还有一些小问题, 这里就不讨论了。

(23) 已经那么冷了吗? 岛村向外看去, (林少华译 2012)

4. 结语

语序问题可以从多个角度来观察, 从翻译学的角度看, 可以从基本语序、常规语序和语用语序的视角来观察。语序可以有句法语序和语义语序的属性划分, 从翻译学的角度看, 语义语序更适合用于谈论翻译问题。文学作品的语序, 更多的是观察内容的展开方式, 因此翻译文学作品应该最大限度地再现这种观察的顺序。

参考文献

- [1] 范晓 2001a, 关于汉语的语序问题 (一), 《汉语学习》第 5 期
- [2] 范晓 2001b, 关于汉语的语序问题 (二), 《汉语学习》第 6 期
- [3] 高宁主编 2008, 《日汉翻译教材》上海外语教育出版社
- [4] 梁传宝、高宁编著 2000, 《新编日汉翻译教程》上海外语教育出版社
- [5] 林璋 2015, 翻译、翻译研究与语言对比研究, 《汉日语言对比研究论丛》第 6 辑
- [6] 林璋 2018, 论句子作为翻译操作的基本单位, 《日语学习与研究》第 6 期
- [7] 盛文忠 2014, 《汉日语序对比研究——基于语言类型学的考察》外语教学与研究出版社
- [8] 陶振孝编著 2005, 《现代日汉翻译教材》高等教育出版社
- [9] 北原保雄 1981, 『世界の日本語 6 日本語の文法』中央公論社

译文

- [10] 高慧勤译 1985, 雪国,《雪国·千鹤·古都》漓江出版社
- [11] 林少华译 2011,《雪国》青岛出版社
- [12] 尚永清译解 1997,《雪国》商务印书馆
- [13] 侍桁译 1981,《雪国》上海译文出版社
- [14] 叶渭渠译 1985, 雪国,《川端康成小说选》人民文学出版社

解説系サインにおける文化語彙の日中翻訳

宮 偉

城西国際大学

1. はじめに

日本社会、日本文化に興味を持って、観光目的で訪日する外国人が増加しつつある。日本政府観光局 (JNTO) のデータによると、2018 年の訪日外国人は 3,119 万人にも達し、そのうち、中国人が依然としてトップに立って、中国大陆だけでも 838 万人で、全体の 26.9% をも占めている。

中国人観光客の目的は、「爆買い」に代表される「モノ」から文化体験の「コト」へと転向しつつあると言われている。日本語や日本文化の分からない中国人観光客にとって、観光地の中国語対応が、観光目的の達成だけでなく、日本文化に対する理解をも大きく左右し、さらに真の中日相互理解に繋がることになるだろう。

本研究は、スコポス翻訳理論を援用し、観光地にある解説系サインにおける、日本文化理解に直結するいわゆる「文化語彙」の翻訳技法について提案したい。

2. 本研究における諸定義について

2.1 解説系サイン

我々の日常生活によく見られる交通標識、道路案内、位置表示、規制標示、観光案内などを、英語では「sign」「public sign」といい、日本語では「サイン」「パブリックサイン」或いは「公共サイン」「案内サイン」と名称が色々あるが、学術的定義が定着していない。

本研究では、宮 (2016) に依拠して、「サイン」を「公的な場で公衆に向け表示している、特殊なコミュニケーション機能及び情報提供、指示・提示・規制等の機能を持つ言語である」とする。そして「解説系サイン」を、美術館や博物館の展示物等の理解のために文章で解説をしているものとする。

日本国土交通省観光庁が平成 26 年 3 月に作成した『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』では、「日本の文化や歴史に対する知識が十分でない訪日外国人旅行者」を意識し、「解説系サイン」の多言語対応が、「美術館・博物館」では「必須」とであると規定している。

2.2 文化語彙

どこの国 (民族) にも、他国 (民族) と違う、独特な文化現象がある。人類共通の飲食行為を例にとってみても、日本人は「刺身」を食べるが、中国人はほとんど生のものを食べないし、まして「馬刺」や「鳥刺」は論外である。「餃子」という漢字を見たら、中国人は主食の水餃子をイメージするが、日本人にはあくまでもおつまみ感覚の焼き餃子である。

そういう、一国（民族）の文化を表す語彙が、「文化語彙」と言えようが、その定義については、統一した見解がないままである。

本稿では、広義と狭義の二面からその定義を試みてみたい。

まず、広義では、全ての語彙が文化語彙だと見ていいだろう。というのは、言葉は文化そのもので文化のキャリアーであるからである。衣食住という生活の基礎となる表層文化にしても、中日間で浮かんでくるイメージは異なるし、風俗習慣や思考様式という深層文化になると、違いがあって当然である。「ある状況の中で何を言語化するかは、個々の言語文化により異なる」（藤濤，2007）し、同じ言語化されたもの・ことにしても、異言語間ではその言葉の指示的或いは内包的な意味に違いを見せる。

とは言っても、人間である以上、それなりの共通性はもちろんある。「文化語彙」の狭義上の定義を、その認識に立って、「ある民族・国家に特有な、あるいは他文化と相異なる文化現象を表す語彙のことである」とする。そして、文化語彙の分類については、おおざっぱに「文化空白語彙」と「文化差異語彙」と大別する。ある民族・国家に特有な文化現象を表す語彙、例えば「ちょんまげ」の類を「文化空白語彙」、他文化と相異なる文化現象を表す語彙、例えば「餃子」「花見」の類を「文化差異語彙」とそれぞれ命名する。

3. 文化語彙の翻訳技法に関する先行研究

文化語彙の翻訳技法についてははっきりと提案したのは、日本には霜崎實（2013）がある。霜崎は、「翻訳者の選択肢や創造性に着目した、より動的な翻訳方略に着目」したものであるとして、「坊ちゃん」の英訳を例にし、「音訳」「音訳＋説明語」「提喩的翻訳」「パラフレーズ」「動的等価による翻訳」「文化情報の補足説明」「音声重視の翻訳」など文化語彙の翻訳技法を提案した。

その他、文化語彙の翻訳ではないが、文化的差異の翻訳方法として、藤濤文子（2004）では、特にスコ-pos理論に依拠し、「移植」「音訳」「借用翻訳」「逐語訳」「パラフレーズ」「同化」「省略」「加筆」「解説」などのような翻訳方法を提案した。

文化語彙の翻訳技法について研究が最もなされたのは、中国側である。王克非（2016）のような、中国の特色ある語彙を外国語に訳す時の技法の研究や、周世培（2015）、潘小多（2008）、潘流霞（2012）、邱倩（2013）のような、文学作品にある文化語彙の翻訳策の研究、伍鳳（2015）や関宜平（2011）のような、観光案内資料にある文化的要素や文化語彙の翻訳策についての研究など多数あり、帰化や異化のストラテジー、音訳、音訳＋注釈、直訳、意識などの翻訳技法が提案された。

ところが、美術館や博物館など観光地にある解説系サインにおける文化語彙の日中翻訳についての研究は、管見の限りまだないのである。

本研究は、機能主義的翻訳理論、特にスコ-pos理論を援用して、訪日中国人の異文化体験という目的を最優先にし、解説系サインにある文化語彙の日中翻訳について、「異化」を中心とする翻訳技法を提案してみたい

4. 本研究の理論的枠組み

20 世紀 70 年代、等価翻訳理論の枠組みを脱出し、翻訳理論研究の中心を原文志向から訳文志向へと移行する、いわゆる機能主義翻訳理論が台頭してきた。翻訳を目的を持った異文化間の行為だと定義する機能主義翻訳理論は、翻訳を決定するのは、原文でもなければ原著者の意図でもなく、翻訳の目的だとみて、「グローバル化の時代にあって異文化間コミュニケーションが増大する中、多様化する翻訳現象の現実に即した理論だとも言え」（モナ・ベイカー&カブリエラ・サルダーニャ、2013）、特に実務翻訳の現場で広く取り入れられている。

機能主義翻訳理論は、ライスのテキストタイプ別翻訳理論、フェアメーアのスコープス理論、メンテリィの翻訳行為理論とノードの機能的テキスト分析理論など主要理論からなっていて、特にスコープス理論が、その代表的理論とも言える。

スコープスはもともとギリシア語で、「目的。目標」を意味している。フェアメーアによれば、翻訳するということは、目標文化社会の環境にある TT の受け手と TT の目的のために、TT 受容の状況下でテキストを産出することである。それまでコード転換のプロセスだと見られてきた翻訳は、あくまでも人間による行為の一形態であり、目的によって決定されるものであると見なされ。

博物館や美術館のような観光地にある解説系サインの外国語訳は、その読者は外国人で間違い無い。訪日外国人観光客は、母国と異なる日本の自然、歴史、文化、社会に興味を持つ。いわゆる「異文化体験」による刺激こそ彼らにとって何より大事な目的であろう。解説系サインの外国語対応も、こうした外国人観光客の「異文化体験」という目的実現をサポートしなければならない。

ところが、解説系サインは、最初から外国人観光客を念頭に置いたわけでもなく、もっぱら同じ文化的背景を持つ自国民のために書いたものである。当然ながら、その国特有あるいは他国と相異なる文化を表す文化語彙が、説明なしで当たり前のように出てくる。それをいかに、文化的背景の異なる外国人観光客に訳すかが、当の外国人観光客の「異文化体験」目的達成を大きく影響することは言うまでもない。

5. 文化語彙の日中翻訳技法への提案

解説系サインの日中翻訳の技法を論じる前に、まず、「解説系サイン」の特殊性について説明したい。

解説系サインは、周知の通り、特に美術館や博物館では、ほとんど展示物の横に立てられ、展示物の説明など観光客の理解をサポートするためのプレートに書いたものなので、まずそのサイズが限られている。外国語対応になる場合は、さらにスペースが限られているので、解説系サインには言葉の簡潔さが求められるだろう。

解説系サインはまた、写真、実物など言語外媒体と一緒に展示されることがほとんどなので、ライスのテキストタイプ別翻訳理論によると、第 4 のタイプの「マルチメディア型テキスト」になろう。写真など視覚的資料との整合性を考慮しなければなら

ないのである。

以上の、解説系サイン翻訳の特殊性を踏まえ、訪日中国人の「異文化体験」という目的を考慮して、以下のような技法を提示したい。

①移植。

ここでは、日本語の漢字をそのまま使うか中国語の簡体字にするという異化翻訳のことを指す。中国語には、「歌舞伎」「寿司」「刺身」「人気」「達人」など、日本語からそのまま移植された言葉が現に多数あり、現代中国で使われている社会・人文・科学の術語の70%前後までが日本製であるという説さえある。（王彬彬，1998）

それでも、日中翻訳の殆どの先行研究では、訳文の受け手である訳文読者の負担を最小限にするために、「帰化訳」を一番に提案している。確かに、帰化訳したら、訳文読者にとって分かりやすくはなるが、帰化したものは原物と同じものでなかったり、原物と異なるイメージを喚起したりするので、かえって観光客の異文化体験を妨害することになるのではないかと心配される。

例：無病息災を祈って、神輿や山車が町村内を巡行する夏季の祭りも、行事の内容は地域によって異なるものの、広く見ることができる。

ここで文化語彙として考えられるのは、「祭り」、「神輿」と「山車」である。原訳文では、この三つの文化語彙を、中国人読者にわかりやすいように、それぞれ「祭祀活动」、「神轿」、「“山车”（有轮子的神轿）」のように、帰化か注をつけて処理している。それはそれでいいが、訪日中国人の異文化体験という目的を最優先し、特に漢字を使っている文化語彙を取って訳さずに、漢字をそのまま移植して使うのもいいのではないかと考えられる。

「祭」は、『世界大百科事典第2版』の解説の通り、「本来は原始・古代宗教の集団儀礼を総称し、現代では文化的に一般化されて、祝賀的な社会行事を呼称するのによく使われる言葉となっている」。現代日本での「祭り」は、「祭祀」よりもむしろ「祝賀的な社会行事」になっている部分が多いし、中国の「祭祀活动」とは意味的にも雰囲気的にもかけ離れている。筆者は、むしろ日本の漢字「祭」をそのまま中国語の漢字「祭」にしたほうがいいと考える。もちろん、一文字の「祭」はやや変な感じがするというのは否めない事実でもある。だが、この「変な感じ」がむしろ訪日中国人観光客をはじめとする外国人観光客の異文化体験と繋がるのではないだろうか。また、写真など言語外媒体が関与しているという解説系サインの「マルチメディア型」テキストタイプも、移植という技法を可能にしている。現に、同じ展示室には、「祭」の写真や関連する実物が陳列され、VTRの映像も流されているので、日本の「祭」の様子については簡単に想像がつかだろう。

「神輿」は、原訳文では、中国の特に南方の「祭祀活动」にもある「神轿」と訳され

ている。日本の「神輿」と中国の「神轿」は同じものではないにしても、だいたい想像がつくからそれはそれでいいが、両者の違いを強調するために、あえて「神輿」を中国語の簡体字の「神輿」にすることもできると考えられる。「神輿」は現代中国語では使用されていないが、もともと中国語である。中国語辞典では「谓载神主的车驾」と解釈され、今から百年前の魯迅の作品に普通に使われていた言葉でもある。現代中国語に使用されていない言葉を使うと、かえって一種の新鮮さやレトロ感を呼び起こすことにもなるだろう。

そして中国にない「山車」であるが、原訳文では「“山车”(有轮子的神轿)」というふうに、「山車」を中国語の簡体字「山车」に直し、そして「車輪のついている神輿」と注釈をつけて訳している。それもいい方法である。が、何も注を入れずにそのまま「山车」にすることももちろん考えられる。あまりにも不親切で乱暴だと思われるかもしれないが、実際にこの解説系サインのすぐ横には、神輿や山車の写真や実物が展示されているので、見てすぐわかる。これこそ解説系サインの特殊なところである。

そのまま移植して訳すと、外国人読者にわからないのではないかと心配されるが、柳父章(1976)が提唱する「カセット効果」の通り、意味がわからないからこそ、価値のあるものと思わせる効果が出る。藤濤(2007)も述べたように、「わからなくても受容される条件があれば、異文化は異質なままでも導入が可能だ。異質な文化要素は乗り越えなければならないマイナス要因であるとは限らず、未知のものに対する興味や魅力となりえる大きなプラス的要因でもある」と。文化語彙を翻訳するときの移植は、特に異文化体験を主な目的にする訪日外国人には、むしろ適切ではないだろうか。美術館や博物館など写真や実物、映像などが付いている場合には、さらに適していると思われる。

②移植・加筆。

原文の文化語彙をそのまま移植した上で、目標言語や文化にない情報を加筆し補足する手法のことである。

解説系サインは、そもそも自国民のために書いたものなので、その中に含まれる常識や文化的情報を、説明なしで入れられるのがむしろ「普通」であるが、この自国民にとって「普通」である情報が、文化や歴史、政治体制、生活習慣などが違う外国人観光客にとっては「不通」になるケースが往々にしてある。原文には書いていないが、そうした外国人観光客にない文化的情報を訳文に補足しておかないと、到底理解不能になる。

一つの文化的事項を文化的背景の異なる人に説明すると、場合によってかなり長い文章になるが、解説系サインは、そのスペースに限りがあり、長い注釈を入れたりすることがほぼ不可能である。こうした場合は、原文に書いていないが外国人観光客に必要な文化的情報を訳文に補足し、顕在化せず「簡潔かつ自然」に加筆したほうがいいと考えられる。

例：アメリカのペリー提督やトロイ遺跡の発掘で有名なシュリーマンは、幕末の日本の人びとが、男女ともに基礎的な識字能力を持っていることに驚いている。

「アメリカのペリー提督」は、日本では知らない人がいないだろうが、「シュリーマン」を知る日本人が少ないという考えから、原文でも、「シュリーマン」に「トロイ遺跡の発掘で有名な」と説明をつけている。ところが、中国人一般にとって、「アメリカのペリー提督」についても殆ど背景知識にないので、「率军舰打开日本国门的美国提督佩里以及因发掘特洛伊遗迹而出名的施里曼，都对幕府末期日本男女均有的基本识字能力感到惊讶。」のように、翻訳時には「アメリカのペリー提督」を移植しながらも「率军舰打开日本国门的」と加筆して、簡潔に關係情報を補足したほうがより親切だろう。

③移植・文内注。

文化語彙は、ある国特有あるいは他国と異なる文化現象を表す語彙なので、そのまま移植すると多文化理解に有利であるが、読者の理解を助けるために、移植しながらの注釈も考えられる。例えば脚注、割注、訳者注などである。ところが、解説系サインは、そのスペースの關係上、中々脚注や訳者注をつけるスペースがない。「割注」は、「本文中に、2行にして組み込んだ注釈や解説」（デジタル大辞泉）のことを普通指しているが、本研究では特に、文化語彙のすぐ後に、割り書きせずに1行で括弧書きの補足説明のことを「文内注」と称す。つまり、原文の文化語彙をそのまま訳文に「移植」し、そして読者の理解を助けるために文内に「簡潔に」注をつける。前出の「“山车”（有轮子的神轿）」が、その例である。外国人観光客の異文化体験を満足させ、意味理解をもサポートするというのが狙いである。

例：子供への教育も必要とされ、寺子屋の数も都市・農村を問わず増加しました。

「寺子屋」は、「江戸時代、庶民の子供に読書・習字などの初等教育を行った所」（新明解）であり、中国の「私塾」にほぼ当たる。「武士・僧侶・医者・神職などが師となり、手習い・読み方・そろばんなどを教えた」ので、教師や教授内容が中国の「私塾」と異なるものの、「私塾」と意識しても特に問題がないと思われる。が、中国人の読者にも「寺子屋」という重要な文化現象を分からせるには、あるいは同じ展示室の体験コーナー「寺子屋『れきはく』」の表示板と照合して利用できるように、「孩子的教育问题受到普遍重视，无论是在城市还是农村，寺子屋（私塾）的数量都得以增加」と訳し、「寺子屋（私塾）」のように、日本語の「寺子屋」をそのまま移植しても括弧書きで「（私塾）」と注して処理できよう。

例：城下町では、人びとは武家、僧侶・神職、町人などの身分ごとに居住空間を与えられ、それぞれの社会を構成していた。

「町人」は、日本社会を語る時に重要な文化語彙の一つであるが、中国語にはない。「手工艺人及商販」のようにパラフレーズし意識してもいいが、「町人文化」までも有する「町人」は、日本社会文化を理解するための重要な語彙なので、中国人読者にはその日本語の名称も意味もわからせる必要がある。原文を、「城下町里，居民的聚居地按武家、寺院的僧侶、神社的神职、町人（手工艺人及商販）等不同身份区分，并形成各自不同的社会」と訳し、「町人」を「町人（手工艺人及商販）」のように、「町人」をそのまま移植しながらも、括弧書きで「（手工艺人及商販）」と文内注をつけて処理するのもいいだろう。

読者の異文化体験目的を大事にする一方で、意味のより正確な把握をも考慮する手法である。ただし、解説系サインのスペースの関係上、読者の読みを妨害しないために、あくまでも「簡潔明瞭」な文内注が求められるだろう。

④削除・要約。

解説系サイン翻訳時に、原文中の文化語彙を削除したり要約したりするには、以下の理由が考えられる。

まず、解説系サインはあくまでも自国民のために書いたものであるが、その訳文は外国人のためのものになる。読者が変わると、その背景知識や関心事、目的も変わってくる。訳文は、原文そのものではなく、読者の目的、文化的背景、翻訳者の選択など一連のフィルターを通したものでなければならない。

そして、すでに先行研究で明らかのように、観光客の閲読方式は、速読を中心とし、短時間でできるだけ多くの情報を獲得するという「scanning」方式が主流である。（呂和発・蔣璐，2013）特に文化語彙が集中的に現れる場合、そのままの移植が読者の負担になる。

よって、原文には必要であるが、訳文の読者から見るとそうでもない内容を、訳文の中で削除したり要約したりする作業をしてもよい。

例：江戸時代の商品経済の発展の中で、船の活動も変動した。とくに18世紀後半、幕藩領主や特権的問屋商人につながる海運勢力と新興勢力との力関係の転換が進んだ。江戸と上方（大坂周辺）との流通を独占的に担った菱垣廻船・樽廻船の力が低下し、他方では北前船・尾州廻船（内海船）・奥筋廻船などがともに買積という新方式の商売を始めた。彼らは地域の近距離海運や川舟とも結びついて、近代につながる新しい物流のネットワークを生み出した。

これは、江戸時代の新しい物流形態についての文章である。ここでは、「菱垣廻船」「樽廻船」「北前船」「尾州廻船」「奥筋廻船」など、日本の海運を表す文化語彙が、余りにも集中して出ている。移植したり、注したりしても訳文読者には大きな負担になりその読みを妨害することになる。何よりも、この文章は「～船」でなく、新しい物流の

形態について説明している内容なので、「～船」が文化語彙としての独立性が低くなる。こういう場合は、集中して出ている難しい文化語彙を無視して、内容を要約して訳出することが考えられる。上記の文章を、「随着江戸时代商品经济的发展，船运的模式也发生了变化。尤其是18世纪后半，有政府和买办背景的海运势力衰落，取而代之的是北前船等新兴势力，他们采取船主自行买卖运输货物的方式，并与近距离海运和河运相联合，创建了具有现代气息的新式物流网络。」のように、原文の内容をよく吟味し把握した上で、要約して中国語訳にすれば読みやすくなるだろう。

「背に腹は変えられない」。個別的な文化語彙の対応をしないので、外国人観光客の異文化体験を妨害することにはなるが、文章全体の目的を達成でき、「ある背景知識や状況を備えた想定需要者に理解できるだけの十分な一貫性」というスコポス理論の「一貫性ルール」も達成できるので、読者の文化的背景、文化語彙に対する理解度、全体と局所の関係性などを総合的に考えた上で、「削除・要約」を視野に入れることももちろん可能だ。

6. 結びに

以上、解説系サインにおける文化語彙の日中翻訳技法について、読者の異文化体験という目的を意識し、「移植」を中心として論じた。

だが、翻訳自体は、起点テキストの世界を別の言語で再構築する行為でもあり、完璧な再構築はどこにも存在しないし、文化と一体化した文化語彙の翻訳は、いくら技法を駆使しても、完全に原文中の文化的事象を訳し再構築することがほぼ不可能である。翻訳技法を提案しても、その技法がどれか一つでなければならないというわけでもないことを断っておきたい。場合によっては、どの技法も可能である。当の文化語彙の「独立性」（その文化語彙が主要内容であるかどうか）、目標テキストの読者の文化的背景、関心の有無など、訳者が主観的に設けた一連のフィルターを通して判断するしかない。

また、文化語彙の翻訳という語彙レベルの翻訳について論じてはいるが、解説系サインの翻訳は、決して文化語彙だけのことではない。文化情報の説明、補足は、文章全体やその他媒体との統合などの立場に立って総合的に考える必要がある。文化語彙の翻訳は、文章全体における語彙と語彙、文と文との関係、さらに所在の文章と写真や展示物などとの補完関係を視野に入れなければならない。

※ 本論文の例文は、全て「国立歴史民俗博物館」の解説系サインによる。なお、訳文は、筆者が原訳文を参考に作り直したものである。

参考文献

- [1] 日本政府観光局公式サイト <https://www.jnto.go.jp>
- [2] 宮偉 (2016)『公示語日訳策略研究』日語学習与研究
- [3] 日本国土交通省観光庁 (平成 26 年)『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』
- [4] 藤濤文子 (2007)『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』松籟社
- [5] 霜崎實 (2013)『文化語彙の翻訳はどこまで可能か?』日本エドワード・サピア協会研究年報
- [6] 藤濤文子 (2004)『文学テキストの翻訳に見る異文化コミュニケーション行為 — 評価分析のための方法 —』ドイツ文学第 2 巻第 5 号
- [7] 常敬宇 (1995)『漢語詞匯与文化』北京大学出版社
- [8] 陳建民 (1989)『語言文化社会新探』上海教育出版社
- [9] 楊德峰 (1999)『漢語与文化交際』北京大学出版社
- [10] 張高翔 (2003)『对外漢語教学中的文化詞語』雲南師範大學學報
- [11] 王克非 (2016)『论中国特色文化词汇的翻译』外語与外語教学
- [12] 周世培 (2015)『蓝译本<阿 Q 正传>中文化词的翻译策略探讨』貴州民族大學學報 (哲学社会科学版)
- [13] 潘小多 (2008)『论「古都」中文化現象的翻譯』日語學習与研究
- [14] 潘流霞 (2012)『以<雪国>为例浅谈关于文化因素的翻译策略』黑河學刊
- [15] 邱倩 (2013)『从歸化与异化的視角淺談<古都>中文化詞語的漢訳』現代語文
- [16] 甘菁菁 (2016)《論<細雪>漢訳本中文化詞匯的翻譯》湖北科技学院學報
- [17] 伍鳳 (2015)『旅游資料中文化負載詞的分类及英訳研究』重慶科技学院學報社会科学版
- [18] 閔宜平 (2011)『旅游文本中漢語文化詞的日語翻譯策略』厦門理工學院學報
- [19] モナ・ペイカー&カブリエラ・サルダーニャ (2013)『翻訳研究のキーワード』研究社
- [20] 王彬彬 (1998)『隔在中西之間的日本 -- 現代中国語の中の日本語「外来語」問題』『上海文学』
- [21] 柳父章 (1976)『翻譯とはなにかー日本語と翻譯文化』法政大學出版
- [22] 呂和発・蔣璐 (2013)『景点解説翻譯的跨文化詮釈』中国对外翻譯出版有限公司

日语教学中形式名词分类问题研究

刘 曼
杜 勤
上海理工大学

1. 引言

日语里把名词中表示实质性概念的词叫作实质性名词,例如“おさけ(酒)、いぬ(狗)、学生(学生)、日曜日(星期天)”等;把不能单独使用、需要前接“修饰语(定语)”才能完成完整语义的词称作形式名词,例如“こと、もの、ところ、つもり”等。这仅仅是从语义上简单划分的实质性名词和形式名词,日语的形式名词具有独特的语法功能,在句法表现中用法非常丰富,仅从语义角度来划分无法全面反映形式名词的特征。本稿拟从形式名词的句法功能,并结合语义来阐释和厘清形式名词的分类问题。并且考察《综合日语》(北京大学出版社)第3册和第4册中「もの」「こと」的导入内容,结合形式名词的分类和句法功能提出建议。

2. 何谓形式名词

2.1 名称的由来

“形式名词”最早由松下大三郎使用,之后也被称作过“形式体言”。佐久间鼎曾使用过“吸着语”这一独特的称呼。由于形式名词的一部分也可以与系词相结合,在句末承担助动词的功能,扩大了使用范围,这部分形式名词亦被称为句末名词。目前上述的各种命名称呼在日语学界一般被统称为“形式名词”。

2.2 定义

关于形式名词的定义,日语学界有从语义角度,也有从句法功能角度来阐释。以下2点值得关注。

- (1) 形式名词与名词的语义关系。形式名词虽然具有名词的语法功能,但一般被认为“名词的语义很淡薄”或“失去了名词的实质性语义”。这一特征与形式动词(する、ある)、形式形容词(ない、ほしい)具有同样的“形式性”语法特征,但是又与形式动词和形式形容词不同;“名词的语义很淡薄”这一概念很难界定,是“没有实质性名词的语义”,还是具有“部分名词的实质性语义”。这一点在探究形式名词的语义时需要区别、分类对待。比如形式名词的代表之一——“こと”,本来就是抽象名词,实质性语义较淡薄,所以很难界定它做实质性名词和形式名词时的语义特征的区别。
- (2) 形式名词的句法特征。形式名词必须前接修饰语(定语),才能表达实质性语义。

认定形式名词时，本项非常重要。即使作为名词的语义不淡薄，如果去除前接的修饰语，就无法表达完整的语义，则仍可判断为形式意义上的名词。形式名词必须前接修饰语这一项较（1）项客观，在判断是否为形式名词时是一项重要的依据。

2.3 形式

形式名词的定义中，“名词的非实质性语义”、“是否前接修饰语”这2项中，后项更为重要。另外也有诸多学者对形式名词的外在形式进行了研究。日语词典和语法辞典所认定的形式名词的具体形式和种类，总共有近50个。其中所有的辞典都认定“こと”为形式名词，未涉及的形式名词有“次第”，还有佐久间鼎“吸着语”中提及的除“次第”之外的“連中、はなし、始末、あたり、節、まで”⁽¹⁾等，可见日语学者认定的形式名词的范围较辞典所列的更为广泛。

从名词派生出的副助词有“くらい、ばかり、ほど”，这些词无需加“の”，直接接在名词后面，是与其他形式名词用法不同的一个类别，属于助词的范畴。其中分歧最大的是“の”。“の”被看做准体助词，或者被看做形式名词。由此可见，副助词、准体助词和“名词”之间存在着形式名词，因此形式名词介于其之间，具有不同表达形式和多样化句法功能。

综合上述内容，形式名词可如下定义：名词中全部或部分失去实质性名词语义的词，在句中出现时一般需要前接修饰语才具有具体语义；与实质性名词相比，在句中具备多种语法功能，与系词结合可在句末充当助动词功能。

3. 形式名词的分类

3.1 分类

形式名词因无统一的形态特征以及句法功能的多样化，很难将其简单统一分类，这也是形式名词研究和习得中的一个难点问题。佐久间鼎按照形态（名词、形容词或副词）及语义特征进行了如下的分类⁽²⁾。

I 名词性的吸着语（统称为形式名词）

- (1) 与人有关的（ひと、かた、やつ等13种形式）
- (2) 与物有关的（の、もの、ほう等4种形式）
- (3) 与事情有关的（こと、はなし、てん等13种形式）
- (4) 与事态、情形有关的（場合、始末、はこび、など等15种形式）
- (5) 与场所有关的（ところ、あたり、方等7种形式）、
- (6) 与时间有关的（とき、うち、あいだ等9种形式）
- (7) 表示程度（无特定的形态）
- (8) 表示事由（ゆえ、ゆえん、つもり等9种形式）

II 有关状态的吸着语(たら、らしい、ような)

III 副词性及接续词性吸着语

(1) 接在体言(包括名词、代词和数量词)后面:だけ、ばかり、ぐらい等12种形式;

(2) 接在用言(包括动词、形容词、形容动词)后面:とおり、まま、くらい等7种形式。

IV 与时间有关的吸着语

(1) 接在“する”“した”后面:とき、ところ、ころ等15种形式;

(2) 接在“する”后面:うち、最中に、まえ等10种形式;

(3) 接在“した”后面:のち、あと、すえ等8种形式。

V 有关条件、理由的吸着语:以上、分には、ことには等8种形式。

此后,高桥太郎(2005)从前接动词句的名词向形式名词转化的角度,进行了如下4种分类,揭示了形式名词的句法功能⁽²⁾。

(1) 向词性范畴化的形式名词转化

例1:まるでおどくるうかたちであるきだした

译文:像疯狂跳舞一般走了起来。

(2) 向相当于补助动词的形式名词转化

例2:これからシドニーへ帰るところだ。

译文:我正打算回悉尼。

(3) 向相当于接续助词的形式名词转化

例3:田中は市川を知るまえに、まず涼子のほうを知った。

译文:田中在认识市川前,先认识了凉子。

(4) 向相当句末助动词的形式名词转化

例4:田中も山下もさすがにもてあましたようすだった。

译文:田中和山下都确实不好对付。

例5:かれはごうぜんとつぎのようにこたえたよし。

译文:听说他很傲慢地做了如下的回答。

村田美穗子(2008)曾把形式名词的功能分为2大类:一是名词句、名词短语中的形式名词,即用做主语或补语,主要为“こと”“ところ”。另一是用做名词性谓语的形式名词,此类形式名词包括不参与语气表达(せい、とおり、まま)与参与语气表达的(こと、ともり、はず、もの、わけ)的2类。村田美穗子把“语法名词”,分为真正型(こと)、时空型(時分、まえ、あと、ところ、ほう等)、形式型(つもり、はず)、引导叙述型(とおり、まま)4类⁽³⁾。并进一步按照形式名词的句法功能,分为助述词“こと、もの、わけ、おかげで、せい、そう(传闻)”;量化词“だけ、ばかり、のみ、など、まで、くらい、ほど、きり、から等”;形容性词“よう、ふう、みたい、そう”3类。但是村田的分类命名较难理解,但其中提出的“语法名词”涉及了形式名词的句法功能,值得注意。

3.2 名词的形式名词用法

认定形式名词的一个重要标准是前接修饰语。一般的名词即使前面不接修饰语也可使用，但是有些名词出现在特定的句子中时，前面也必须接修饰语。

原本属于一般名词的部分名词，在特定的句法成分里就具有形式名词的性质和用法，被称为“固定形式”或“语法化的形式”。比如“顔（脸）”这个名词，本来就是普通名词，一般会说“顔を洗う（洗脸）”、“顔の真ん中（脸的正中间）”等，但是下列的句子中就需要前接修饰语。

例 6：雪子は悲しそうな顔をしていた。

译文：雪子看上去很忧伤。

例 7：花子は明るい性格だ。

译文：花子性格开朗。

例 8：なんだか歌いたい気分だ。

译文：有种想唱歌的冲动。

以上这类名词的用法，被新屋（1989）称为“句末名词”，即部分名词在句末做谓语、前接修饰语时也有类似形式名词的用法；但这类名词不是语义完全淡薄的形式名词，有的学者认为是介于名词和形式名词之间的用法。

4. 形式名词的句法功能

4.1 名词的 3 大句法功能

形式名词源于名词的语义弱化，也具备名词在句中的句法功能，因此先探讨一下名词的句法功能。名词的句法功能主要有以下 3 大类。

- (1) 后接助词成为句子的主题或主语、宾语等的补助修饰语、或者做连用修饰语（相当于汉语的状语）。除了省略的情况，一般需要后接助词；偶尔也有不接助词的情况，比如名词中的数量词和表示时间的词。
- (2) 后接连体助词“の”，起到连体修饰语（定语）的作用；也有无需后接“の”即可作定语的情况，比如复合名词“春風（春风）”，以及临时合成语的情况，例如“イラク攻撃（打击伊拉克）”。但是一般情况下，都需要后接“の”，起到连体修饰语（定语）的功能。
- (3) 后接“だ”做谓语。

以上是名词在句中的三大句法功能，分别为：连用修饰语、连体修饰语和谓语。

4.2 形式名词的 3 大句法功能

形式名词和名词一样,也有 3 大句法功能,这也是形式名词分类的重要依据之一。

- (1) 做连用修饰语。主要在句中做主题或补语以及在复句中做从属连语,在做从属连语时经常无需后接助词。比如形式名词“こと”有如下用法。

例 9: パソコンを選ぶことは難しい。

译文: 挑选手提电脑很难。

例 10: パソコンを買うことが必要だ。

译文: 需要买台手提电脑。

例 11: パソコンを売ることを考えている。

译文: 在考虑卖电脑。

例 12: パソコンを買うことに決めた。

译文: 决定买电脑了。

例 13: パソコンを買わないことには、仕事ができない。

译文: 不买电脑没法工作。

例 14: 長いこと、ここにいた。

译文: 我曾在这里呆过好长一段时间。

上述例句中的最后 1 句,“こと”后面就无需接助词,其他的例句都需要后接助词,完成句中的连用修饰语(相当于汉语的状语)功能。

- (2) 做连体修饰语(相当于中文的定语)。例如下列句子。

例 15: パソコンを買うことのメリットを考える。

译文: 考虑买电脑的好处。

- (3) 做谓语。例如下列的例句。

例 16: 趣味はパソコンを設計することだ。

译文: 我的爱好是设计手提电脑。

例 17: 効率を上げるには、パソコンを買うことだ。

译文: 买手提电脑以提高效率。

5. 形式名词在复句中的句法功能

5.1 复句的分类

形式名词前接连体修饰语可作主题、主语等的补足语,除此之外用做连用修饰成分时即是复句的从属节。形式名词在复句中的从属节首先分为连体节和连用节,连体节包括名词修饰节(连体修饰节)和补足节(疑问节和名词节);连用节包括副词节和并列节。形式名词在复句中的句法功能是其另一重要的分类依据。

5.2 连用节中的形式名词

复句连用节中的形式名词出现较多，下面主要以连用节中的形式名词的功能为例，总结下复句中形式名词的句法功能。复句中连用节起到重要的作用，按照与主节的关系可分为副词节（从属、非对等的）和并列节（独立、对等的）。

- (1) 副词节中的形式名词可表示条件、原因、目的、样态、时间和逆接条件等。

例 18：薬を飲まない限り、熱は下がらない。

译文：只要不吃药，就不会退烧。

例 19：薬を飲んだ場合でも、熱は下がらないことがある。

译文：有时即使即使吃了药，也不退烧。

例 20：驚いた様子で、こちらを見た。

译文：（他或她）吃惊地看着我。

- (2) 并列节中的形式名词表示顺接、并列和逆接等。

例 21：薬を飲んだ上に、注射もした。

译文：吃了药，也打针了。

例 22：薬を飲む一方で、医者にも行った。

译文：吃了药，并去看了医生。

例 23：薬を飲んだところが、熱が下がらない。

译文：虽然吃了药，但没退烧。

以上，因为作为副词节在语义和形态上的多样化，所以复句中形式名词的副词节和并列节也具有多样化的语义和表现形态，形式名词与名词共同在连用节中起到重要的句法功能。而且上述的连用节中包含接续助词的语法，特别是表示“目的”、“时间”的形式名词出现频率很高。

6. 日语教材中形式名词的导入内容 - 以《综合日语》为例

众所周知形式名词的习得是中国学习者日语学习的难点之一，笔者本节结合上述形式名词的分类，利用中国高校普遍采用的教材《综合日语》中的形式名词「もの」「こと」的例句，考察形式名词在教材中的导入情况，以期对日语学习者形式名词的习得有所裨益。

本次考察的教材是《综合日语》第3和第4册，由彭广陆、守屋三千代编著，是普通高等教育十一五国家规划教材，被中国很多高校日语专业所采用。通过2年该教材的学习，全面提升学生“听、说、读、写、译”的5项专业技能，达到日语能力测试2级水平。

6.1 教材中“もの”的导入情况

- (1) ものだから〈理由〉

① A：気分が悪いの？

B：いえ、ちょっと…。ゲームのしすぎで、目が疲れたものだから。

- (2) ～ものだ〈物事の本質〉
②語の特徴を知っておくと、外国語がもっと理解しやすくなるものだ。
- (3) Vたものだ〈思い出・感慨〉
③子供の頃、放課後遅くまで外で遊んでよく親に怒られたものだ。
- (4) Vものなら〈条件〉
④一度でもお金を貸そうものなら、何度でも貸してくれと言ってくるよ。
- (5) ～ものの〈逆接〉
⑤適当な運動と食生活は体にいいとわかってはいるものの、なかなか実行できない。
- (6) Vたいものだ〈希望〉
⑥実践をどんどん積んで、ぜひ失敗から学んでもらいたいものだ。
- (7) ～というものではない〈否定的意見〉
⑦睡眠時間は長ければよいというものではなく、質の高い睡眠をとることが重要である。
- (8) Nといえるほどのものはない〈話し手の謙虚な態度を表す場合に用いられる〉
⑧ご馳走といえるほどのものはございませんが、どうぞ召し上がってください。

总结上述内容，如以下表1所示。

表1 《综合日语》（第3和第4册）中「もの」的导入内容

	从第3到第4册导入顺序	形式	语义
第3册	①	ものだから	理由
	②	～ものだ	事物的本质
	③	Vたものだ	回忆、感慨
	④	Vものだ	条件
	⑤	～ものの	逆接
第4册	⑥	Vたいものだ	希望、愿望
	⑦	～というものではない	否定意见
	⑧	Nといえるほどのものはない	不值得一提

6.2「こと」的导入情况

- (1) Nのことだから〈判断〉
①頑張り屋の彼のことだから、きっと合格すると思いますよ。
②田舎のことだから、二人の噂はすぐ広まるだろう。
- (2) ～ことになっている〈約束・慣例〉
③本学では、3年になるとゼミに所属することになっている。
- (3) ～というのは～（の）ことである〈解釈・説明〉
④学割というのは学生割引制度のことである。

- (4) ～ということは～（ということ）である〈解釈・説明〉
 ⑤人になるということは自分の行動に責任を持つということだ。
 (5) ～ということだ〈間接引用〉
 ⑥日本では、そばを食べるとき音を立てて食べてもいいということだ。
 (6) V ことはない〈必要がない〉
 ⑦電話で申し込んでもいいのだから、わざわざ行くことはない。
 (7) ～こととなる〈結果〉
 ⑧消費者は費用の 3 割を負担すればいいこととなった。
 (8) ～ことから〈原因〉〈根拠〉
 ⑨資金が不十分なことから、施設の運営が難しくなってきたようだ。
 ⑩指紋が一致したことから、同一人物と判断されたそうだ。
 (9) V ことなく〈未実現〉
 ⑪失敗を恐れることなく、どんどん挑戦していってください。

总结上述内容，如下列表 2 所示。

表 2 《综合日语》（第 3 和第 4 册）中「こと」的导入内容

	从第 3 到第 4 册导入顺序	形式	语义
第 3 册	①	N のことだから	判断
	②	ことになっている	约束、惯例
	③	～というのは～（の） ことである	解释、说明
	④	～ということは～（ということ） である	解释、说明
	⑤	～ということだ	间接引用
	⑥	V ことはない	不必
	⑦	～こととなる	结果
第 4 册	⑧	～ことから	原因、根据
	⑨	V ことなく	未实现

从上述表 1 和表 2 可以看出，教材中涉及的「もの」「こと」的表达形式较多，且多以固定句型表达为主。特别是表 1 中显示，《综合日语》第 3 册中，「もの」导入了 5 种句型，包括「～ものだ」、「V たものだ」和「V（よ）ものだ」。可见在大二上学期教材中已较为详细地导入了「ものだ」的语义用法。但在第 4 册导入「もの」的语义用法较少，分别是「V たいものだ」「～というものではない」「N といえるほどのものはない」。同样，第四册中「もの」的导入内容也是以固定句型的语义用法为主。

表 2 显示，《综合日语》第 3 册中，「こと」导入了 7 种句型。其中「～というのは～（の） ことである」「～ということは～（ということ）である」「～ということだ」是一组近似用法，教材中进行了详细地对比说明。但在第 4 册导入「こと」的语义用法较少，只有两种，分别是「～ことから」「V ことなく」。

6.3 教材中形式名词导入内容的提案

从上述内容可见在《综合日语》第3册中,「もの」「こと」的语义用法介绍内容较多,以固定句型用法为主;而第4册相对导入内容较少。整体上,《综合日语》此2册教材中「もの」「こと」的导入内容分配不均衡。另外,教材中对于形式名词的分类方面内容基本没有涉及,关于形式名词的定义、句法功能以及在复句中的用法也只是略微提及,没有详细解释,所以学生对形式名词的认识基本停留在固定句型、固定搭配的接续形式和语义用法上,很难对形式名词从定义、分类、句法功能等方面有一个整体性、系统性把握,所以学生在作文、翻译造句时使用形式名词较少,一些用法复杂的形式名词也很少涉及。因此,依据上述情况,提出如下建议:

(1) 可在中级教材中,适当导入有关形式名词定义、分类方面内容,让学生对形式名词有一个系统性掌握。如:形式名词与实质名词的区别和联系;形式名词在句中的语法功能及相应的例句;常用形式名词的语义用法说明。

(2) 中级教材中形式名词的导入内容,可从用法简单的类别开始,逐步引入语义用法和句法功能多样复杂的类别。

(3) 高级教材中,可导入形式名词在复句中的用法,并对其进行归类总结,让高年级学生不仅掌握形式名词的多样化用法,也会有意识地在作文中运用形式名词。如:从属关系和并列关系复句中常出现的形式名词的语义用法和句法功能。

7. 结语

形式名词是名词的一种,与一般名词在句法功能中的用法基本一致。名词中有一部分名词语义较抽象,并且需要前接修饰成分来完成具体要表达的语义;此部分的名词因其必须前接修饰语就逐步形成一类特殊的名词-形式名词。形式名词与名词一样,在句中具有3大语法功能——连用修饰语、连体修饰语和做谓语。连用功能中,前接连语构成连用节做复句的从属节。连用节的具体表现形式分为副词节和并列节,形成了多样化语义的从属节。形式名词的分类和句法功能方面内容,也可在教材中结合语义用法由浅入深地进行导入,而不仅仅局限于固定句型的习得,这对学生学习形式名词这一难点或许有所裨益。

注:

- (1) 佐久間鼎. 現代日本語の研究 [M]. くろしお出版, 1983: 336.
- (2) 高橋太郎. 名詞述語文における主語と述語の意味的な関係 [J]. 日本語学, 1984 (3): 18-39.
- (3) 村田美穂子. 体系日本語文法 [M]. すずさわ書店, 2008: 44-47.

参考文献

- [1] 大島資生. 日本語連体修飾節構造的研究 [M]. 東京: ひつじ書房, 2010.
- [2] 国立国語研究所. 日本語学論説資料第2冊 43-2 [J]. 論説資料保存会, 2006.

- [3] 小川芳男・林大他編集. 日本語教育事典. 日本語教育学会, 1982.
- [4] 彭广陆・守屋三千代编. 《综合日语》(第3册) 北京: 北京大学出版社, 2005.
- [5] 彭广陆・守屋三千代编. 《综合日语》(第4册) 北京: 北京大学出版社, 2006.

※ 本文受 2019 年度上海理工大学外语学院博士科研基金项目资助

《红楼梦》概念隐喻的日译研究

——以“芙蓉喻黛玉”为例

蔡春晓

重庆师范大学 北京外国语大学

1. 理论支持和先行研究

George Lakoff 和 Mark Johnson 提出的“概念隐喻 (conceptual metaphor)”和“映射论 (mapping)”，一改传统隐喻学只局限于修辞学范畴的研究状况，开始从认知语言学角度来诠释隐喻，实现了隐喻学的认知转向，极大地发展了现代隐喻学。隐喻学理论的变革也必然对隐喻翻译研究带来影响。

概念隐喻，即是通过一个概念理解另一个概念的过程。一个概念隐喻包括两个概念域：被理解的目标域 (target domain) 和作为理解手段的源域 (source domain)，两者之间形成特殊的映射关系，此关系成立的基础是一个民族共通的肉体、社会及文化体验。

在《红楼梦》中，曹雪芹也运用了大量的概念隐喻。肖家燕指出，作品有两个大的主题概念隐喻：第一，人生是一场幻梦 / 悲剧；第二，社会是黑暗的现实。其他隐喻都与这两个主隐喻有着内在关联。然而，在《红楼梦》翻译研究领域，隐喻研究并不受关注。目前为止，对《红楼梦》英译的隐喻翻译进行了较为系统和全面研究的有三个论著。首先，郑元会的《红楼梦隐喻翻译的必要条件》，从语用学角度提出了影响隐喻翻译的三大要素：语言、文化和社会背景。此外，缪建维的《Cognitive Restructuring of Metaphors in Two English Version of Dream of Red Chamber》，以概念隐喻的映射为切入点比较了杨、霍两个英译本⁽¹⁾。再就是肖家燕的《红楼梦概念隐喻英译研究》，将作品中的概念隐喻分为六大类，分析杨、霍两个英译本的译法，探讨其翻译策略并分析其原因。而针对日译本隐喻翻译的研究，目前较为系统的只有戴莉《关于隐喻表现中译日的考察——以〈红楼梦〉日译为例》和吴珺《伊藤漱平〈红楼梦〉日译本隐喻翻译研究》两篇，且都是从修辞学角度来研究《红楼梦》的隐喻的。

“文学作品中隐喻的翻译过程实际上是一个在目标语中再现从源域到目标域的映射的过程，而不是单纯的喻体转换过程；是一个思维到语言的互动过程，而不是语言层面的符号转换过程”，“透过翻译结果或译文可以深层次地挖掘译文产生的文化、心理等内在因素，从隐喻的文化认知根源，阐释策略取舍动因、差额翻译的内在原因等”（肖家燕 2009）。对概念隐喻翻译的研究，是包括《红楼梦》日译研究在内的《红楼梦》翻译研究的重要一环。

本文试图从以文学文本为载体的文化体验的角度来诠释形成概念隐喻之基础。并通过两个民族相关文化体验的差异，来解释概念隐喻翻译过程中差额翻译产生的原因及其翻译效果。具体来说，本文以“芙蓉喻黛玉”这一概念隐喻为例，考证中日两国承载于各自文学文本中的“芙蓉”之概念和意象的差异，探讨差额翻译产生的原因，分析其对译文中黛玉这一人物形象的塑造所可能产生的影响。

2. 《红楼梦》中“芙蓉喻黛玉”的概念隐喻

《红楼梦》中，曹雪芹借用了各种“花”的概念来隐喻不同女性角色的美貌、才情、品性和命运。“以花喻女子”的概念隐喻亦是为整部作品“人生是一场悲剧，社会是黑暗的现实”的主隐喻服务的。

不仅在中国，“以花喻女子”在世界上诸多国家和民族的文化中都是十分常见且被广泛理解的一种概念隐喻。譬如日本古典名著《源氏物语》，也同样用“桐花”、“紫藤”、“夕颜”等花卉来隐喻不同的女性角色。不过，虽然这一概念隐喻在世界各国文化中普遍存在，但具体每一种花具有怎样的意象？哪一种花能隐喻什么样的女子？其背后，是各民族不同的审美意识、价值取向等等，也即是各民族不同的文化体验在起着决定性的作用。

第六十三回，钗黛等人作“占花名儿”之戏，各自抽到了不同的花签。轮到黛玉时，有这样一段描写：

黛玉默默地想：“不知有什么好的被我掣着方好。”一面伸手取了一根，只见上面画着一枝芙蓉，题着“风露清愁”四字，那面一句旧诗，道是：

莫怨东风当自嗟。

注云：“自饮一杯，牡丹陪饮一杯。”众人笑说：“这个好极。除了他，别人不配作芙蓉。”黛玉也自笑了。

可见，“芙蓉喻黛玉”得到了大家以及黛玉本人的认可。此外，第七十八回宝玉为凭吊芙蓉花神晴雯作了《芙蓉女儿诔》。庚辰本脂评云：“明是为阿颦作谶。”（冯其庸 李凡希 2010）靖藏本脂评云：“知虽诔晴雯，实乃诔黛玉也。”（同上）可见两回的芙蓉应是同一种花，既喻黛玉亦喻晴雯。

芙蓉，分为水芙蓉和木芙蓉两种。水芙蓉即是睡莲科的草本水生花卉——荷花，而木芙蓉则是一种锦葵科的陆生木本植物。关于这里的“芙蓉”究竟是水芙蓉还是木芙蓉，一直是中国学界争论的一大课题。

2.1 关于“芙蓉”的论争

学界关于“芙蓉”的论争，始于《红楼梦学刊》1979年第一辑上所登载的学刊顾问王昆仑的一首昆曲曲词《芙蓉赞》，其中有一句“芙蓉池上昂昂立”，显然将“芙蓉”理解为“水芙蓉”。此后，该刊81年第三辑上萧嘉发表了短文《花梨与芙蓉》，83年第一辑上又登载了陈平的论文《“红楼”芙蓉辨》，先后对“芙蓉=水芙蓉”的观点进行了有理有据的反驳。自此，“芙蓉=木芙蓉”的看法在中国红学界几成定论。

然而，也有少数学者坚持认为“芙蓉”指的是“水芙蓉”。俞香顺就在《林黛玉“芙蓉”花签考辩》一文中，通过分析花签所题诗句的渊源以及木芙蓉与荷花的地位悬隔，得出黛玉的“芙蓉”为荷花的结论。张庆善也在论文《说芙蓉》中主张：“黛玉的芙蓉是荷花，而晴雯的芙蓉则是木芙蓉”（张庆善 1984）。有趣的是，无论是“芙蓉=木芙蓉”的观点还是“芙蓉=水芙蓉”的主张，都能在文本中找到各自的依据。

2.2 日本学界对“芙蓉”的理解

与中国学界的激烈论战不同，日本学界似乎理所当然地认为“芙蓉”乃“水芙蓉”，甚至并未意识到“芙蓉=木芙蓉”的可能性。比如，日本红学家合山究的论著《红楼梦新论》中有《红楼梦与“花”》一章，其中论及《红楼梦》中的花的象征性时，也将隐喻黛玉的芙蓉注音为“はす”。同时指出，“她是西施型的美人，其飘飘婀娜的姿容，所谓闲静如‘娇花照水’之处，与‘风露清愁’的芙蓉最是匹配”（合山究 1998）。并在尾注中援引梁辰鱼的戏曲《浣纱记》佐证了西施与莲及采莲歌的关系。

直到 1997 年，日本红学家伊藤漱平在《〈红楼梦〉中作为象征的芙蓉与莲——以林黛玉、晴雯及香菱为中心》一文中，才首次论及“芙蓉”是“木芙蓉”的可能性，又详细介绍了中国学界关于芙蓉的论争过程，并在此基础上从多个全新角度进一步论证了“芙蓉=木芙蓉”的观点。

2.3 中国文化中“芙蓉”的概念

“水芙蓉”也好，“木芙蓉”也罢，无可否认的是，在中国文化发展历程中逐渐形成的关于“芙蓉”的概念和意象，正是“芙蓉喻黛玉”的概念隐喻能够成立并被不同时代的中国读者所接受和理解的基础。而这些概念和意象又承载于作为中华民族共通之文化体验的传统诗词等文学文本之中。

2.3.1 作为“水芙蓉”的芙蓉

屈原《离骚》中“制芰荷以为衣，裁芙蓉以为裳”（刘向 2015）之句，第一次为“荷花”取下了“芙蓉”的别号。关于荷花的文化内涵和审美意象的研究虽多，但单论“芙蓉”的却极少。葛明静的硕士论文《古典文学中芙蓉的审美意象探析》以朝代更迭和文化的变迁为主线，对包括水芙蓉和木芙蓉的芙蓉意象进行了较为全面和系统的整理和归纳。此外，日本学者铃木义昭的《李商隐诗中的芙蓉——以无题诗“八岁偷照镜”为主》一文，也以 18 首出现了“芙蓉”的李商隐诗为例，分析了其中“芙蓉”的意象。

然而，葛明静的论文在论述水芙蓉意象时，是将其完全等同于荷花的意象来进行考证和论述的，所举的用例也不仅限于“芙蓉”，还有大量“莲”、“荷”等的例子。事实上，“芙蓉”、“莲花”、“荷花”等虽然都指的是荷花，但在具体用法上却各具特点。日本学者市川桃子在《诗人的个性——以“芙蓉”、“莲花”、“荷花”、“菡萏”、“藕花”分析》一文中，以《全唐诗》为例分析了以上五词在唐诗中的用法及特点，并指出：“芙蓉”多用作修饰语，用来描摹物体。

笔者在分析归纳了《红楼梦》中荷花不同说法的用例之后，也发现了类似现象。单纯表示具体的植物或食物等实物时多用“荷”、“莲”或“藕”，而“芙蓉”则仅有一例，其他的均用于修饰衣物、织物或器物，或是隐喻人物。即便在同样用于物体时，“莲”、“荷”、“藕”也主要用来具体形容物体的图案、颜色和形状等，而“芙蓉”则多为“芙蓉簪”、“芙蓉灯”、“芙蓉绦”等相对抽象、固定的偏正结构组合词，还常见“筵开玳瑁、褥设芙蓉”等套语。可见，即便同样意指荷花，“芙蓉”较之“莲”、“荷”、“藕”等，也是更具修

饰性和抽象性的一种表述方式。

故此，本文且以上述先行研究所举用例和所得结论为基础，进一步对“（水）芙蓉”的意象和内涵进行提炼和总结。在中国文化中，“（水）芙蓉”除了被视作是夏季或秋季的代表性植物和景致之外，大致还包含了五种意象。

第一、美人意象。“以荷花喻美人”的传统最早可追溯到《诗经》。作为荷花之别称的“芙蓉”，自然也承载了这一意象，在历代诗文中极为常见。

第二、爱情意象。从美人意象衍生出“思妇”意象，加之“莲”与“恋”、“怜”谐音，荷花便成为了咏叹男女欢爱及离别、相思之情的重要素材，“芙蓉”也同样承载了这一意象。“采芙蓉”、“并蒂芙蓉”等皆是表达爱情意象时常用的典故；“芙蓉”还谐音“夫容”，常用以暗喻对丈夫的思念。此外，作为修饰语与其他词组成相对固定的抽象性词汇这一“芙蓉”的独特用法，也常用于表现此意象。比如隐喻男女欢爱的“芙蓉帐”、“芙蓉绣”，又如营造男女分别时的凄凉与不舍的“芙蓉浦”、“芙蓉渡头”等等。

第三、富丽堂皇之场景的意象。因为“芙蓉”一词蕴藏了男女欢情的浪漫气氛，所以也由此衍生出烘托富贵华美之场景和氛围的意象，进而演变成起美化作用的修饰语。比如，宫宇豪宅常被称作“芙蓉殿”、“芙蓉阙”等；“芙蓉褥”、“芙蓉灯”等相关织品或饰物也常用来渲染富贵华丽的氛围；而“芙蓉篇”、“芙蓉剑”、“芙蓉府”等中的“芙蓉”则是修饰性的美称。

第四、宗教意象。虽然同样意指荷花，相较“莲”强烈的佛教色彩，“芙蓉”则更侧重于道教的仙境、仙人意象。“芙蓉”常被视为仙境之物，“芙蓉帔”、“芙蓉巾”等均被视作是仙人所特有的服饰或事物，“把芙蓉”的仙人形象在中国诗词中更是常见。北宋开始广为流传的“芙蓉城”、“芙蓉仙子”等传说，亦是“芙蓉”道教意象的一种反映。

第五、隐士、君子意象。由“芙蓉”的仙人意象，衍生出超然出世的隐士意象。“荷衣”一词出自屈原《离骚》“制芰荷以为衣，裁芙蓉以为裳”之句，在后世成为了“一个‘语码’，与朝服对立，是隐者之服，体现了避世之志，高洁之情”（俞香顺 2003）。“芙蓉裳”是“荷衣”的另一种说法，“芙蓉”亦常作为幽人隐士爱赏玩、喜种植的花卉出现在诗词中。此外，随着宋代儒者以儒家思想为核心进一步融合佛、道思想，“荷花”的君子意象也进一步确立，其内在人格意象更加丰富和成熟。“芙蓉”也在一定程度上承载了此意象，尽管比较少见。

不难看出，以上五种“（水）芙蓉”的意象中，第一、二、三种意象之间，第四、五种意象之间，又分别相互关联、自成一脉。

2.3.2 作为“木芙蓉”的芙蓉

据《中国植物志》介绍，芙蓉是一种锦葵科、木槿属植物，花大色丽，花期在8-10月。《日本大百科事典》又说，“芙蓉”在唐代以前都仅作莲花的别称，而陆生的芙蓉称作“木芙蓉”，直到宋代才开始单称为“芙蓉”。至于为何会与荷同名，李时珍的《本草纲目》评曰：“艳如荷花，故有芙蓉、木莲之名”（李时珍 2004），可见是由于花形花色相似之故。

“木芙蓉”最早出现在诗文中，据《广群芳谱》所载，可追溯到隋代江总的《木槿

赋》，但直到中唐，才逐渐成为偶可一见的诗歌素材。到了宋代，木芙蓉终于得到了广大文人的赏爱，吟咏木芙蓉的佳作也大大增加。关于“木芙蓉”的“芙蓉”的概念和意象，已有不少全面系统的研究⁽²⁾，本文也不再举例分析，只做一个总体归纳：

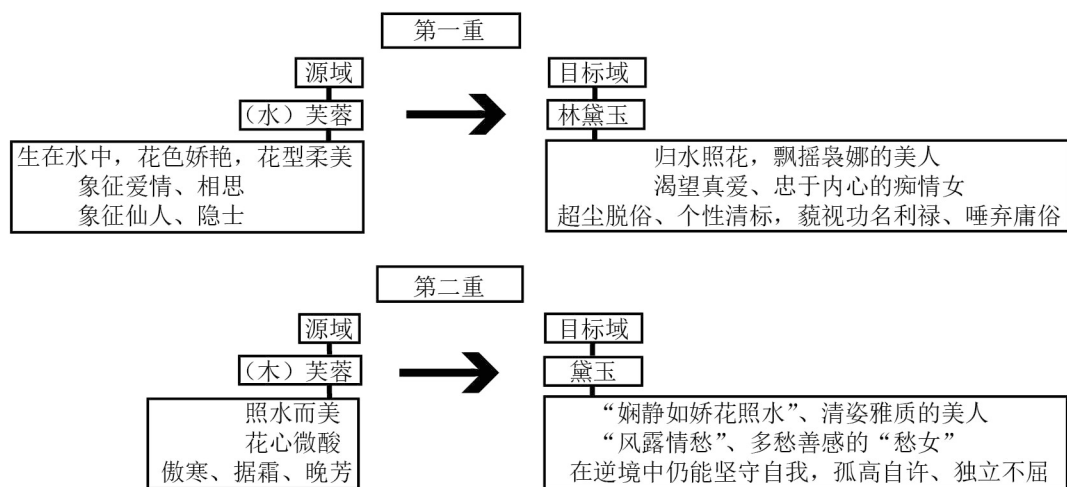
第一、临水而生，照水而美，花色娇艳，清丽雅致，乃秋日里的一抹亮色，亦堪比清丽可人、妩媚娇柔的美人。

第二、开在秋日且花心微酸，文人将其与清愁联系起来，多用以比拟“愁女”。

第三、据《广群芳谱》卷39载，木芙蓉又称“拒霜花”，“最耐寒，不落不结子”（汪灏 1970）。又赞“此花清姿雅质，独殿群芳，秋江寂寞，不怨东风，可称俟命之君子也”（同上）。其“拒霜”、“晚芳”的特质常被文人用之与“菊”并称。

2.3.3 黛玉是双重概念融合后的理想形象

那么，隐喻黛玉的“芙蓉”，究竟是“木芙蓉”还是“水芙蓉”呢？上文所提张庆善之文中指出：“芙蓉之争”的“争论各方都能从小说文本中找到根据，可见小说中对芙蓉意象的描写本身就存在‘矛盾’，‘出现这种矛盾是作者故意为之’，这“是《红楼梦》中的惯用手法”（张庆善 1984）。笔者赞同这一观点，但并不认为作者故意模糊掉两者之间的界线仅仅是为了以晴雯的木芙蓉隐射黛玉的水芙蓉。笔者认为，曹雪芹故意采用虚虚实实、矛盾重重的写法模糊掉“木芙蓉”和“水芙蓉”两者的界线，是为了同时将这两种意象寄托在黛玉身上，换言之就是要通过“水、木芙蓉”的双重概念来映射黛玉这一人物形象。袁茹就在《林黛玉的花名签》一文中首发新声，从花签题诗的出处着手，提出林黛玉的花签上的芙蓉是水芙蓉和木芙蓉的结合体。葛明静在其硕士论文中也从多个新角度论证了“黛玉是水芙蓉和木芙蓉融合后的理想形象”（葛明静 2012）。在这一全新解读的基础上，再通过上文对“水、木芙蓉”之概念和意象的系统梳理和总结，可知“芙蓉喻黛玉”的概念隐喻形成了如下的双重映射关系：



中国传统文学文本中，承载着关于“水、木芙蓉”的中国民族共通的文化体验。正是以这样的文化体验为基础，曹雪芹才会想到要借“芙蓉”来塑造黛玉这一人物形象，“芙蓉喻黛玉”的映射关系才得以成立。也正是以这样的文化体验为基础，当时乃至今日的中国读者才能接受和理解这一概念隐喻，并通过“芙蓉”的双重概念进一步把握黛玉这一人物。可以说，曹雪芹借用“芙蓉”的双重概念，将林黛玉这一人物塑造得更加丰满形象、入木三分。不仅仅烘托了她“临水照花、飘摇袅娜、清姿雅质”的外在美，更暗隐了她富有隐士清操和君子风骨的内在美和精神力量。

那么，在《红楼梦》的日译中，“芙蓉”被译成了什么呢？在目标语言日语中，“芙蓉喻黛玉”的概念隐喻是否实现了如上文所述的等值的映射关系呢？

3. “芙蓉喻黛玉”的概念隐喻的日译及其效果和原因

3.1 四个全译本⁽³⁾的译法

	原作	国訳本	松枝本	伊藤本（第五版）	新訳本
第六十三回	只见上面画着一只芙蓉	はすのはな 芙 蓉	は す 芙蓉	ふよう 芙蓉（はすの花）	芙蓉
	除了他，别人不配作芙蓉	はすのはな 芙 蓉	はすのはな 芙 蓉	芙蓉	芙蓉
第七十八回	园中池上芙蓉正开	ふよう 芙蓉	は す 芙蓉の花	ふよう 芙蓉（木芙蓉、木蓮）	芙蓉の花
	他就是专管这芙蓉花的	ふよう 芙蓉	は す 芙蓉の花	芙蓉の花	芙蓉の花
	乃指芙蓉道	ふよう 芙蓉	は す 芙蓉の花	芙蓉	芙蓉の花
	猛然见池上芙蓉	は す 芙蓉	は す 芙蓉	芙蓉	芙蓉
	想起小丫鬟说晴雯做了芙蓉之神	は す の かみさま 芙蓉之 神	芙蓉の神	芙蓉の神	芙蓉の神
	乃看着芙蓉嗟叹了一会儿	は す 芙蓉	芙蓉	芙蓉の花	芙蓉
	如今何不在芙蓉前一祭	は す 芙蓉	芙蓉	芙蓉	芙蓉
	《芙蓉女儿诔》	ふようじょじ るい 「芙蓉女兒の誄」	ふようじょじのるい 「芙蓉女兒誄」	ふようじょじ し のびごと 「芙蓉女兒の誄」	ふようじょじるい 「芙蓉女兒誄」
	命那小丫头捧至芙蓉花前	はすのはな 芙蓉花	は す 芙蓉の花	芙蓉の花	芙蓉の花
	将那诔文即挂于芙蓉枝上	は す えだ 芙蓉の枝上	は す 芙蓉	芙蓉	芙蓉
	蓉桂竞芳之月	ようけい 蓉桂	ようけい 蓉桂	蓉（芙蓉）	ようけい 蓉桂（芙蓉）
	秋艳芙蓉女儿	しゅうえんふようじょじ 秋 艶芙蓉女兒	ふようじょじ 秋艶芙蓉女兒	秋艶芙蓉女兒	しゅうえんふようじょじ 秋 艶芙蓉女兒 (秋の花々を司る芙蓉女兒)
	死辖芙蓉	ふよう 芙蓉	は す 芙蓉	芙蓉	ふよう 芙蓉
	却是个人影从芙蓉花中走出	なし	は す 芙蓉の花	芙蓉の花	芙蓉の花

经对比可知，四个全译本中，国译本和松枝本都保留了原文汉字“芙蓉”，并通过假名注音将其译为“はす”、“はすのはな”等。伊藤本亦保留了原文汉字，但只在第六十三回首次出现和第七十八回首次出现以及诂文标题等三处标注了音读“ふよう”，并将第六十三回首次出现的“芙蓉”加括号注为“はすの花”，而将第七十八回首次出现的“芙蓉”加括号注为“木芙蓉、木蓮”。新译本则只照搬了原文的“芙蓉”二字，且只在诂文标题和正文中两处标注了音读“ふよう”，并没有明确译出是“水芙蓉”还是“木芙蓉”。

值得注意的是，伊藤本经过数次修正和改译，先后出了五版⁽⁴⁾。前四个版本在保留原文汉字“芙蓉”的基础上，利用括号加注或假名注音的方式，将两回的“芙蓉”均译为“はすの花”或“はちす”。只有1997年出版的最后一个改译本才将第七十八回的“芙蓉”译成了“木芙蓉・木蓮”。这一译法上的改变，在时间上与上文提到的伊藤的论文是吻合的。也就是说，伊藤本之前的两个全译本，加上伊藤自己的前四个译本，都无一例外将“芙蓉”译作“はす”。直到伊藤了解到中国学界关于“芙蓉”的论争并意识到“芙蓉=木芙蓉”的可能性更大之后，才开始出现了“木芙蓉・木蓮”等不同的译法。

3.2 日本文化中“芙蓉”的概念

日译全译本为什么会出现这样不约而同地将“芙蓉”译为“はす”的情况呢？首先需要了解“芙蓉”在日本文化中的意象。

3.2.1 作为“水芙蓉”的“芙蓉”

检索日本历代文学作品首先发现，在平安之前几乎找不到“芙蓉”一词的用例，且无论是二十一代集还是《国歌大观》都找不到一首出现过“芙蓉”的和歌，可见“芙蓉”应该并非日本文化的固有概念。笔者检索了《新编日本古典文学全集》⁽⁵⁾等丛书，在和文学的作品中发现了“芙蓉”的用例28例，其中意为“荷花”的“芙蓉”有23例，且具有美人意象的有19例，占了绝大多数。其中，化用自白居易《长恨歌》“归来池苑皆依旧，太液芙蓉未央柳。芙蓉入面柳似眉，对此如何不泪垂”（唐圭璋2018）的有8例，如：

1、太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、…——『源氏物語・桐壺』

2、芙蓉は面の如く、柳は眉に似たり。——『太平記・卷三十六』

另有6例则出自白居易《上阳白发人》中的“脸似芙蓉胸似玉”（唐圭璋2018），如：

3、上陽宮にながめたる女も、『眼は芙蓉に似たり、胸は玉に似たり』と誉めたり。——『浜松中納言物語・卷三』

4、丹花の唇うるわしく、芙蓉の眸あざやかなり。——『曾我物語・卷二』

不过，日本的用例与原典略有出入，并非用“芙蓉”来比拟“脸”而是比拟“眼”或“眸”。“新全集”指出其出典为《白氏文集》卷三之新乐府《上阳白发人》中的“脸似芙蓉胸似玉”，《白居易诗集校注》亦指出各版本中另有神田本等抄本作“脸似芙蓉”，可见，原诗在传入日本之初，“脸”就被录为“睑”，才导致后世化用时与原典出现偏差。

另外还有5例虽不是直接出自以上两句，但也同样是用“芙蓉”比拟女子的美貌，

其中大部分受《长恨歌》影响的痕迹十分明显。如：

5、唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨をおび、芙蓉の風にしおれ、…——『平家物語・卷三・赦文』

6、一度君王の面をまみえしより、袖の中の珊瑚の玉、掌の上の芙蓉の花と、見る目もあやに御心迷ひしかば、…——『太平記・卷三十六』

白居易的诗文对日本古典文学的影响无需赘言，而中国文学中“芙蓉即莲的别称，喻美人”的意象也随着白居易的诗句被日本文学和文化所广泛吸收并影响深远。

其实，荷花的美人意象早已出现于日本文学，比如日本最早的和歌集《万叶集》中，就有四首提到“莲”的和歌⁽⁶⁾，基本都与“美人”和“爱情”有关。可见，“以莲喻美人”及由此衍生出的“以莲喻爱情”的意象早已在日本文化中形成，甚至已成为日本固有传统诗歌——和歌的素材之一。然而到了平安时代，随着佛教思想的不断渗透，日本文化中“莲”的宗教色彩也越来越强，并逐渐取代了美人意象。平安时代及以后，“以莲喻美人或爱情”的诗文就几乎找不到了。日本学者阪本祐二亦指出：“日本不像印度和中国那样把莲视作女人的身姿。”（阪本祐二 1977）但唯有意指荷花的“芙蓉”，在日本文学文化中仍然保留了美人意象，相反其佛教色彩却十分淡薄。

在平安时代的众多用例中，唯一与“喻美人”无关的一例，是一首出自白居易《题元十八谿居》的歌谣：

7、晚蕊尚開く紅の躑躅 秋房初めて結ぶ白芙蓉 ——『和漢朗詠集・卷上・春』

《白居易诗集校注》将此诗中的“白芙蓉”注为“白莲”，“新全集”的注解亦为“白い蓮華”。此诗描写了友人优美雅致的宅邸，此句则特写“红杜鹃”和“白莲”。不过，室町时代以来，和文学中也逐渐开始出现与“喻美人”无关的“（水）芙蓉”用例，如：

8、磐石垂羅唯是家、ひやうにはくだかけ泉の水、またかなへには芙蓉ふく、火の沙を練る住まひや、…——『謡曲・脇能・鶴亀』

此句将皇帝祭祀之宫殿比作蓬莱仙境，殿内大鼎中盛开芙蓉，此处的“芙蓉”既烘托了宫殿的壮丽华贵又是一种仙境的象征。此外，另有散文 1 例，俳句 1 例，均描写的是“芙蓉”的植物属性。

相较之下，汉诗文中“芙蓉”的意象就丰富得多了。平安时代的汉诗文中虽“芙蓉”的用例不多，且多为“美人”意象，但室町时代之后，尤其江户时代以来，与“喻美人”无关的用例在汉诗文中就比较常见了。笔者检索了《五山文学全集》和《东瀛诗选本文和总索引》，“芙蓉”的用例分别有 90 例和 103 例，其中三分之二以上意指“荷花”。其中，虽然“喻美人”的意象仍占大多数，但上文所总结的中国文化中“（水）芙蓉”的其他意象也几乎都有体现。

由此可知，随着中国文化中“荷花”意象的不断丰富和成熟，也随着中世、近世儒家思想对日本政治思想的不断渗透，“（水）芙蓉”的其他意象也并非没有被日本文化所吸收。但不同于“美人、爱情”意象，其他意象尤其是“隐士、君子”意象的吸收范围基本只限于汉学家和儒学家，并没有广泛渗透到和文学、和文化之中，也很难说成为了日本文化中能被普遍理解的概念和意象。白河乐翁⁽⁷⁾在《花月草纸》中写道：“爱竹也

好，爱菊莲也罢，自然有其道理，但道理讲得太多，以自负才高，令人生厌”（松平定信 1971），的确，“以花鸟风月为趣的感性，也许正是日本人所特有的、与中国人的不同之处”（阪本裕二 1977）。

3.2.2 作为“木芙蓉”的“芙蓉”

虽然晚于中国，但到了室町时代，“芙蓉”单指“木芙蓉”的概念也传入了日本。据《日本大百科事典》介绍，初次出现是在室町时代的《尺素往来》中。然而，诚如上文的数据所显示的，在室町时代及之后的和文学作品中，“芙蓉即莲的别称，喻美人”的意象仍然占大多数。而意指木芙蓉的“芙蓉”，笔者只在散文中找到一例：

- 1、さながら階前の玉芙蓉、たよわき枝に葉隠れの八重つぼみ、……『男色大鑑・卷四』

此句中的“玉芙蓉”是风流好色常流连于花街柳巷的男主人公家门前所植，同样是用来隐喻其娇艳美貌的妻子的。不过，在俳句中，“（木）芙蓉”作为“秋”的季语，江户时代乃至近代都有不少用例，松尾芭蕉尤为爱用，如：

- 2、枝ふりの 日ごとに替わる ふようかな ——『松尾芭蕉集・全発句』
- 3、芙蓉咲く 今朝一天に 雲もなし ——『近代俳句集』・宮紫暁
- 4、松が根に なまめきたてる 芙蓉かな ——『近代俳句集』・正岡子規

但分析这些用例不难看出，它们或是描写“芙蓉朝开夕谢，每日绽放新的花朵”的自然特性（2），或是表达对“花期虽只有短短一日，却在清朗的秋日晴空的映衬下格外夺目”的芙蓉的情有独钟（3），又或是咏叹“松林与芙蓉相对照的反差美”（4）等等，其意境不似中国诗文中的木芙蓉那般丰富，更着重于木芙蓉作为秋日代表性花卉的自然之美。

可见，日本中世以来，特别是到了江户时代，在继续保留“芙蓉即莲的别称，喻美人”的意象的同时，“芙蓉＝木芙蓉”的概念虽然深度和广度远不及前者，但也被吸收进了日本文化，然而，其意象却与中国文化中的“（木）芙蓉”存在差异。

不过，在五山文学和江户时代以来的汉诗中，虽不及“（水）芙蓉”多，但也有不少“（木）芙蓉”的用例，且上文所总结的中国文化中“（木）芙蓉”的意象也基本都能从中找到例子。可见，“（木）芙蓉”的多种意象的吸收也同样仅限于汉诗文，而和文学、和文化所关注的却只是“（木）芙蓉”的“美人”意象和自然属性。

“日本是一个文化‘内化’过程十分明显的国家”（姚继中 2016），无论是“芙蓉＝莲花”还是“芙蓉＝木芙蓉”都是从中国文化植入到日本文化之中的概念。然而，日本文化对此绝不是全盘接受，“在文化的‘内化’中间，包含着人们对既有文化的继承与改良，以及对它的舍弃”（同上）。具体地说，在以白居易的诗文为代表的中国古典文学的影响下，作为“妩媚多情、婀娜多姿的美人”隐喻的“芙蓉＝莲花”的概念已深深植根于日本文化中，但“（水）芙蓉”其他意象的吸收程度却并没有如此高。另一方面，“芙蓉＝木芙蓉”的概念亦不及前者那么深入人心，且其“愁女”、“拒霜”、“晚芳”等意象亦未被广泛吸收。

3.3 四个全译本的译法的效果及原因

3.3.1 “国译本”和“松枝本”译法的效果及原因

在此基础上再来分析四个全译本的译法,不难推导出大部分译本将“芙蓉”译为“はす”无外乎有两种原因:一是作为美人隐喻的“芙蓉=莲花”的概念在日本文化中太过根深蒂固,以至译者看到“芙蓉”一词自然就理解为“莲花”;另一种可能的原因是,明知“芙蓉”指的是“木芙蓉”,但因为日本文化中的“木芙蓉”意象与黛玉的人物形象不相符,所以译者有意识地采用了将“芙蓉”译为“はす”的翻译策略。

然而,诚如伊藤在之前的论文中所自省的那样,“在我国(日本),一提到芙蓉通常立刻先入为主地认为是莲”,“我自己也曾任在拙译中撒播过这种错误的种子”,“譬如拙译,虽平凡社第一个译本、改译本皆相继问世,但都沿用了大成本、岩波文库本的译词,并未把这一问题放在心上”(伊藤漱平 1997)。可见伊藤在他的前四个译本中之所以将“芙蓉”译为“はす”,是因为根本没有意识到“芙蓉=木芙蓉”的可能性。伊藤在该论文中还表示:“笔者于昭和 55 年(1980)自霍克斯处获赠 penguin classics 新刊第三卷,其中“hibiscus”的译词令我大受冲击,参照杨氏夫妇的译本我才开始思考这一问题。与此同时,笔者了解了发生在中国大陆的关于芙蓉的论争,并一直关注着其发展趋势,再加上自己的多番考证,终于在平成 9 年刊行的平凡社 library 版再改译版中,将‘はす’改为了‘木芙蓉’”(同上)。由此可见,伊藤是在了解到英译本从 lotus 到 hibiscus 的改变,并关注到中国大陆关于芙蓉的论争之后,才开始思考“芙蓉”究竟是“木芙蓉”还是“水芙蓉”的问题的。随后,他通过考证得出自己的结论,并在自己的译本中也做了大幅度的修改。由此不难想见,在此之前的译本之所以不约而同地将“芙蓉”译为“はす”,应该都是出于上面所列举的两种原因中的第一种。在这一点上,日本译界和学界的认知是不谋而合的。

基于上文所分析和归纳的日本文化中的“(水)芙蓉”意象,不难发现,国译本和松枝本以及伊藤本的前四个译本将“芙蓉”译为“はす”,尤其是以保留“芙蓉”的汉字表记,假名注音为“はす”、“はちす”的形式,极大程度地强化了译文中的黛玉“妩媚多情、婀娜多姿的美人”形象,却无法将中国文化中“水、木芙蓉”所蕴含的“超尘脱俗、孤高自许、藐视功名利禄、唾弃庸俗,身处逆境中仍能坚守自我、独立不屈”的内在人格意象映射到黛玉的人物形象上,使得源语文本中“芙蓉喻黛玉”的概念隐喻的映射关系不能在目标语文本中得到充分、完整、等值的转换,造成了译文中黛玉这一人物形象的信息缺失。

3.3.2 “伊藤本”的尝试

如果说国译本和松枝本以及伊藤本前四个译本将“芙蓉”译为“はす”,是译者受日本文化中根深蒂固的“芙蓉喻美人”意象的影响而采取的无意识行为,那么,在了解和考证了“芙蓉=木芙蓉”的可能性之后,伊藤在其最后一个译本中的改译则必然是有意为之了。

参照上文表格可知，伊藤在最后一次改译中，只将第七十八回的“芙蓉”译为了“木芙蓉・木蓮”，第六十三回的“芙蓉”则仍保留了“はすの花”的译法。在了解了英译本从“lotus”到“hibiscus”的改变、中国红学界关于“芙蓉”的论争之后，尤其在通过自己的考证得出“黛玉所掣的‘芙蓉’花签不可能是‘莲’”（同上）的结论之后，伊藤先生为何仍然将第六十三回的“芙蓉”译为“はすの花”呢？这是一个值得探讨的问题。笔者分析，可能的原因有二：

第一、伊藤本最后一个译本第六十三回的“芙蓉”，虽仍保留了“はすの花”的译法，但并未继续采用保留“芙蓉”的汉字表记，假名注音为“はす”、“はちす”的形式，而是在保留原文汉字并注上音读“ふよう”的基础上，在其后面加括号注为“はすの花”。结合上下文分析，此形式的“潜台词”意在告诉目标语读者：花签上画的是一种叫“芙蓉”的花，而这种花就是我们日本的“はすの花”。可见，伊藤此译法旨在摆脱日本文化中根深蒂固的“芙蓉喻美人”意象的束缚，用日本文化中“莲”的佛教意象来取代或者说丰富前者。在日本佛教的世界观和审美观中，“莲”既是“真理、往生、净土之花”，又是“生于水中却不被水所污”、仿若“不被诸多情欲所染”的“真正的婆罗门”、象征“纤尘不染、至清至纯之心”的“圣洁之花”（阪本裕二 1977）。这一意象，较之日本文化中的“（水）芙蓉”，显然更贴近源语文本中的黛玉的内在气质和精神世界。

第二，根据之前对用例的分析，已知日本文化中的“木芙蓉”意象与中国文化中的有很大差异，如果简单地将“芙蓉”直译为“木芙蓉”，恐怕也只能映射出“如秋天的木芙蓉一般美丽的女子”的意象，并不能等值转换源语文本中“（木）芙蓉喻黛玉”的映射关系。所以，尽管伊藤已经认识到源语文本中的“芙蓉”应意指中国文化中“木芙蓉”，却仍然只将第七十八回直接隐喻晴雯的“芙蓉”译为了“木芙蓉・木蓮”。

至于伊藤本之后的新译本，则采用了不明确的译法，或许是因为译者意识到了“芙蓉”可能包含“水芙蓉”和“木芙蓉”两种意象，所以有意识地不做取舍。但尚未找到确凿根据，不敢断论，留待以后进一步探讨。

4. 结语

清代的评论家早已指出，“《红楼梦》的作家精神全注林黛玉”（一粟 1964）。曹雪芹在黛玉这一女性形象上寄托了许多中国传统文人理想的品格和情操。而“竹”、“菊”、“芙蓉”等“以花喻人”的概念隐喻则是塑造这一人物的重要手段之一。

在中日两民族的文化体验中所形成的“芙蓉”（水芙蓉和木芙蓉）的概念和意象有很大差异。这不仅导致大部分的日译译者忽视了源语文本中“芙蓉”的多义性，也使得“芙蓉喻黛玉”之概念隐喻的双重映射关系在目标语语境中不能实现等值的、完整的转换，从而造成了日译译文中黛玉“飘摇袅娜，妩媚多情”的美人形象被强化，而隐士气质和君子风骨等内在精神被极大程度地淡化的翻译效果。这一难以避免的差额翻译，不仅从一个侧面反映了日译译者对黛玉这一人物形象的理解，也势必对日译译本中黛玉这一人物形象的塑造造成一定程度的影响。但与此同时，亦不能忽略伊藤漱平等译者为弥补文化差异，尽量实现“芙蓉喻黛玉”这一概念隐喻的等值转换，尽量减少日译中黛玉这一人物形象的信息缺失所做出的尝试。

注：

- (1) 杨宪益 戴乃迭译《A Dream of Red Mansions》(外文出版社、1980年)、David Hawkes 译《The Story of the Stone》(Penguin Books Ltd.1978年)。
- (2) 如“芙蓉”意象研究相关的葛明静《古典文学中芙蓉的审美意象探析》以及林黛玉人物研究相关的王海燕《花魂诗魄女儿心——林黛玉新论》等等。
- (3) 《红楼梦》日译全译本包括：“国译本”(国民文库刊行会编《国译汉文大成》14、15、16卷，幸田露伴、平冈龙城合译，1920-1922出版，第一个80回全译本)、“松枝本”(松枝茂夫译，平凡社出版，有1940-1951年初译本和1972年改译本两个版本)、“伊藤本”(伊藤漱平译，平凡社出版，经数度改译，1958-1996年陆续出版五个版本)、“新译本”(井波陵一译，2013-2014年岩波书店出版)。此外还有一个“饭冢本”(饭冢朗译，1980年集英社出版)，因未与其他译本一样采用“抄本+刻本”的底本模式，对原作与续作的差别认识不明，且本论文的研究对象为前80回原作，故未将其纳入研究范围。
- (4) 伊藤本曾先后经过两次小规模修改和两次大规模的改译，五个版本为：①平凡社《中国古典文学全集》卷24、25、26，1958-1960；②平凡社《中国古典文学全集》改订版，1963；③平凡社《中国古典文学大系》卷24、25、26，1969；④平凡社“奇书系列”，1973；⑤平凡社“图书馆系列”，1996。
- (5) 以下简称“新全集”，此外还检索了《日本古典文学大系》。
- (6) 这四首和歌是：
 3287 ひさかたの雨も降らぬか 蓮葉に溜まれる水の玉に似たる見む
 ...ここに饌食は盛るに、みな蓮葉に用ちてす。...
 3289 みפקかしを 劍の池の 蓮葉に 溜まれる水の 行へなみ 我がする時に ...
 3826 蓮葉は かくこそあるもの 意吉麻呂が 家なるものは 芋のはにあらし
 3835 勝間田の 池はわれ知る 蓮なし 然言ふ君が 髭なきごとし
 ... 新田部親王、...ここに婦人に語りて曰く、「今日遊行でて、勝間田の池を見るに、水影濤濤に、蓮花灼灼なり。可憐きこと腸を断ち、得ていふべからず」といふ。...
- (7) 松平定信(1759-129)，日本江戸时代政治人物、大名，号白河乐翁。

参考文献

- [1] 束定芳.《隐喻学研究》[M].上海外语教育出版社,2000
- [2] 肖家燕.《红楼梦概念隐喻的英译研究》[M].中国社会科学出版社,2009
- [3] 冯其庸 李凡希主编.《红楼梦大辞典》[M].文化艺术出版社,2010
- [4] (汉)刘向辑,(汉)王逸注.《楚辞》[M].上海古籍出版社,2015
- [5] 唐圭璋编.《注释全唐诗》[M].中华书局,2018
- [6] 谢思炜编.《白居易诗集校注》[M].中华书局,2019
- [7] 吴征镒.《中国植物志》[M].科学出版社,2019
- [8] (明)李时珍.《本草纲目》[M].人民卫生出版社,2004
- [9] (清)汪灏.《广群芳谱》[M].上海书店,1970
- [10] 姚继中 聂宁 杨清.《日本文化记忆场》[M].重庆出版社,2016
- [11] 一粟.《红楼梦研究资料汇编》[M].中华书局,1964
- [12] 王海燕.《花魂诗魄女儿心——林黛玉新论》[M].中国社会科学出版社,2007
- [13] 王昆仑.《芙蓉赞》[J].红楼梦学刊,1979(1)
- [14] 萧嘉.《花梨与芙蓉》[J].红楼梦学刊,1981(1)
- [15] 陈平.《“红楼”芙蓉辨》[J].红楼梦学刊,1983(3)
- [16] 俞香顺.《林黛玉“芙蓉”花签考辨》[J].明清小说研究,2011(1)
- [17] 张庆善.《说芙蓉》[J].红楼梦学刊,1984(4)
- [18] 葛明静.《古典文学中芙蓉的审美意象探析》[J].山东师范大学硕士论文,2012
- [19] 俞香顺.《荷花<楚辞>原型意义探讨》[J].云梦学刊,2003
- [20] 袁茹.《黛玉的花名签》[J].邯郸学院学报,2005
- [21]『日本大百科事典』[M].小学館,1984

- [22] 『新編国歌大観』[M]．角川書店，1986
- [23] 『新編日本古典文学全集』[M]．小学館，1996
- [24] 『日本古典文学大系』[M]．岩波書店，1967
- [25] 村上觀光編纂．『五山文学全集』[M]．思文閣出版，1992
- [26] 高橋要編．『東瀛詩選本文と総索引』[M]．勉誠出版，2007
- [27] 阪本裕二．『蓮』[M]．法政大学出版局，1977
- [28] 松平定信．『花月草紙』[M]．岩波書店，1971
- [29] 合山究．『「紅樓夢」新論』[M]．汲古書院，1998
- [30] 伊藤漱平．『紅樓夢』における象徴としての芙蓉と蓮と — 林黛玉、晴雯並びに香菱の場合 — [J]．日本中国学会創立五十周年記念論集，1997
- [31] 鈴木義昭．李商隠詩に見える芙蓉について — 無題詩「八歳偷照鏡」を主として — [J]．中国文学研究 5, 1979
- [32] 市川桃子．詩人の個性 — 「芙蓉」「蓮花」「荷花」「菡萏」「藕花」による分析 — [J]．明海大学外国語学部論集 18, 2006

林房雄《中国千夜一夜》与明清白话小说

匡 伶

南京师范大学外国语学院

林房雄(1903-1975)初登文坛是作为无产阶级文学作家,早期创作了一系列优秀作品,不仅奠定其在日本文坛的地位,亦是近代中国翻译史上较早译介的日本作家之一⁽¹⁾。但战后至今,再未见其译作,与之相关的研究亦鲜见,主要原因应该在于他在战争期间的“转向”。林房雄早期信仰共产主义,但在经历多次被捕后,他选择放弃共产主义信仰,转而成为极端民族主义者,并在日本侵华战争全面爆发后作为随军作家来到中国战场。其于60年代发表的《大東亜戦争肯定論》更是引起国内外舆论的一片哗然,在日本文坛亦是极具争议的人物,一段时期内甚至被主流文坛摒弃在外。然而,这样一位作家却在战后初期将目光转向了“三言两拍”、《金瓶梅》《十二楼》《西湖二集》等中国明清白话小说,对原作进行翻译或翻案,先后出版系列作品集七册。

关于这些作品的性质,一直以来被视为“中间小说”,但对比中文原作可知,此类作品能否称为“小说”并不能一概而论。一般读者视之为小说,最主要原因应该是受林房雄本人的误导。一则林房雄是作家,此前并无翻译中国文学的经历,故很难将其作品与译作联系起来;二则他在发表作品之初及系列作品集中并未添加“前言”或“后记”以说明原作相关信息,客观上掩盖了作品的性质。唯一有“后记”的是其中国古典题材作品合集《中国千夜一夜》下册,文中写道:

该作品集的题名是模仿美国作家菲茨杰拉德的“Tales for males”。“为男性而作”,反过来翻译就是“女読むべからず”吧。

原作是邻邦中国的艳笑绮谭,但我模仿法国作家巴尔扎克“风流滑稽谈”的精神,想传达已故辰野隆大博士所言的“豪朗和魂”。当然,不敢自言成功。

各位读者,请不要将该书与如今流行的“情色物语”混为一谈,希望各位读之能发出豪放爽朗的笑声⁽²⁾。

寥寥数语,虽提及原作来自中国,但紧随其后的“我模仿法国作家巴尔扎克‘风流滑稽谈’的精神,想传达已故辰野隆大博士所言的‘豪朗和魂’”一句又给人以作者仅以原作为素材的感觉。加上日本素有翻案古典的传统,故一般读者不知其为翻译或翻案亦在情理之中。即使近年出现的相关研究成果中亦有类似观点,如日本学者胜山稔在其《近代日本に於ける中国白話小説集『三言』所収編の受容について——神谷衡平と林房雄の訳業を中心として》一文中表示:“初期作品是较为忠实原文的翻译,其余大都并非严格的翻译,而是林房雄以原作为素材,进行了自由奔放的改写,属于翻案作品。”⁽³⁾作者关注到了林房雄对“三言”系列作品的翻译,但认为大都仍属于翻案,实际情况果真如此吗?本文拟以收录林房雄《中国千夜一夜》为中心,从文本对比分析着手,结合

作家的创作经历及其本人的回忆录，考察作家涉足中国明清白话小说的经纬、作品的出处与性质、对原作的译介与受容等问题。

一、林房雄涉足明清白话小说之经纬

林房雄因其协助战争的言行，在日本战败后受到“日本左翼记者联盟”的抵制，几乎无法在主流刊物上发表作品。随后不久，他又与武者小路实笃、菊池宽、吉川英治、尾崎士郎等一起被定性为“战犯作家”，被GHQ开除公职，生活一度陷入绝境。走投无路之际，经夏目漱石次子夏目伸六推荐，林房雄开始在“中间杂志”《小説と読物》上发表小说⁽⁴⁾。所谓“中间杂志”是指随着日本战后经济文化复苏而涌现的新兴大众读物，不受“左翼记者联盟”的管辖，因而可以自由投稿。林房雄在该期刊上发表的第一部作品是《香妃の妹》（1946年5月），描写了日本青年文人战争期间在北京与一名妓女相恋的故事，情节并无新意，但作家凭借醇熟的笔力获得了读者的肯定，连横光利一等文学界前辈亦给予了高度评价⁽⁵⁾。这令他深受鼓舞，接连发表的数篇作品均获成功，因而得以成为该期刊的常驻作者。这一方面缓解了林房雄一家的经济困境，同时意味着他需要源源不断的创作源泉。

林房雄从“三言两拍”等明清白话小说中看到了趣味性与娱乐性，由此开始量产中国古典题材作品。尽管当时刚刚经历过中日战争，这些作品所表现的奔放的爱情、无畏的抗争、独特的风俗展现了不同于日本文学的别样洞天，对久经压抑的日本民众而言亦是一种新鲜的文学体验，因而得到了较为广泛的肯定。林房雄开始得到众多“中间杂志”编辑的关注，获得更为广阔的舞台，并逐渐跻身畅销小说家行列。从1949年起，他相继出版“女読むべからず”系列单行本，主要包括《春の夜話》《夏の夜話》《秋の夜話》《冬の夜話》及《金瓶梅物語》等，并在之后由春阳堂、河出书房、桃源社等出版社多次再版，同时期甚至出现不少仿作。1967年新编的《中国千夜一夜》同样广受欢迎，多次再版。

暂不论这些作品是翻译抑或翻案，要完成这些作品都需要作家精通两种语言。林房雄是成名作家，其日语写作能力毋庸置疑，但他并无系统学习中文的经历，如何阅读乃至完成翻译工作，他又为何会关注到明清白话小说？胜山稔在其研究论文中表示，林作是在辛岛骁的帮助下完成的。理由是当时二人均居住在镰仓，而辛岛骁毕业于东京大学中文系，他在50年代末翻译了东洋文化协会出版的《全訳中国文学大系》中“三言两拍”的部分作品，其中有十篇左右与林房雄所涉及的作品重合⁽⁶⁾。但据辛岛骁本人所言，他开始翻译中国古典文学正是出于林房雄的建议。

我在战后搬到镰仓居住后，林房雄建议我翻译中国古典小说。于是我翻译了明代短篇小说集《警世通言》中的《白娘子永镇雷峰塔》。他看了之后，给这部作品注入了现代气息，使之成为一部新的作品，即《白夫人の妖術》⁽⁷⁾。

《白夫人の妖術》于1948年发表在《小説と読物》的2-3月号上，而在此之前，林房雄已经发表了多篇取材明清小说的作品，如《紅魚白魚》（《小説と読物》，1947年5月号）

取材自《警世通言》卷32“杜十娘怒沉百宝箱”，《鴛鴦の帯》（《小説と読物》，1947年12月号）取材自《醒世恒言》卷15“赫大卿遗恨鸳鸯缘”，《奉府の易者》（《小説新潮》，1947年12月号）取材自《警世通言》卷13“三现身包龙图断冤”等。从这几部作品以及其余数十篇作品的内容看，林房雄对原作理解准确，翻译完全是专业水平。换言之，林房雄在辛岛骁之前就关注到了明清白话小说，并以专业水准完成了对原作的翻译或翻案。因此，仅以《白夫人の妖術》一篇即认定辛岛骁是林作的幕后英雄是难以令人信服的。但林房雄本人确实并无系统学习中文的经历，虽然他在中日战争期间曾居中国两年左右，其间应该会接触中国文学及中文，但两年时间是否足以使其精通中文令人存疑。如果作家本人不具备足够的中文能力，背后的助手是谁？如果作家本人精通中文，他又是何时习得的？这些问题从现有资料尚无法解答，有待日后进一步调查。

撇开作家的的工作过程不谈，从商业角度而言，林房雄中国古典题材作品无疑获得了成功。但作家本人是如何看待这段创作经历及该系列作品的呢？以下是他在《文学的回想》中对此所作的回忆：

虽然被战后文坛摒弃在外，但因开始受到大众杂志编辑的关注，我逐渐成为畅销作家。记者联盟的势力似乎影响不了战后涌现的中间杂志。

不久后我被GHQ开除公职，但他们允许我发表非政治类作品。于是我拼命写小说，这段“乱作时期”对我的文学经历而言，可谓弊大于利，但面对左翼记者联盟的抵制，它让我充分发泄了内心的郁愤⁽⁸⁾。

从林房雄的记述可知，他对自身作品的评价并不高，这之间的落差耐人寻味。林房雄在日本战败前一直在日文坛占有一席之地，早期甚至被视为无产阶级文学代表作家而名扬海内外，但战败后却被摒弃在主流文坛之外。对他而言，走上“中间小说”作家道路纯属无奈之举，谋生意义大于文学意义。但在谋生之外，他亦取得了骄人的成绩，此事应该令其深感欣慰。但如前所述，林房雄的该系列作品是多大程度上的创作值得怀疑，即使外界不知，作家本人应该很清楚。作为作家，即使是翻案小说，林房雄在其中的“创作”亦是有限的，何况尚有相当数量的作品称不上翻案小说。这对志在“纯文学”的林房雄而言，显然不足以支撑起文学理想，从作家晚年再次回归“纯文学”亦可得到证明。因而，其所言“乱写时期”对其文学经历“弊大于利”，与其说他在否定这些作品，不如说在否定其自身的工作。

尽管如此，该系列作品的发表仍有其独特的意义。这些作品兼具古雅与趣味，有别于日本传统纯文学与大众文学，它们的成功不仅使林房雄成为畅销作家，甚至令其从中看到日本文学发展的新方向。他在1947年《新風》杂志举行的座谈会上表示：“日本的小说要发展，其主要途径在于纯文学与大众小说之间。”这一发言被久米正雄总结为“中间小说”，林房雄本人亦因此被视为“中间小说”的鼻祖与倡导者⁽⁹⁾。日本文学如其所预言，由此打开了“既不落俗套、又不追求清高”的“中间文学”的新局面⁽¹⁰⁾，而他本人亦由此进入大量创作“中间小说”的时期，其中最具特色、影响力最大的正是中国古典题材作品。另一方面，从明清白话小说译介的角度而言，林房雄的翻案或翻译所涉及

的作品数量众多，流行程度亦是少有的。尤其是电影版《白夫人の妖恋》（1956）上映后，引起日本社会的强烈反响，直接促进了日本首部彩色长篇动画电影《白蛇伝》（1958）的诞生。1959年，东洋文化协会发布“三言两拍”的全译计划，并纳入《全訳中国文学大系》。虽然这一计划中途搁浅，未能全部完成，但《醒世恒言》全40篇、《警世通言》12篇、《初刻拍案惊奇》30篇均由辛岛骁翻译完成并出版，而辛岛骁，如前所述，正是在林房雄的建议下才开始涉足中国古典文学翻译的。可以说，尽管林房雄接触明清白话小说具有偶然性，但其工作客观上推动了明清白话小说在日本的传播。

二、《中国千夜一夜》所收篇目及其原作

1967年，林房雄对“夜话”系列进行新编，将原四册单行本收录的25篇作品重新编排，并加入《妖術物語》（原名《白夫人の妖術》）等4篇作品，合集出版《中国千夜一夜》，分上下两册。上册为“春の夜話”8篇与“夏の夜話”8篇，下册为“秋の夜話”6篇与“冬の夜話”7篇，共计29篇作品。从单行本“夜话”系列到《中国千夜一夜》，主要变化是作品的顺序。如单行本《夏の夜話》的大半作品纳入了“冬の夜話”，单行本《秋の夜話》的大半作品纳入了“夏の夜話”，单行本《冬の夜話》的大半作品纳入了“秋の夜話”，单行本《春の夜話》的大半作品仍保留在“春の夜話”，先后顺序有调整，并加入另两篇作品。调整顺序的原因不得而知，林房雄在作品集前后未作任何说明，而从作品内容亦看不出相互间的逻辑关系，或许仅为区别于原单行本系列。

尽管新编作品集改名为《中国千夜一夜》，但由于林房雄在作品集前后及作品中并未提及原作来源，且对部分作品加以改头换面，匹配原作存在不小的困难。笔者综合利用图书资源及网络资源进行广泛搜索，逐一比对，最终确认了29篇作品的原作出处。从年代看，22篇为明代作品，7篇为清代作品。明代作品中有17篇出自“三言两拍”，两篇出自《西湖二集》；清代作品中有4篇出自《十二楼》，其余6篇为零散作品。从取材范围看，林作或取材原作全篇，或截取部分，或对长篇作品进行编译，不一而足。以下为各篇出处的具体情况：

1、“春の夜話”：

作品名	原作
第一话《尼寺物語》	（明）《西湖二集》卷28“天台匠误招乐趣”；取其中“鱼玄机”、“阮三官”及“张漆匠”三个故事
第二话《嫉妬物語》	（明）《西湖二集》卷11“寄梅花鬼闹西阁”；取后半部“朱廷之”的故事
第三话《多情物語》	（明）芙蓉主人《痴婆子传》；缩译
第四话《喪服物語》	（明）《初刻拍案惊奇》卷17“西山观设鞦韆亡魂 开封府备棺迫活命”；取后半部“吴氏”与“黄道观”的故事
第五话《人妻物語》	（明）《初刻拍案惊奇》卷32“乔兑换胡子宣淫 显报施卧师入定”；取后半部“铁生”夫妇的故事

第六话《花嫁物語》	(明)《醒世恒言》卷8“乔太守乱点鸳鸯谱”;取全篇
第七话《遊女物語》	(明)《警世通言》卷32“杜十娘怒沉百宝箱”;取全篇
第八话《逢曳物語》	(明)《醒世恒言》卷16“陆五汉硬留合色鞋”;取后半部“张荃”的故事

2、“夏の夜話”:

作品名	原作
第一话《妖姫物語》	(清)《隋唐演义》;编译其中隋炀帝与杨贵妃的故事
第二话《悍婦物語》	(清)《子不语》卷11“医妒”;取全篇
第三话《拔穴物語》	(明)《初刻拍案惊奇》卷16“张溜儿熟布迷魂局 陆蕙娘立决到头缘”;取后半部“陆蕙娘”的故事
第四话《腰元物語》	(明)《醒世恒言》卷23“金海陵纵欲亡身”; 取中段“定哥”与“贵哥”的故事
第五话《処女物語》	(明)《初刻拍案惊奇》卷23“大姊魂游完宿愿 小姨病起续前缘”; 取后半部“兴娘”的故事
第六话《煉金物語》	(明)《初刻拍案惊奇》卷18“丹客半黍九还 富翁千金一笑” 取后半部“潘富翁”的故事
第七话《禁欲物語》	(明)《醒世恒言》卷39“汪大尹火焚宝莲寺”;取全篇
第八话《易者物語》	(明)《警世通言》卷13“三现身包龙图断冤”;取全篇

3、“秋の夜話”:

作品名	原作
第一话《裸女物語》	(清)《十二楼》卷4“夏宜楼”;取全篇
第二话《結婚物語》	(清)《十二楼》卷8“十叠楼”;取全篇
第三话《変装物語》	(明)《初刻拍案惊奇》卷34“闻人生野战翠浮庵,静观尼昼锦黄沙弄”;取全篇
第四话《宝石物語》	(明)《二刻拍案惊奇》卷14“赵县君乔送黄柑 吴宣教干偿白镪”; 取后半部“赵县君”的故事
第五话《胡蝶物語》	(明)《警世通言》卷2“庄子休鼓盆成大道”;取全篇
第六话《妖術物語》	(明)《警世通言》卷28“白娘子永镇雷峰塔”;取全篇

4、“冬の夜話”:

作品名	原作
第一话《女帝物語》	(明)《如意君传》;取全篇
第二话《王妃物語》	(明)《醒世恒言》卷13“勘皮靴单证二郎神”,取全篇
第三话《玉笛物語》	(明)《剪灯新话》卷2“渭塘奇遇记”,取全篇
第四话《離別物語》	(清)《十二楼》卷9“鹤归楼”;取全篇
第五话《菊花物語》	(清)《十二楼》卷6“萃雅楼”;取全篇
第六话《幽霊物語》	(明)《醒世恒言》卷14“闹樊楼多情周胜仙”,取全篇
第七话《賭博物語》	(清)《萤窗异草》初编卷1“玉镜夫人”;取全篇

三、翻译还是翻案？——《中国千夜一夜》对原作的受容

如前所述，由于种种原因，林房雄中国古典题材作品一直被视为小说，但实际情况如何，需与原作比对后才能定论。在翻译学上，根据译者对原作的处理方式，翻译分为全译、节译、摘译、编译、译述等多种形式。一般而言，文学翻译以全译最为常见，但若以严格的全译为标准来判定林房雄中国古典题材作品的性质，可能会有失偏颇。因为译者翻译有不同目的，可根据实际需要采取适当的处理方法。尤其是编译与译述较为灵活，前者可对原文内容进行编辑加工，对其内容作出概述性的传译；后者可不必拘泥于原文的形式与语言表达，只需客观表达出原文的主要内容，亦可加上译者的观点，即所谓“述评”。翻译形式多样，但核心标准一致，即是否客观地传译了原作的主旨大意，这亦是本文判断《中国千夜一夜》所收诸篇作品之性质的依据。

以“春の夜話”第二话《嫉妬物語》为例，该作品主要讲述了西湖才子“朱廷之”夫妇的故事。夫妇二人郎才女貌，举案齐眉，唯一不足是朱妻柳氏极为善妒。朱在赴京赶考的途中与妓女琼琼相爱，但因畏妻无法将其带回家。几年后终于娶进门，又因朱离家赴任，柳氏不能与琼琼和睦相处。朱在任地夜遇女鬼，发现是琼琼冤魂，以为琼琼被柳氏迫害致死，悲愤之下辞官归家。到家后却发现柳氏与琼琼安然无恙，遂将女鬼一事告知妻妾，二人惊讶之余，愈发和好，从此家庭和睦。该作品的原作是《西湖二集》卷11“寄梅花鬼闹西阁”，作者旨在劝诫女性不应嫉妒，故在开头首先讲述了宣城公主与杨贵妃善妒的故事。随后笔锋一转，讲述了一则“嫉妒得有趣”的故事，即上述朱廷之夫妇的故事。换言之，《嫉妬物語》是对“寄梅花鬼闹西阁”掐头去尾，截取了其主体部分。那么，林作所截取的这部分与原作相比如何呢？以下以朱廷之与琼琼初相识的一节为例，来考察该作品的性质：

原作：不期天赐良缘，婚姻簿上注了定数，马琼琼见朱廷之生性醇和，姿性超群，文华富丽，因此就看上了朱廷之，几次央浼姐姐与杨谦说，要与朱廷之相处。杨谦因廷之妻子有吃醋拈酸之病，恐明日惹柳氏嗔怪，说他拖人落水，因此不敢兜揽。争夺被琼琼央浼不过，只得与朱廷之说知。那朱廷之原是一个真风流、假道学之人，只因被妻子拘束，没奈何做那猴孙君子行径。今番离了妻子眼前，便脱去“君子”二字，一味猴孙起来，全不知有孔子大道、周公礼法，就如小学生离了先生的学堂，便思量去翻筋斗、打虎跳、戴鬼脸、支架子的一般恣意儿顽耍，况且又是一个绝色妓女招揽，怎生硬熬得住？因此一让一个肯，便明目张胆起来，与马琼琼相处。⁽¹¹⁾

林作：そもそも天上の婚姻簿には人間の生まれぬ先から赤い印でもついているのでございましょうか、瓊々は朱廷之と付き合っているうちに、その穏やかな性質と、容貌と教養にすっかり惚れこんでしまいました。上抱剣營の瓊々といえ、一流中の一流の名妓で、顔といい芸といい気質といい、帝京第一姫の名にそむかず、しかも天下の豪家大官が巨万の金を積んでも首をたてには振らぬ全盛ぶり、それが名家の子弟とはいえ、一介の田舎書生、朱廷之に心を打ちこんだというのは、これがつまり縁というものでございましょう。

瓊々は姉の勝々を通して、楊謙に頼む。楊謙としては、放蕩仲間が増えるのは嬉しいが、柳夫人の焼餅を知っているので、いずれ夫人の耳に入る時のことを考え、初めはためらいましたが、瓊々の熱意に押されて、この話を朱廷之に打ち明けました。廷之としては、もともと風流心旺盛の若者でありながら、細君がこわくて、やむを得ず道学先生のふうを装い、つまり猿が君子の真似をしていたのですから、この話を聞くと、夫人の眼は五十里の彼方にあり、相手は絶世の美人と来ているので、たちまち君子の方を廃業して本来の猿にかえり、孔孟の道も周公の礼も大学ノートとともに屑籠に捨て、瓊々の寝床に腰と腹を据えてしまいました。これはちょうど、小学校の児童が先生の前では神妙にしているが、校門を一步出ると、叫び、歌い、とんぼ返りをし、ヒョットコの面をかぶり、人の家の窓に石を投げ、その方が教室よりもよっぽど楽しいと思うのと同じ心理でございましょう。⁽¹²⁾

对比原作与林作可知，林房雄对原作的理解准确，对细节的翻译基本无差。显著的差异主要有二：一是林作将原作一分为二，并添写了下划直线部分的内容。原作对马琼琼的外貌并未详加描写，仅在上文有两处暗示。一是杨谦寻访“那一家妓者最好？”时，被告知“只有上抱剑营马家最盛”⁽¹³⁾；二是描写马琼琼的姐姐马胜胜时写道：“那马胜胜虽不比得琼琼标致，却也毫无俗韵，清雅过人。”⁽¹⁴⁾有此二句铺垫，读者应能想象琼琼出类拔萃的外表与仪态以及受欢迎的程度。因此，林房雄这一添写并非误译或出于改写目的，主要为突出琼琼的风采与难得，使其形象更生动具体，同时与上文琼琼对朱廷之的爱慕相对应，表明二人系情投意合。第二节开头对杨谦心理的一句添写亦是为了突出人物的风流个性，对上下文意思并无影响。

第二处不同是原作末尾下划波浪线的一句，林作中将其拆成两句，并做了语序的颠倒。语序调整在译作中亦不鲜见，主要为使译文符合目的语的表达习惯，但林作与原作略有差异。一是省略了“怎生硬熬得住？”一句，但林作在上文描写琼琼的风采时写道，琼琼是京城第一名妓，色艺双绝，即使达官贵人、名门子弟亦无法抵抗其魅力，何况一介寒门书生？此句实际已暗含了“怎生硬熬得住”之意，但语气较原作更为文雅。二是林作以“瓊々の寝床に腰と腹を据えてしまいました”一句对应“一让一个肯，便明目张胆起来，与马琼琼相处”，译文字面意思是“常居琼琼床上”，由此可见，虽非“明目张胆”，实际正是“明目张胆”，翻译可谓巧妙。除上述两处不同外，其余内容几乎是逐字逐句的翻译。不仅这一节，纵观全文，情况基本类似：或偶有增删，但不影响行文与主旨。从译文效果来看，语言流畅自然，用词不失精彩，上下浑然一体，可见译者文笔之老练。因此可言，《嫉妬物語》虽仅截取原作中“朱廷之”夫妇的故事，并非是对原作进行的“全译”，但就截取部分而言，确为“翻译”。

除翻译外，更多作品采取的是“翻译+创作”的形式，即在对原作进行翻译之余，添加了小段创作。具体包括三种形式：一是在开头添加引言，二是在末尾添加述评，三是续写或改作品结尾。有的作品同时具有三种形式，有的仅增加一种或两种。以“秋の夜話”第五话《胡蝶物語》为例，原作为《警世通言》卷2“庄子休鼓盆成大道”，主要讲述了庄子利用分身术装死、考验妻子忠诚的故事，反映了封建贞操观念淡薄的现象。

林作则可分为三部分：第一部分是对原作开头“庄周梦蝶”的部分进行了戏谑性改写，将庄子比喻为在花丛中飞来飞去的蝴蝶，认为庄子三度结婚，并最终离家出走，很可能是设计抛弃妻子，去寻找第四任、第五任了。这一改写主要是对庄子形象的解构，为下文故事铺垫。第二部分为翻译，内容从“娶妻田氏”至“庄子离家”，基本完整而忠实地呈现了原作内容。第三部分为述评，作家在此表明自己改写此作的原因。文中写道：“我不是庄子那样的哲学家，我是老实的小说家，所以我无法接受原作的教训之言。相比教训，我更想替女性说话。”⁽¹⁵⁾他接着批判了庄子的伪善，提出女性改嫁无罪，并在文末添加了自己的“教训之言”：“动辄梦见蝴蝶的男人，一旦厌倦女人，就会想出极巧妙的哲学性计略。所以，世间美丽的女人啊，务必提防男人的哲学！”⁽¹⁶⁾如此，林房雄通过对原作进行适当删改，去除其中反映封建道德思想的教训意义，增加符合现代思想观念的新意。全篇有改写，有翻译，有述评，既非纯粹的翻译，亦非纯粹的翻案。但归根结底，该作品以翻译为主，创作为辅，故笔者将之归入“翻译+创作”的类型。

《妖術物語》原名“白夫人の妖術”，取材自《警世通言》卷28“白娘子永镇雷峰塔”。初时在《小説と読物》上连载，后出版单行本，在被收入《中国千夜一夜》时，改名《妖術物語》，应是为了与其他作品保持题名形式的统一。“白蛇传”在中国的发展已逾千年，其中的人物形象亦随时代变迁而发生较大变化。在冯梦龙的版本中，主要矛盾在于人妖的对立，白娘子的妖性大于人性，许仙好色大于爱情，故最后的教训之言是“奉劝世人休爱色”⁽¹⁷⁾。林作与原作最大的区别是以梦境贯穿全篇：白夫人会在许仙睡觉时作法制造幻境，让许仙体验羽化成仙的乐趣。从高山到草原，从大海到云海，从月界到太空，美轮美奂又静谧安详的自然风光每每令许仙流连忘返。最终在经历了与法海斗法后，二人选择前往蓬莱仙岛，从而远离俗世的争斗与偏见。总体而言，与重在表现人妖矛盾的原作相比，林作以山水自然的宁静对抗残酷无情的现实，整篇作品散发着浓郁的浪漫主义与遁世思想，在精神上迥异于原作，确为“翻案小说”。该作品于1956年被改编成电影《白夫人の妖恋》，然而有趣的是，林房雄在电影剧本中删去了上述梦境，仅保留了结尾处许白二人羽化成仙的情节，也可算是从“翻案”回归为“翻译”。

纵观《中国千夜一夜》收录的29篇作品，真正称得上是翻案小说的其实不多。最多的是“翻译+创作”，其次是翻译。限于篇幅，本文在此不再逐一详加分析，仅依作品性质列出题名，具体如下：翻译作品包括《嫉妬物語》《花嫁物語》《逢曳物語》《悍婦物語》《離別物語》《結婚物語》《宝石物語》《处女物語》《女帝物語》及《菊花物語》，共计10篇；“翻译+创作”作品包括《尼寺物語》《喪服物語》《多情物語》《人妻物語》《遊女物語》《妖姫物語》《拔穴物語》《腰元物語》《煉金物語》《禁欲物語》《易者物語》《裸女物語》《変装物語》《胡蝶物語》《王妃物語》《幽霊物語》及《賭博物語》，共计17篇；翻案作品包括《妖術物語》与《玉笛物語》，共计2篇。

四、结语

林房雄因其协助战争的行为，在战后受到中日两国文坛的摒弃，然后这样一位作家却在走投无路之际将创作视野投向了古典文学，并借此获得新的活力。其中固然有

历史的偶然性与荒谬性，但其工作也在客观上推动了明清白话小说在日本的传播。就其作品的性质而言，经笔者对原作与林作进行逐一比对发现，有的作品对原作语句有所增删或调整，但从情节到趣旨均与原作几无差别，实为翻译；有的作品在原作开头添加引言，或于结尾添加述评，或改写结尾、续写结尾，或于文中或增加或改写部分情节，但这部分内容所占分量不大，对原作的翻译基本完整，可视为翻译为主、创作为辅的结合体；有的作品则是对原作进行了较大改写，二者形似神不似，确为“翻案小说”。从作品内容看，《中国千夜一夜》收录作品确如作家本人所言，大都为“艳笑绮谈”。作品集最大的主题就是“情”与“色”，着力表现“情”之离奇曲折，“色”之奔放大胆。这些作品固然并非林房雄原创，但他从丰富多彩的明清白话小说中选择了同类作品，这本身即反映了作家的思想倾向。其中或许有他面对联合抵制的“反抗”，同时未尝不是他对当时社会潮流的主动迎合。二战期间，日本政府采取了严格的言论统制与纸张配给制，除配合宣传战争的作品，其他作品很难公开发表，尤其带有娱乐性质的通俗文学更在严禁之列。日本战后初期的文学市场上“肉体文学”、“情色物语”等风靡一时，从中可见从战时高度压抑中解放出来的反弹。事实上，林房雄在《小説と読物》上发表的第一部作品《香妃の妹》即暗合了当时日本民众追求及时行乐的心理，“日本才子+中国妓女”的叙事模式无疑具有东方主义式的猎奇性质。此后的“夜话”系列延续了这一风格，至《中国千夜一夜》则进一步凸显了其情色意味。不仅封面上的推荐词明确写着“取材自《红楼梦》《聊斋志异》《金瓶梅》等中国古典文学的艳笑夜话”⁽¹⁸⁾、“中国五千年历史孕育出的好色文学精粹”⁽¹⁹⁾，封面与内页插图大都为半裸的女性或男女。富有暗示性的语言与挑逗性的插图背后固然有其商业意图，但也降低了作品的文学价值：即使所收录作品并非单纯追求感官刺激的“肉体文学”，仍不免被视为“好色文学”，难登大雅之堂。从这一角度而言，虽然林房雄译介并传播了明清白话小说，但其所塑造的中国形象值得深思。

注：

- (1) 《一束古典的情书》(1928年，上海现代书局)、《都会双曲线》(1932年，上海神州国光社)、《林房雄集》(1933年，上海开明书店)等均是早期译介林房雄及其作品的文集。日本侵华战争时期出版的《世界名小说选》(1941年，满洲图书株式会社)中仍收录了林房雄的作品。
- (2) 林房雄：「あとがき」，《中国千夜一夜》(下)，河出書房，1967年，第245頁
- (3) 勝山稔：「近代日本に於ける中国白話小説集『三言』所収編の受容について——神谷衡平と林房雄の訳業を中心として」，《東北大学大学院 国際文化研究科論集》第17号，2009年，第165頁
- (4) 林房雄：『文学的回想』，新潮社，1955年，第196頁
- (5) 同上，第198頁
- (6) 勝山稔：「近代日本に於ける中国白話小説集『三言』所収編の受容について——神谷衡平と林房雄の訳業を中心として」，《東北大学大学院 国際文化研究科論集》第17号，2009年，第167頁
- (7) 辛島驍：「まえがき——西湖の思い出」，《林房雄・八住利雄「白夫人の妖恋——小説・原作・シナリオ」》，大日本雄弁講談社，1956年，第7頁
- (8) 林房雄：『文学的回想』，新潮社，1955年，第199頁
- (9) 同上
- (10) 鈴木貞美：「文学史を書き直し」，《文学界》，1994年新春特別号，第244頁
- (11) (明)周清源：《西湖二集》，浙江古籍出版社，2017年，第106頁

- (12) 林房雄：「嫉妬物語」，『中国千夜一夜』（上），河出書房，1967 年，第 26－27 頁
- (13) （明）周清源：《西湖二集》，浙江古籍出版社，2017 年，第 105 頁
- (14) 同上，第 106 頁
- (15) 林房雄：「胡蝶物語」，『中国千夜一夜』（下），河出書房，1967 年，第 84 頁
- (16) 同上
- (17) （明）冯梦龙：《警世通言》，岳麓书社，2012 年，第 202 頁
- (18) 林房雄：『中国千夜一夜』（上），河出書房，1967 年，封面
- (19) 林房雄：『中国千夜一夜』（下），河出書房，1967 年，封面

李白の詩歌における人物呼称の日本語訳の考察

陳慧玲

華中科技大学

舒 燦

湖北省蕪春県横車鎮人民政府

1 はじめに

李白は、唐詩の典型を築き、中国史上でも最も優れた浪漫詩人とされている。李白の詩歌は、天衣無縫の神品とされ、英語をはじめとし、ロシア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、韓国語、ベトナム語など、世界各国の言語に翻訳されている。

日本では古くから李白の詩歌に対する関心が高い。平安時代の漢詩の制作には既に李白の詩歌の影響が窺え、江戸時代から日本語訳と注記を付した李白の詩選集は出版されるようになる。国語教育の一環である漢詩の学習項目にも李白の詩歌はよく取り上げられている。しかし、李白の生涯や詩句の吟味や詩歌の受容状況などについて、これまで盛んに調査が行われてきたが、翻訳を視点とする訳文の分析はまだ十分に行われていないようである。

李白の詩歌の特徴の一つとしては、皇帝から一般の人々まで登場し、さまざまな人物を示す表現を多用していることである。人物呼称の中文和訳については、徐曙(2010)、熊慧蘇(2011)、森中美樹(2011)、柴田清継(2016)、園田博文(2016)、孫逢明他(2016)などの調査があるものの、『紅樓夢』『假名列女傳』といった古典籍や戯曲や教材や小説にとどまり、李白の詩歌における人物呼称の日本語訳に関する検討は管見の限り皆無である。

そこで、陳・舒(2019)に続き、本稿では『李太白全集』と四種の訳本を用い、人を表すことばの訳文を中心に分析を行うことを通して、李白の詩歌における人物呼称の日本語訳の手法と特徴を探ってみたいと思う。

2 文献資料と調査方法

翻訳の調査では、原文の吟味と訳文の考察を同時に行う必要があり、今回の調査目的に従い李白の作品集の中国語の原本と日本語の訳本を同時に調査資料として用いた。

李白の作品を収めた選集や全集は中国で数多く出版されている。唐代の李陽氷が編集した『草堂集』(全10巻)は最も早い版本であり、後世では既に散逸しており、通行本としては、北宋の宋敏求が増補した復刻本『李太白文集』(全30巻)が挙げられる。清朝の学者である王琦は、南宋の楊齊賢と元代の蕭士贇と明朝の胡震亨が注解を加えた三家の注釈本を踏まえ、李白の詩文に対する自身の研究成果も取り入れ、注釈をつけた『李太白文集』(全36巻)にまとめた。この注釈本は李白の詩歌の研究に欠かせない参考書として高く評価されているので、今回の調査では、王琦の注釈本を底本とし、2016年に中華書局が出版した『李太白全集』(全5巻)をもとに、中国語における原文の意味を確認した。

李白の詩歌に関する和訳は4種類ある。訓読書き下し文、文語訳、口語訳、翻案訳である。今回の調査では、現代日本語訳の手法と特徴を探るため、口語訳の作品集である岩波書店版の『中国詩人選集第7巻・李白・上』と『中国詩人選集第8巻・李白・下』を中心に利用した。この選集は、日本における李白研究の第一人者である武部利男が訳解をつけた李白の詩集であり、清朝の王琦の注釈本を原詩の底本とした250篇の詩歌を選んでおり、現代日本語の訳本でも李白の詩歌を最も多く扱ったものである。なお、補足資料として『漢詩紀行辞典』『李白』『李白——漂泊の詩人その夢と現実』を用い、日本語訳の李白の詩歌の数をさらに補った。

分析の方法としては、王琦注『李太白全集』から人を示す表現が含まれた李白の詩歌を採集し、それに対応する訳詩を日本語の訳本からあつめた上で、原文と訓読書き下し文を参照しながら、その現代語訳に対する全数調査を行う。統計分析と訳詩文の考察を通して、その翻訳の手法と特色を明らかにしていく。

3 李白の詩歌における人物呼称の日本語訳について

今回の調査では、李白の原詩とそれに対応する日本語訳から人物呼称を用いた詩文と訳詩の組を344例採集した。人物呼称の具体的な指示内容により、李白の詩文と訳詩文は主に皇族、官吏、平民、異族、人称詞という5種類に大きく分けることができる。次はこの5種類の詩文を中心に考察を進めていきたい。

3.1 皇族を示す表現の日本語訳について

中国では、封建社会の歴史が長く、中央集権の政治体制により、皇帝が最高の権力を握っていた。李白は唐の朝廷に仕えたことがあり、皇族を詠んだ詩文も多数残している。今回の調査では、皇族を示す詩文と訳詩は37例見られ、皇帝と皇后、皇妃に関するものである。

皇帝を示す表現としては、李白は「皇」「帝」「君」「王」「主」「君王」「天子」「万乗」などを用いて指し示している。訳詩文では、例1)のように「上皇」をそのまま直訳したり、例2)のように「帝」を同義語の「天子」に言い換えて訳したりする例が最も多く見られる。ほかに、おおむね「皇帝、王様、統治者」といった日本語の同義語を用いている。

- 1) 原詩文 劍閣重关蜀北门，上皇归马若云屯。 《上皇西巡南京歌十首》其十
 訳詩文 劍閣山は重にも開所があつて、さながら蜀の北門である。都へさし ^て
 帰られる上皇の馬車は、雲のむらがるようだ。
 「^{じょうこうにし}上^{なんけい}皇^{めぐ}西^{うた}のかた南京を巡るの歌十首 其の十」
- 2) 原詩文 鸡鸣海色动，谒童罗公侯。 《古风其十八》
 訳詩文 鶏が鳴いて夜のとばりの明けそめるころ、天子に拝謁する公侯たちが
 居ならんだ。 ^{こふう}「古風 ^{てんしんさんがつ}その十八 ^{とき}天津三月の時」

例 3) は、中国後漢の高士である厳子陵を描いた詩文である。厳子陵の本名は厳光で、若くして才名あり、のちの光武帝となる劉秀と同門に学び、劉秀が皇帝となると、姓名を変えて身を隠した。その才能を惜しむ光武帝に長安に召し出され、諫議大夫に除されたが、仕官をことわり、富春山（浙江省富陽県）で農耕や釣りなどをして隠士として一生を終えたという。李白をはじめ、後世では厳光の高尚な気風を賞賛している。原詩では、「万乗君」という汎称を用いて帝王を指しているが、時代や称号などについて明言していない。それに対して、訳詩文では、「万乗の君」と「天子」の意を強調した上に、「光武帝」という具体的な帝王の情報を訳補している。

3) 原詩文 長揖万乗君，还归富春山。 《古风其十二》

訳詩文 万乗の君である光武帝に会釈すると、さっさと富春山へと帰ってしまった。
「古風 その十二 松柏本孤直」

4) 原詩文 永王正月东出师，天子遥分龙虎旗。 《永王东巡歌十一首》其一

訳詩文 永王は正月、東にむかって水軍を出動される。はるか蜀にいます玄宗皇帝から頂いた錦の御旗が、水軍先頭をかざる。
「永王東巡歌十一首 其の一」

例 4) の「永王東巡歌」は、宮廷詩人としてではなく、軍の幕僚として永王の許に馳せ参じた李白が、国家の急を救おうと意気高らかに歌いあげた詩文である。756 年 6 月に唐玄宗は安史の叛乱軍の威脅の下で、長安から急ぎ蜀の成都に移ることとなった。その途上、長安西方の馬嵬駅附近で、皇太子・李亨が別行動を取って北上し、7 月に靈武の地（現寧夏回族自治区の北方）で自ら皇帝（肅宗）となった。玄宗はやむを得ず事後承認したが、肅宗の政治権力を弱めるために、皇子である永王・李璘を四道節度使とし、江陵から出陣して長江の中下流域を安定させた（＝東巡）。上皇である唐玄宗と実質的に政権を握っている皇帝である肅宗が併存している時代背景を考慮し、訳詩文では、原詩文の「天子」を単に直訳するのではなく、その居場所である「蜀にいます」及び錦の御旗を授けた「玄宗皇帝」を明確に訳補したうえに、「水軍先頭をかざる」という出征時の具体的な風景も補い、原詩の内容を的確に読者に伝えようとしている。

5) 原詩文 此时阿娇正娇妒，独坐长门愁日暮。 《白头吟》其一

訳詩文 ちょうどそのころ、阿嬌と呼ばれた陳皇后は、色っぽく嫉妬ぶかすぎたため、ひとり長門宮に幽閉されて日の暮れをなげいていた。
「白頭吟 其の一」

6) 原詩文 汉家秦地月，流影照明妃。 《王昭君其一》

訳詩文 漢の都、長安の夜空にかかる月。その流れゆく月の光が王昭君を照らす。
「王昭君 其の一」

李白の詩文では、皇后や貴妃にふれる時、「飛燕」「西施」「阿嬌」のように名前を直接使用することが多い。訳詩文では、直訳を取ることが多い一方、例 5) のように、愛称である「阿嬌」を直訳した上に、「陳皇后」という皇族の身分情報を訳補している。陳皇后は前漢の武帝の最初の皇后であり、武帝の従姉妹にあたる。金の家を造って隠したいほど漢武帝に愛されていたが、嫉妬深い性格や呪いを使う罪で皇后の座を追われ、一生、長門宮という宮殿に監禁されるようになったという。訳詩文の補足により、阿嬌に関する原詩文の内容をより理解しやすくなるのである。

例 6) の原詩文にある「明妃」は前漢元帝の後宮の美女である王昭君の別称である。紀元前 33 年に、匈奴との和親政策のため王女の身代わりとして呼韓邪単于に嫁がされ、漢土を慕いながら生涯を胡地でおくった。文学作品や絵画の中でその哀話を題材とすることは多く、日本でもその名が知られている。訳詩文では貴妃の身分を本名に直して訳し、読者の理解を助けようとしている。

3.2 官吏や軍隊を示す表現の日本語訳について

盛唐の政治制度は前時代に比べるとかなり成熟しており、官吏や軍隊関連の用語も豊富である。李白の詩歌には、朝廷に関連する人物が多く登場しており、今回の調査では、官吏や軍隊を示す詩文と訳詩は 77 例見られ、官職名、朝廷に仕えた有名人、將軍および兵士に関するものである。

- 7) 原詩文 青門种瓜人，旧日東陵侯。 《古风其九》
 訳詩文 長安の青城門の外で瓜をつくっている人は、むかしは東陵侯であつた人だ。 「古風 その九」

官職名や役職名で人を呼称する習慣は中国にも日本にもあるが、言い方は必ずしも一致するわけではない。李白の詩文では、官吏を指す表現として、「吏」「尹」「臣」「王公大人」「三公」「相」「丞相」「專城」「牧伯」「郎官」「督護」「諸侯」「漢陽令」「太常」「王宰」「永王」「東陵侯」などが挙げられる。日本語の訳文では、直訳のほかに、「長官」「県長」「知事」「お偉いさん」「大臣」「書記」などの同義語を多く用いている。

例 7) の原詩文では、東陵侯の境遇を通して、世の中の無常を嘆いている。秦の東陵侯であつた邵平は、秦が滅ぼされた後、庶民に戻り、長安の東でウリを栽培して暮したと『史記』蕭相国世家に記されている。原詩文で、既に背景的な情報を詳しく示しているので、訳詩文では「東陵侯」と直訳し、敢て具体的な人名を補足しなかった。一方、例 8) のように、原詩文の官職名「諸侯」を現代日本の官職名「知事」に言い換えたり、例 9) のように、「太守」を「長官」に言い直したうえに、管轄する地域である「漢中」についても「梁州」であると括弧で特別に訳注している。

- 8) 原詩文 徒干五诸侯,不致百金产。 《送王屋山人魏万还王屋》
 訳詩文 しかし気の毒なのは、君が五人の知事に会っていながら大した金には
 ならなかったことだ。 「王屋山人魏万の王屋に還るを送る」
- 9) 原詩文 袖长管催欲轻举,汉中太守醉起舞。 《忆旧游寄谯郡元参军》
 訳詩文 袖は長くひるがえり、笛の音にせきたてられて軽やかに天にのぼろう
 とし、漢中（梁州）の長官は酔うと起ちあがって舞った。
 「旧遊を憶い、谯郡の元参軍に寄す」

例 10) の原詩文では、官職名の「臣」を 2 回使い、それぞれ皇帝に奉仕する忠臣と謀反をたくらむ奸臣を指している。李白は玄宗皇帝に認められ、唐朝の翰林院に仕官し、順風満帆な宮廷生活を送っていたが、中傷により寵を失い、長安を追い出されてしまった。この詩は、唐王朝の前途を憂う詩人の気持ちを描いている。訳詩文では、「家臣」と「奴隸」と訳し、忠臣への親しみと奸臣への軽蔑を見事に再現している。例 11) は李白が漢陽の県長に招かれ、宴会に赴いた時の風景を描いた詩文である。「郎官」は中国古代の「議郎、中郎、侍郎、郎中」などの官職の総称であるが、原詩文では特定の人物を指している。そこで、訳詩文では、「尚書郎張謂」と「具体的な官職名」と「人名」を訳補している。

- 10) 原詩文 君失臣兮龙为鱼,权归臣兮鼠变虎。 《远别离》
 訳詩文 君公が家臣を失うとき、竜はうぐいとなり、権力が奴隸にうつるとき、
 二十日ねずみは虎に変わります。 「別れ〔遠別離〕」
- 11) 原詩文 锦帐郎官醉,罗衣舞女娇。 《寄王汉阳》
 訳詩文 ダマスコ織の天幕の中で、尚書郎張謂は酔って横たわった。うすもの
 のころもの舞姫は陽気に、 「王漢陽に寄す」

李白の詩歌には、官吏としての経歴をもつ歴史人物も度々詠まれている。「謝朓」「彌衡」「晁卿」「賀季真」など原詩文でフルネームで用いられている場合、直訳することが多い一方、その人物の特徴や歴史的な評価などを補足することがある。さらに、例 12) の訳詩文では、原詩文の「屈平」を知名度の高い字で「屈原」と言い換えたうえに、「憂愁の一生をおくったけれども」という原詩に明言されていない詩人の意図、つまり語用論的情報も付け加えている。

有名な歴史人物について略称で表す李白の詩文も多く見られる。訳詩文では、姓や名や字を補ったり、関連の歴史的な背景知識を足したりして翻訳している。例 13) のように、有名人の苗字のみの原詩文の「枚馬」に対して、訳詩文では、「枚乗や司馬相如」と姓名を補完しただけでなく、「孝王に招かれて遊んだ文人たち」と訳補し、梁孝王とのつながりや複数人の存在といった原詩文の背後に隠れている情報も読者に提供している。

- 12) 原詩文 屈平辞赋悬日月，楚王台榭空山丘。 《江上吟》
 訳詩文 屈原は憂愁の一生をおくったけれども、その作品は日や月と並び懸つて光を争っている。楚の王様は快樂の一瞬をたのしんだけれども、その建物は影もなくなり、山や丘だけが残っている。 「江上吟」
 13) 原詩文 梁王宫阙今安在，枚马先归不相待。 《梁园吟》
 訳詩文 梁の孝王の宮殿も、今はどこにも存在しない。枚乗や司馬相如、孝王に招かれて遊んだ文人たちが一足先に死ぬと、まもなく孝王も亡くなった。 「梁園吟」

李白の詩文では、軍隊に関連する「将」「將軍」「飛将」「兵」「戰士」「戍客」などを用いている。直訳のほかに、例 14) のように、「一番えらい大将」と戦闘力の強さなどの情報を付加する訳文も見られる。

- 14) 原詩文 突营射杀呼延将，独领残兵千骑归。 《从军行》
 訳詩文 敵の本営に突入して、匈奴の一番えらい大将を射殺し、ひとりで、生き残りの千騎をひきつれて帰ってくる。 「従軍行」

3.3 平民を示す表現の日本語訳について

李白の生涯では、中国の各地を放浪する時間が長く、一般の庶民とのふれ合いも多い。今回の調査では、平民を示す詩文と訳詩は 118 例見られ、主に男性と女性とその他に大別することができる。

男性については、李白は「夫」「翁」「叟」「郎」「兒」「子」「士」「生」「僧」などを用いて指示している。例 15)、16) のように、同義語や類義語を用いる直訳は主な訳し方である。訳詩文では、それぞれ「男、紳士、男一匹」「翁、おじさん」「じいじ、年老いた」「者」「子、人」「息子、若者、子」「士、若者、やつども」「学者」「僧」と対訳している。例 17) の訳詩文では、原詩文の「青雲士」を「いま青雲の上に出世したやつども」と翻訳し、「いま」という時間を明記したうえに、「やつども」を通して詩人の軽蔑の態度も伝えている。

- 15) 原詩文 蜀僧抱绿绮，西下峨眉峰。 《听蜀僧浚弹琴》
 訳詩文 蜀の僧が名琴緑綺を抱いて、西方の蛾眉山のみねから下ってきた。 「蜀僧浚の琴を弾ずるを聴く」
 16) 原詩文 丈夫何事空啸傲，不如烧却头上巾。 《醉後贈从甥高镇》
 訳詩文 男一匹、空元気出していばってみても何にもならぬ。それより、頭の上の窮屈な帽子など焼いてしまった方がよい。 「酔後 従甥の高鎮に贈る」

- 17) 原詩文 奈何青雲土，弃我如尘埃。 《古风其十五》
 訳詩文 ところが、どうしたことだ、いま青雲の上に出世したやつどもは、われわれをチリアクタのように棄ててかえりみない。
 「^{こふう}古风 ^{えんしようかくかい ひ}その十五 燕昭郭隗を延き」

一方、女性については、李白は「母」「女」「婦」「姫」「娥」「妓」「美人」「佳人」「紅妝」「魏姝」などと呼んでいる。例 18)、19) のように、同義語や類義語を用いる直訳は主な訳し方である。訳詩文では、それぞれ「母、おばさん」「女、童女」「嫁、女房、女」「女、美女、女ども」「娥」「芸者、俳優、妓」「美人、美しい人、美しい娘」「佳き人」「紅の化粧をした女」「美しい娘たち」と対訳している。例 20) の訳詩文では、「妓」と訳した上に、「お酌」をするという役割も補足している。例 21) の原詩文は秦の始皇帝の名を借りて唐玄宗の迷信を風刺している。秦の始皇帝は不老不死の薬を求めるために、徐市に千名の童男童女を率いて海へ探しに行かせた物語がある。訳詩文では、この文化的背景を重視し、「童女」と訳補し、秦女の年齢層を限定している。

- 18) 原詩文 鏡湖水如月，耶溪女似雪。 《越女词其五》
 訳詩文 鏡湖の水は月のように姿がうつる。若耶溪の女は雪のようにしろい。
 「^{えつじょ うた}越女の詞五首 ^{ない おく}其の五」
- 19) 原詩文 虽为李白妇，何异太常妻。 《贈内》
 訳詩文 李白の女房とはいうものの、太常の妻とどこがちがう？ 「^{ない おく}内に贈る」
- 20) 原詩文 美酒樽中置千斛，载妓随波任去留。 《江上吟》
 訳詩文 舟のまんなかにすえられた大樽の中には、千石の美酒が用意されている。お酌の妓をのせ、波のまにまに、流れたり止まったりする。
 「^{こうじょうぎん}江上吟」
- 21) 原詩文 徐市载秦女，楼船几时回。 《古风其三》
 訳詩文 徐市は秦の童女をのせてでかけたが、その楼船はいつかえって来よう。
 「^{こふう}古风 ^{しんこうりくごう はら}その三 秦皇六合を掃いて」

その他の平民に関しては、李白の詩歌では「世人」「蒼生」「客」「人」「者」「徒」「児、童、童児」などの表現で言い表している。特に「人、客、者、徒」の前にさまざまな修飾語を付け加え、人の性格（例 22）や職業（例 23）や境遇などを表している。今回調査した訳詩文では、それぞれ「世間の人々」「天下の人民、民草」「客、旅人、勇士」「人々、人物、人間、人」「師」「人」「子供、童士」などの同義語や類義語に訳されている。

- 22) 原詩文 谢公终一起，相与济蒼生。 《送裴十八图南归嵩山其二》
 訳詩文 謝安石が、さいごに起ちあがって活躍したように、君といっしょに天下の民草を救おうじゃないか。
 「^{ばいじゅうはち と なん}裴十八図南の嵩山に帰るを送る ^{かうざん かえ おく}二首 其の二」

- 23) 原詩文 時清不及英豪人，三尺童儿重廉蔭。 《醉後贈从甥高鎮》
 訳詩文 太平の恩恵は、英豪の人にはかえってとどかない。三尺の背ぐらいし
 かない子供でも、廉頗や蔭相如をばかにしているではないか。
 「^{すいご}醉後 ^{じゅうせい}從甥の^{こうちん}高鎮に^{おく}贈る」
- 24) 原詩文 獵客張兔罝，不能挂龍虎。 《送韓淮裴政孔巢父還山》
 訳詩文 獵師が兔を捉まえるための網を張っても、それでは竜虎は捕らえられ
 ない、 「韓準、裴政、孔巢父の山に還るを送る」

3.4 異族を示す表現の日本語訳について

李白の詩歌では、唐朝に反抗しようとする異国や異民族もよく詠まれている。外敵の意味合いが強く、見下して表現していることが多い。今回の調査では、異族を示す詩文と訳詩は 31 例見られる。

中国の古代では、北方や西方の異民族を「胡」と総称しており、「胡人、胡姫、胡服」などが広く使われている。李白の詩文でも、「胡風、胡砂、胡霜、胡閨、胡地、胡鷹、胡馬、胡虜」などを多用している上に、「虜」「北虜」「戎虜」のような蔑称や「匈奴」「月氏」「单于」「楼蘭」「天驕」のような通称も使用している。「胡」に関しては、主に「えびす、胡人、異国、外人、砂漠」といった類義語に訳しており、「虜」「北虜」「戎虜」はおおむね「えびす、野蛮人」と直訳している。例 25)～27) の訳詩文では、原詩文の「胡処」「楼蘭」「天驕」をそれぞれ「匈奴その他の蛮族」「敵の楼蘭王」「天の驕子とうぬぼれる匈奴」と訳補し、異民族の野蛮さや敵対関係やその尊大さを鮮明に再現している。

- 25) 原詩文 秦家筑城备胡处，汉家还有烽火燃。 《战城南》
 訳詩文 秦の始皇帝は万里の長城をきずいて、匈奴その他の蛮族の南下を防いだ。しかし、漢（じつは唐）の時代になって、またそこにのろし火が燃えて辺境の急を告げる。
 「^{じょうなん}城南に^{たたか}戦う」
- 26) 原詩文 愿将腰下劍，直为斩楼蘭。 《塞下曲六首》其一
 訳詩文 なんとかして、腰の劍をふるって、ただちに敵の楼蘭王を斬ってすてたいものである。
 「^{さいか}塞下の^{きよく}曲六首 其の一」
- 27) 原詩文 借问谁凌虐，天驕毒威武。 《古风其十四》
 訳詩文 だれがいったい、こんなむごいことを引きおこしたのか、とたずねてみると、だいたい、天の驕子とうぬぼれる匈奴が武力を悪用するからである。
 「^{こふう}古风 その十四 ^{こかんふう}胡閨風沙饒く」

「胡姫」は「裴十八図南の嵩山に帰るを送る二首其の一」「少年行」「前有樽酒行二首其の二」という 3 首の詩に登場している。「外人の女」と 2 回訳したのに対して、例 28) の日本語訳に限り、外人という汎称ではなく、固有名詞である国名「イラン」と「美しい」容貌を強調している。

28) 原詩文 胡姬招素手,延客醉金樽。 《送裴十八图南归嵩山其一》

訳詩文 イランの美女が白い手で招き、客をひっぱりこんで金の酒樽で酔わせ
る。 「裴十八図南の嵩山に帰るを送る 二首 其の一」

3.5 人称詞の日本語訳について

李白の詩歌には、人称詞を多く取り入れている。今回の調査では、次の表1のように、原詩文では、自称詞、対称詞、他称詞の使用は81例見られた。自称詞では、人称代名詞である「妾、余、我、我輩、吾」と普通名詞である「客、壮士」と固有名詞である「李白」を用いており、対称詞では、人称代名詞である「君、公、郎、夫子、良人」と普通名詞である「少婦、丈夫」と固有名詞である「岑夫子、丹丘生」を用いている。例28)のように、自称詞の日本語訳はすべて顕在し、「わたし、わたくし、わがはい、ぼく、われわれ、私、自分、李白」に直訳しているのに対して、対称詞の日本語訳の95%は顕在しており、おおむね「あなた、君、おまえ」に直訳していると同時に、「普通名詞+よ」「固有名詞+さん/君」の形で表されている。他称詞は1例のみで、「彼」を指示代名詞である「あのひと」と訳している。

表1 李白の詩歌における人称詞の対訳表

詩文 人称詞	原詩文	訳詩文
自称詞	妾	わたし (10)、自分 (1)
	余	わがはい (1)、自分 (1)
	我	わたし (12)、われわれ (4)、わたくし (2)、ぼく (1)、私 (3)、自分 (1)
	我輩	わがはい (1)
	吾	わたし (1)、わたくし (1)
	客	わたし (1)
	壮士	わたし (1)
	李白	李白 (2)
対称詞	夫子	あなた (1)
	公	あなた (1)
	郎	あなた (2)
	君	あなた (7)、君 (18)、おまえ (1)、省略 (2)
	良人	あなた (1)
	岑夫子、丹丘生	岑さん (1)、丹丘君 (1)
	丈夫	丈夫よ (1)
	少婦	若い嫁よ (1)
他称詞	彼	あのひと (1)

() 内は使用回数。

今回の調査では、例 30) のように、訳詩文では、原詩文の対称詞を省略して訳した例も見られ、「ころがり込もうじゃないか」という疑問表現を通して対称詞の呼びかけ性を代替し、李白の自由奔放な性格を際だ立たせている。さらに、例 31) のように、訳詩文では、原詩文にない対称詞を訳補する例も見られ、対称詞を顕在させることにより、友人に一層の努力をしようと働きかける詩人の強い気持ちを強調している。

- 29) 原詩文 烏啼隱楊花，君醉留妾家。 《楊叛兒》
 訳詩文 烏が啼いて柳の花にかくれると、あなたは酔うて、わたしの家にお泊
 りになる。 ようはん じ 「楊叛児」
- 30) 原詩文 且將換酒與君醉，醉歸托宿吳專諸。 《醉後贈從甥高鎮》
 訳詩文 酔うたあげくは、呉の專諸のところへでもころがり込もうじゃないか。
すい ご じゅうせい こうちん おく 「酔後 從甥の高鎮に贈る」
- 31) 原詩文 謝公終一起，相與濟蒼生。 《送裴十八圖南歸嵩山其二》
 訳詩文 謝安石が、さいごに起ちあがって活躍したように、君といっしょに天
 下の民草を救おうじゃないか。
ばいじゅうはち と なん すうざん かえ おく 「裴十八図南の嵩山に帰るを送る 二首 其の二」

4. おわりに

以上、5種類の人物呼称をめぐり、李白の詩歌の原文を参照しながら、現代日本語訳に対して全数調査を行った。そこで、次のようなことを確認し得た。

李白の詩歌における人物呼称を日本語に訳す際、前稿で報告した神話伝説の訳出時より多く、主に「日本語の同義語や類義語の使用」「中国語の原文の忠実使用」「人物関連の背景知識の補足」「中国語の語彙の成分分析による拡張訳」「語用論的変更と調整」という5種類の翻訳の手法が用いられている。今回の調査では、原文を日本語の同義語や類義語に言い換える手法は最も多く用いられ、5種類の人物呼称で活用されている。人物の関連情報や特徴を部分的、全体的に補足する手法も多用されており、人称詞以外の翻訳に応用されている。中国語の原詩文を忠実に直訳する方法もある程度見られ、人称詞の翻訳で最も多く見られる。中国語の語彙成分を分析したうえで成分に対応しながら翻訳する手法や語用論に基づいて発話態度を調整したり文構造を変更したりする手法は最も使用率が低いものの、各種類の呼称の翻訳で散見されている。誤訳に関しては、今回の調査では確認されていない。

本稿では、武部利男氏による李白の詩文の現代日本語訳を中心に考察した。これから、日本語訳の版本を増やし、版本や翻訳効果の比較及び翻訳者の介在状況など多方面から李白の詩歌の日本語訳について研究を進めていきたいと思う。

参考文献

- [1] 柴田清継 (2016) 「中国古典解釈における日中間の異同 — 高等学校国語教材を対象として —」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』26, 45-62
- [2] 徐曙 (2010) 「中文日訳における人称代名詞の省略と顕現」『日本言語文化研究』14, 64-70
- [3] 園田博文 (2016) 『官話指南総訳』(明治 38 年刊) の日本語 — 当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便・人称代名詞を手がかりに — 『近代語研究』19, 321-338
- [4] 陳慧玲・舒嫻 (2019) 「李白の詩歌における神話伝説の日本語訳に関する考察」『日中翻訳文化教育研究』4, 19-31
- [5] 熊慧蘇 (2011) 「一人称の訳から見る『假名列女傳』の人物像 — 「妾」の訳語を中心に —」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』41, 63-84
- [6] 森中美樹 (2011) 「簡述日訳《红楼梦》之难点 —— 以平冈龙城《国译红楼梦》为例」『红楼梦学刊』6, 240-250
- [7] 孙逢明・王慧・李海川 (2018) 「浅析戏曲剧本中称呼语的日语翻译 —— 以吕剧《姊妹易嫁》为例」『传播力研究』25, 31-33

中国日语翻译研究一瞥

——以 1978-2018 年间的期刊论文为考察对象

方芝佩
华东师范大学

1 引言

中国译学界历来重视研究成果的梳理汇总,或总结特定历史时段的研究(如郭建中 1999;肖辉 2011;许钧、穆雷 2009),或评析分支领域的发展状况(李德凤、胡牧 2009a,2009b;黎难秋 2010)。日语翻译研究作为中国译学研究的一个组成部分,四十年来取得了长足进步,但至今为止鲜有此类的回顾和综述。据笔者调查除了口译方面 2 篇综述性论文(杨晓辉、于英杰 2010;路邈 2016),杨伟(2014)是唯一 1 篇以日语翻译研究论文(发表于 2013 年 1 月-2014 年 5 月间)为对象的综述。杨文(2014:39)肯定了日语学界在运用文化研究理论、现代语言学理论、语料库进行翻译研究取得成果以及翻译史方面的成绩,同时指出了还存在的问题:日汉翻译研究与当代译学理论最新成果之间缺乏紧密的有机联动性,不少论文研究视野和方法还停留在主观印象式批评或日汉对译的简单语义研究,真正意义上的描述性研究、语料库研究还处于起步阶段,具有文化研究视野的论文也多缺乏深度和广度,缺少敏锐的问题意识。那么,如何认识日语翻译研究的现状进而找出解决问题的方法呢?笔者认为有必要对四十年来日语翻译研究的发展进行梳理,追溯问题的历史根源,进而谋求更好的发展。考虑到研究水平的代表性、学术影响范围和影响力,笔者分别以“日语”、“日本”为搜索词,从外语类核心期刊(包括《外国语》、《外语教学》、《外语教学与研究》、《外语界》、《外语研究》、《外语与外语教学》、《现代外语》、《解放军外国语学院学报》、《外语学刊》、《外国语文》共 10 种)、翻译类核心期刊(包括《中国翻译》、《中国科技翻译》、《上海翻译》共 3 种)中检索 1978-2018 年间探讨翻译问题的论文,根据论文题目、摘要及关键词最终筛选出 141 篇日语翻译研究论文。统计没有穷尽所有外语类、翻译类核心期刊,但所选的 13 种已是国内刊载日语学科论文相对较多、收录较全的期刊。此外笔者还收集到期刊《日语学习与研究》40 年来讨论日语翻译的论文 310 篇,这一数量是前面 13 种期刊发表总数的 2 倍以上,可见《日语学习与研究》是日语翻译研究成果最为重要的展示场所之一,有必要纳入本研究的考察范围。因此本文的考察对象确定为 1978-2018 年间刊载于 14 种中国核心或重要期刊上的 451 篇以日语翻译研究为主题的学术论文。

2 日语翻译研究的数据分析

为全面了解日语翻译研究的量化特征,笔者主要收集了两方面的数据。

2.1 日语翻译研究总体情况

1978-2018 年间 10 种外语类核心期刊上发表的日语及日本相关论文共计 1180 余篇,其中日语语言研究占 60% 左右,其次是日本文化 / 文学研究 20%、日语教育 / 教学研究

13%。具体分布如表 1 所示。

表 1：1978-2018 年各类日语研究在 10 种主要期刊中的分布情况

期刊名称 \ 研究领域	日语教育 / 教学研究	日语语言研究	日本文化 / 文学研究	翻译研究
《外国语》	23.5%	55.9%	17.6%	2.9%
《外语教学》	16.9%	57.7%	18.3%	7.0%
《外语教学与研究》	34.5%	65.5%	0%	0%
《外语界》	57.9%	15.8%	21.1%	5.3%
《外语研究》	9.4%	64.7%	16.5%	9.4%
《外语与外语教学》	15.1%	65.9%	10.8%	8.1%
《现代外语》	20.0%	72.5%	5.0%	2.5%
《解放军外国语学院学报》	9.3%	55.8%	30.8%	4.2%
《外语学刊》	8.5%	74.5%	8.5%	8.5%
《外国语文》	15.9%	72.7%	2.3%	9.1%

在统计时有关翻译方面的教学、具体语言项目的翻译问题以及探讨文学作品翻译的论文都被归入了翻译研究一类，即便如此翻译研究类论文所占比重仍然只有 7%，总数及占比相对较高的《外语研究》、《外语与外语教学》、《外语学刊》三种期刊也未达到 10%。可见日语学界对翻译问题关注甚小，语言文学研究始终占据着传统优势地位。

40 年来发表在 13 种外语类、翻译类期刊中的日语翻译研究论文平均每年不足 4 篇，相较于年平均数以百计量的中国译界，来自日语学界的声音实在是微乎其微。这背后除去日语作为“小语种”的客观因素之外，恐怕还有亟待学界同仁反思与改进的地方。

2.2 各个翻译研究类别的发展情况

本文参考罗列、穆雷（2010）的翻译学科的分类，兼顾翻译批评和翻译教学的重要性，将四百多篇论文逐一归类到“基本理论”、“汉日对比与翻译技巧”、“翻译批评”、“文学翻译”、“非文学翻译”、“翻译教学”、“口译研究”、“译介”、“翻译史”、“其他”（主要包含翻译技术与翻译管理、书评等）。表 2 展示了日语翻译研究 40 年来各个分类研究的发展变化。“汉日对比与翻译技巧”研究占总数近 1/3，但 1990 年代后期呈递减趋势，近 5 年降到 1/10 以下。总数位居第二的“翻译批评”在 1990 年代略有下降后逐渐回升，近 10 年跃居首位。随着日语翻译专业硕士学位的设立，“口译”、“翻译教学”、“非文学翻译”研究明显增多。“非文学翻译”更是在近 5 年来超过了“文学翻译”，部分原因是受到了外宣翻译研究的带动。作为翻译研究文化转向后的两类主要成果“翻译史”与“译介”研究在近 5 年表现突出。

表 2：1978-2018 年日语翻译研究论文发展趋势

年份 主题	1978 - 1982	1983 - 1987	1988 - 1992	1993 - 1997	1998 - 2002	2003 - 2007	2008 - 2012	2013 - 2018	总计	占比 (%)
基本理论	3	7	4	7	6	2	2	2	33	7.32
汉日对比与 翻译技巧	19	39	19	19	14	12	9	9	140	31.04
翻译批评	8	9	10	5	3	10	20	18	83	18.40
文学翻译	6	9	9	2	5	5	4	5	45	9.98
非文学翻译	2	4	3	2	2	4	1	11	29	6.43
翻译教学	2	1	4	3	5	1	3	16	35	7.76
口译研究	0	1	1	0	2	2	10	7	23	5.10
译介	0	0	0	1	6	0	3	7	17	3.77
翻译史	0	2	1	1	1	2	3	12	22	4.88
其他	2	3	5	4	3	2	1	4	24	5.32
总计	42	75	56	44	47	40	56	91	451	100

上述变化大略可以看出 40 年来日语学界的翻译研究动向。论文数量最多的两个时期分别 1980 年代中期和 2013 年以来的 5 年左右时间，但前一个时期主要是“汉日对比与翻译技巧”研究唱主角，后一个时期则是“翻译批评”、“非文学翻译”、“翻译教学”、“翻译史”几个类别的研究平分秋色。其实，这一变化趋势在 2008 年左右已经显现，表明日语学界正逐渐扩大研究范围，并能较准确地跟进我国译学界的热点问题。当然统计数据只能反映大致的趋势，毕竟论文总量有限，要想得出更可靠的结论需要深入分析，本文接下来的部分便是基于这四百多篇论文的研读结果。

3 日语翻译研究主要成果与特征分析

中国的翻译研究以英语学界为主，基本上都打上了西方翻译理论的烙印，经历了和西方翻译研究大体类似的发展阶段，可划分为三种研究范式：传统阶段的语文学或文学范式、现代阶段的结构主义语言学范式、当代阶段的文化范式（司显柱 2018：130）。日语学界也受到一定影响，总体来看 1980 年代占比靠前的汉日对比与翻译技巧、翻译批评、文学翻译研究三类研究表现出传统语文学范式与语言学范式的研究倾向；1990 年代以后文化研究倾向有所增强，待到 2000 年以后翻译批评、译介学和翻译史三类研究的发展使这一倾向愈发明显。当然，不同的研究范式并不只对应某个（些）特定的翻译研究类别，同理某一项具体研究可能融合不同范式的做法。事实上随着翻译研究的跨学科特点越来越明显，不同学派或范式在研究视角和方法上的差异已不再泾渭分明。本文将参照这一范式分类，首先从“语言问题”、“文学问题”、“文化问题”三个方面讨论日语翻译研究发展的宏观特征，而所谓“语言问题”，既是指研究所受的语言学范式的影响，也指研究主要涉及的语言层面，“文学问题”、“文化问题”与此同理。

从表 2 的统计来看，基本理论方面的研究一直处于低潮，尤其是近些年越发冷门，这在很大程度上反映了日语学界在翻译理论研究上的弱势。笔者认为基本理论研究关涉翻译研究的全局，很有必要对此也作一番考察。

3.1 日语翻译研究中的语言问题

早期的论文较多地关注由汉日语言的结构性差异带来的翻译问题,通常体现在词句层面,如量词、代词、拟声词拟态词、谚语、敬语、主语、程度补语、日语长句、词序等。如何化解汉日语间无法词句“对应”的难题成为翻译技巧研究的中心任务。孔凡明(1983: 10)的看法具有一定的代表性:翻译的“道道”(即翻译的方法)“除了翻译理论问题外,主要的是在翻译实践中研究两种语言的对比,寻找两种语言在表达形式上的差异,进而探索比较典型的译例,归纳起来,从中找出有规律性的东西,然后再用于翻译实践,当然,学翻译和学写文章一样,都没有一成不变的固定模式。一切都应以符合‘信达雅’统一这一原则为标准。”这种静态的、微观的研究方法在译学发展初期具有承前启后的重要意义,整理保留下了翻译工作者大量的宝贵经验,但从翻译研究的长远发展来看作用有限。

1990年代以后研究者注重对既有译本的考察,尝试从中日两国的民族文化、思维方式来解释语言系统的整体特征以及翻译语言呈现的总体规律,力求能“知其然,也知其所以然”。语料库得到越来越广泛的应用,在很大程度上充实了用例,提高了研究结论的信度,也更符合翻译研究以“言语”而非“语言”为研究对象的要求。有的研究还根据研究目的建立具有针对性的小型语料库,比如许薛、戈玲玲(2016)基于言语幽默概论考察了《阿Q正传》的英译本和日译本的幽默文本翻译模式,做法是首先建立汉、英、日三种语言的平行语料库,之后进行检索、分类描写、分析,最后探讨日译本与英译本的翻译模式的差异,总结出促使日译本大量使用同类转换模式的因素,即汉日同形汉字的使用、日语拟声拟态词的使用和中日文化相近性的体现。“引入理论框架——语料库提供例证——解释现象、得出结论”这一研究思路在近几年的论文中较为常见,有别于传统的翻译技巧讨论,理论解释与整合更加充分,对其他语种的研究者而言或许可以提供更多的参考价值。语料库在其间的作用不言而喻,但在本文统计范围内属于语料库翻译学本体研究的论文凤毛麟角,可见对于绝大部分的研究者而言语料库只是工具,还无法成为方法论研究的对象,这可能会制约语料库在日语翻译研究中的应用。

有学者在1980年代就指出语用学和文体学的研究成果可以为从语言学的角度探讨翻译问题开辟新的天地(林璋1987: 61),此后的研究也确实对翻译文本的语用特征有所侧重,还出现了语义学、篇章语言学、认知语言学等语言学理论的“身影”,但没有出现持续的、系统的、推进式的研究,远不足以引起日语翻译研究根本上的变化。陶振孝(2006: 32)呼吁加强译本研究,“对译本的研究涉及到方方面面”,“只要是译本,它就给我们提供了研究的资料,我们都可去研究。我们的研究不是太多了,而是太少了”。如果说翻译研究的基础是译本研究,那么译本研究的基础就是语言研究了。其实现代语言学完全可以满足翻译研究对语言分析的要求,较好地将语言表达与语境条件相结合,使文本分析科学、详尽。然而日语翻译研究在语言学理论的应用方面相当薄弱,仍以语法辨析、用法归纳的语言对比居多。今后应在此基础上更进一步,上升到对文本的结构与功能、制约和影响翻译的各种因素、翻译的社会文化功能等方面的研究。

3.2 日语翻译研究中的文学问题

文学翻译研究中一大部分是关于诗歌翻译,1980-90年代集中在日本俳句、和歌的翻译问题。诗歌翻译要不要定型、定哪种型,可谓仁者见仁智者见智,所依据的判断标准却多是“信、达、雅”、“形似、神似”、“风格美、形式美、音乐美”。面对文学翻译尤其是诗歌翻译的复杂性,中国传统译论的理论解释力受到考验。近几年仍不断有诗歌翻译研究者立足实践,提出新的翻译方案(如金中 2011;王向远 2017)。也有研究者认识到为诗歌翻译设定单一的规则或采用静态的翻译标准往往行不通,开始多方面地考量诗歌翻译中的影响因素(如王琪 2015;刘利国、董泓海 2015)。

文学作品的翻译是翻译批评研究的主要对象。早期的研究多是以“信达雅”为标准指摘误译,其中“信”是翻译的首要条件(岑治 1982:50),即使译诗也应以“信”为本(卞况 1990:60)。在“信”的基础之上,文学翻译要“有如中文之写作”,没有“翻译腔”(王东林 1986:85)。文学翻译中误读情况并不少见,只是日语学界普遍关注无意性误读(如词汇、语法、惯用型理解错或用错),忽视了对翻译研究而言更具学术价值的有意性误读,如历史性误读、权益性误读、创造性误读、关照性误读(李炜、庄凤英 2003)。

在文化研究的影响下,文学翻译批评呈现出新气象:

- (1) 倾向对多个译本进行对比研究、系统描述,不做简单的优劣评判。
- (2) 重视对译本间差异的解释,将译本产生的社会文化、历史环境纳入考量范围,探讨译本背后影响翻译策略选择的因素。
- (3) 研究对象从文本扩展至翻译过程、翻译事件和作为翻译主体的译者。
- (4) 问题意识明确,从特定角度或借助特定理论(如语言功能理论、受众感知、翻译伦理等理论)分析译本。

2009年关于林译村上文学的“学术争鸣”集中体现了这些变化。无论是作为原作的村上文学,还是作为译作的林译,都具有鲜明的文体特色。林少华(2009)否认译作对原作实行了语言上的“美化”,声明仍然遵守了“信”、“忠实”的翻译原则,只不过这是一种“审美忠实”,对文学翻译而言“不但是允许的,也是必需的”。如何理解译者的这种“忠实”?“按常理围绕翻译文体展开的批评应该是讨论翻译观或者翻译技巧的问题”(王成 2009:127),但日本研究者藤井省三(2009)没有按常理出牌,将目光投向了翻译现象背后的文化政治因素,无意间领着中国学者走出了文本层面的字句计较。译本之外的社会、文化乃至政治因素冲击着静态的、规定性的翻译规范,研究者意识到在讨论原作和译作的文体之前要先解决两个前提性问题:“其一,在村上文学的介绍初期有多种村上译本,为何最终是‘林译’占领了中国大陆的读书市场?其二,‘林译’问题以及他所作的村上文学解读在21世纪之交中国特定的文化背景下究竟处于什么样的位置?”(王志松 2009:117)。在这一问题意识指导下,译本在目标语文化中的境遇和影响成为研究重心,捕捉到了更多隐藏在文本背后的因素。这次学术争鸣以文化研究、比较文学研究方向的学者参与居多,打破了语言学途径的研究套路,实现了对译本和翻译现象的多元化解读,既关注到了译者的主体性、翻译观,也提出了对翻译批评的批评,促进了日语翻译研究的健康发展,起到了翻译批评本应有的作用。

3.3 日语翻译研究中的文化问题

关于林译村上文学的学术争鸣可以说是日语学界采用文化途径进行翻译研究的一次探索,文学翻译问题拓展为文化翻译问题。其实早在1980年代“文化翻译”已进入了日语翻译研究者的视野,不过针对的多是文化词汇、文化现象的翻译,比如裘珍(1986)分析了文化理解不到位导致误译的情况,陈岩(1994)以联想意义、比喻、文化特有词汇(与历史、文化密切相关的)等为主集中探讨了“翻译与文化”。日语学界在处理文化不可译问题时常常采纳较为熟悉的奈达、纽马克、卡特福德等人的理论视角,因而使研究带上明显的人类文化学色彩。需要注意的是,文化符号或是文化意象的翻译只是文化翻译的一个组成部分,真正意义上的文化范式的研究是“把翻译看作宏观的文化转换,把翻译放到文化的大背景下进行考察,研究诸如权力关系、意识形态、社会规范、帝国主义、后殖民主义等更为宏大的课题”(司显柱2018:129),其中翻译史和译介研究最能体现这方面的成果。

日语界的翻译史研究主要集中在2000年以后,来自文学研究、文学比较研究方向的学者贡献了较多的研究成果。研究题材颇为多样,有晚清京师同文馆的翻译教育考证、近代杂志的日译研究、版本考证等。众所周知,自清末以来中国的日译中活动非常活跃,极大地影响了这一时期整个中国的翻译规范的形成与翻译思想的流变,要想弄清《共产党宣言》进入中国的转译历程,跳不过日译本的考察(方红、王克非2014),要知道严译术语为何被日语译名取代就必须得从中日文化与学术的交流史中找答案(廖七一2017)。中国近现代翻译史上的重要问题总很难撇清与日本、日语的瓜葛,从这个意义上来说,来自日语界的翻译史研究是近现代中国翻译史重构过程中不可或缺的组成部分,目前的研究成果还太少、太零散。

译介方面分为两大类,一类是日本重要作家、流派及其经典文学作品在中国的翻译与传播(如王向远2001;王志松2012),显然从翻译方向上来说属于日译中方面的研究。一类是中国文学作品,尤其是现、当代作品在日本的译介研究(如鲍同2014;鲍同2018;柳慕云、徐冰2018)。近年来国家提倡“中华文化外译”,中译日方向的研究备受重视,考察对日译介活动中文化因素的影响,旨在为今后的翻译事业提供有益的参考,2018年日语翻译研究论文几乎都是中译日研究(包括外宣翻译、翻译批评)。

翻译在日本文化演进过程中起着极为重要的作用,从汉文典籍的翻译实践中产生的“汉文训读”传统深刻影响着日本的翻译思想,使其呈现出不同于西方的独特色彩。中日上千年的交流史为当代翻译研究留下丰富的矿藏,足以为翻译中的“文化转向”和文化研究中的“翻译转向”提供丰富的研究素材(张伟2014:39)。可以说,文化范式的研究给日语学界带来了参与中国翻译研究话语构建的难得机会。

3.4 日语翻译研究中的理论问题

这里所指的理论问题主要指翻译研究中的基本理论,通常包括“中国传统翻译理论的梳理、研究,对西方翻译理论的评介、反思、批评;对翻译基本概念、基本问题的探讨;有关翻译学科建设和理论建设的研究等”(许钧、穆雷2009:81),与之相对的是以翻译

方法、技巧为主的翻译实践理论，以解决“怎么译”的问题为目标，实用性强，一直是日语学界关注的重点。陈岩（1990：36）指出“我国日语文学翻译界、日语教育界不大重视翻译理论的研究”，“在翻译研究中，往往偏重于字词句子及语态等译法的微观方面，而对翻译的本质、原则等宏观方面却未予重视”，这个评价很公正。数据显示日语学界对基本理论问题的探索极为有限，研究成果主要在1980-90年代，最初以“漫谈”、“体会”居多，后来逐渐涉及翻译的本质、标准、原则、翻译学的学科建设等问题，总量少，影响有限。

围绕翻译标准的讨论也表现出明显的实用主义倾向，比如冷铁铮（1988：36）便认为严复的“信达雅”是“恰当的翻译理论”，因为“最便于结合实践，对实际工作最有指导作用”。郑强（1990：27）指出“翻译理论和翻译标准固然重要，但翻译学的全部研究最终都必须立足于并归结到具体的翻译实践”。传统译论影响至深，进入新世纪后研究者对“信达雅”的偏好依然不减，“信达雅是翻译本质的要求，是对翻译活动规律的正确反映”（任犹龙2001：31），“虽然翻译理论、观点多种多样，但笔者以为，统而言之，也无外乎老套子那三个字，即信、达、雅”（李濯凡2007：88）。但另一方面，日语学界并未对中国本土的传统译论进行充分的梳理或研究，在笔者的收集范围内这一主题的论文不足5篇。

日语学界也很少介入翻译学科建设的讨论，笔者只收集到3篇。高烈夫（1983：7）认为翻译“是用一种语言、文字把另一种语言、文字所表达的事物和思想准确而完满地表达出来”，做不到“准确”和“完满”，就不能视为翻译，只能是“编译、译述或改写”。至于翻译学，是“语文科学的一个分科”，“在某种意义上来说是一门跨学科的学问，同‘语言学、修辞学、词汇学、语法学等都有密切联系’”。林璋（1996：37，1999：65）指出“翻译学研究的最终目的是提高译文质量”，“翻译研究，最终要指向翻译操作”。时至今日翻译学科的研究对象早已超出了高文所认同的范围，研究目的也并不止于指导翻译实践，但高文和林文已是日语学界中难得一见的对翻译学科进行理论探索的文章，只可惜没能在当时引起足够的注意。

总的来看，日语翻译理论研究最多的是“标准之议”，少有“性质之论”、“学科之思”，几十年来中国译学界热烈讨论的话题“翻译学是否存在”、“什么是翻译学”、“翻译学该如何发展”（刘建珠、傅雷2017：2）在日语翻译研究中一片沉寂。事实上理论研究已成为日语翻译研究发展的瓶颈，不仅影响到其他分支研究的可持续性发展，也阻碍了日语学界与整个中国译学界的有效交流。从客观因素来看，很多日语研究者受英语语言能力限制，往往只能借助有限的中译本来了解西方的翻译理论，诸如巴尔胡达罗夫、奈达、纽马克等，如此“隔靴搔痒”当然很难学以致用，无从把握翻译研究的新动向，最终造成理论话语贫乏的窘迫景象。主观因素是对基本理论问题的研究不够重视。如何重新认识翻译理论研究的意义，是日语学界面临的首要问题。

4 结语

从日语翻译研究的发展历程来看实用主义倾向明显,擅于总结规律,疏于理论思辨,对翻译学科宏观层面问题,如翻译本体、方法论、传统译论、翻译学科建设等关注不够。理论研究的匮乏必然不利于学科建设,亟待加强。所幸的是近十年来越来越多的日语翻译研究者具备直接阅读英文原著的能力,能及时了解、跟进世界翻译理论研究进展,积极关注并主动参与主流学术话语的构建。研究者的学术背景趋于多样化,文学、文化研究方向的学者在开拓日语翻译研究的多元化发展中起到了关键的作用,而语言学途径的翻译研究仍不失为翻译研究中基础最为夯实的部分。

笔者在统计中发现日语翻译研究还存在很多“处女地”,比如对视听翻译、网络平台的众包翻译等新型翻译形式、多模态语料库等当今翻译研究热点少有人问津。日语翻译教学研究涉及的主题范围过窄,很多方面的研究刚刚起步或几近空白,比如各个层级的翻译教学目标、教学内容、教学方法;翻译能力测试与评估;实用翻译教学;翻译教师的能力研究等。在当代翻译技术化、专业化、职业化背景下,翻译管理、翻译技术、翻译工具和辞典方面的研究亟待开发。日语翻译研究真正走出象牙塔仍需时日,不仅要在研究课题上跟进,更应该多学习、吸纳翻译学界的研究成果。笔者从数量有限的论文中找出了不少的“变化”,但还只能算是发展的“苗头”,尚未形成决定性的合力奠定今后日语翻译研究的发展方向,因此,学界面临机遇与危机共存的局面,最需要加强的恐怕还是理论研究。

日语学界的优势和特色在于“日本路径”的翻译研究,大致可以分为三类:一类是借鉴日本的翻译理论与实践经验,在1980-90年代曾有过不少介绍日本翻译市场以及翻译人才培养机制的文章,新时期则注意参考日本学术外译的可贵经验(范大祺、鲍同2018)。此外日本的口译教学与研究成果对刚刚起步的翻译专业硕士教育具有重要的参考价值,对这些成果的译介应该成为日语翻译研究者为中国译学发展做贡献的重要方式之一。另一类“日本路径”的研究涉及翻译史,由于日本在中国历史上尤其是近代以来作为西方思想文化进入中国的中转站,作用独特,使得日汉翻译在中国近现代翻译史上具有举足轻重的地位。第三类源自汉日两种东方语言间的翻译研究,或可为以西方翻译理论为主的译学界提供新的洞见。“中日语言文字关系的复杂性和特殊性本身,就给两国间的翻译提出了不同于西方文学翻译的诸多问题”(王晓平2010:108)。总之,日语翻译研究可供大展拳脚的空间极大,值得更多的有志之士投入其中。笔者希望借本文抛砖引玉,引起学界对日语翻译研究更深入的思考与更多的关注。

参考文献

- [1] 鲍同. 20 世纪中国文学在日本的译介研究——以中、短篇小说为焦点[J]. 中国翻译, 2014, 35(06): 29-33.
- [2] 鲍同. 中国文学在日本译介活动中的“译者行为”研究——以《中国现代文学》丛刊的译介选择为例[J]. 外语学刊, 2018, (05): 14-17.
- [3] 卞况. 译诗也应以信为本——浅析《行路人》的误译[J]. 外语学刊(黑龙江大学学报), 1990, (05): 56-60.
- [4] 岑治. 评芥川龙之介《罗生门》的汉译[J]. 外国语(上海外国语学院学报), 1982, (06): 48-52.
- [5] 陈岩. 对比·神似·汉化——试谈日译汉的三项原则[J]. 日语学习与研究, 1990, (1): 36-40.
- [6] 陈岩. 翻译与文化[J]. 日语学习与研究, 1994, (03): 25-30.
- [7] 范大祺, 鲍同. 人文社科学术成果对外翻译政策导向研究——以“日本学术会议”系列提案为例[J]. 中国翻译, 2018, 39(02): 62-66.
- [8] 方红, 王克非. 《共产党宣言》中日首个全译本比较研究[J]. 中国翻译, 2014, 35(06): 34-38.
- [9] 高烈夫. “翻译”和“翻译学”[J]. 日语学习与研究, 1983, (2): 6-9.
- [10] 郭建中. 中国翻译界 10 年(1987-1997): 回顾与展望[J]. 外国语, 1999, (6): 53-60.
- [11] 金中. 论和歌与俳句的翻译形式——结合不同诗型的表现特色[J]. 解放军外国语学院学报, 2011, 34(03): 78-80.
- [12] 孔凡明. 翻译探索——谈谈日译汉中的长句拆译[J]. 日语学习与研究, 1983, (2): 10-15.
- [13] 冷铁铮. 翻译的理论与实践[J]. 日语学习与研究, 1988, (5): 36-40.
- [14] 黎难秋. 新中国科学翻译 60 年[J]. 中国翻译, 2010, (1): 27-32.
- [15] 李德凤, 胡牧. 翻译教学研究: 回顾与展望(1980-2006)(上)[J]. 中国科技翻译, 2009a, (2): 32-34.
- [16] 李德凤, 胡牧. 翻译教学研究: 回顾与展望(1980-2006)(下)[J]. 中国科技翻译, 2009b, (3): 44-47.
- [17] 李炜, 庄凤英. 论翻译中导致误译的因素[J]. 解放军外国语学院学报, 2005, (04): 69-72.
- [18] 李濯凡. 枕词的汉译[J]. 日语学习与研究, 2007, (4): 85-88.
- [19] 廖七一. 严译术语为何被日语译名所取代?[J]. 中国翻译, 2017, 38(04): 26-32.
- [20] 林少华. 文体的翻译和翻译的文体[J]. 日语学习与研究, 2009, (1): 118-123.
- [21] 林璋. 论译者与翻译——兼与轩然同志商榷[J]. 外国语(上海外国语学院学报), 1987, (03): 62-65.
- [22] 林璋. 略论翻译与翻译学[J]. 日语学习与研究, 1996, (4): 35-38.
- [23] 林璋. 论翻译学的基础研究[J]. 外国语(上海外国语大学学报), 1999, (06): 61-66+80.
- [24] 刘建珠, 穆雷. 中国翻译理论话语体系的构建及其划界[J]. 上海翻译, 2017, (2): 1-5.
- [25] 刘利国, 董泓海. 接受美学视域下的日本诗歌翻译[J]. 日语学习与研究, 2015, (3): 109-120.
- [26] 柳慕云, 徐冰. 从时间的模糊性到确定性——兼谈当代中国文学的在日传播[J]. 外语学刊, 2018, (01): 122-126.
- [27] 路邈. 日汉口译研究的扩展性观察与对比性思考[J]. 日语学习与研究, 2016, (2): 105-113.
- [28] 罗列, 穆雷. 翻译学的学科身份: 现状与建设[J]. 上海翻译, 2010(04): 11-15.
- [29] 裘珍. 《源氏物语》与日本文化——浅谈《源氏物语》的几处译文[J]. 日语学习与研究, 1986, (03): 44-48.
- [30] 任犹龙. 翻译——标准和责任[J]. 日语学习与研究, 2001, (3): 31-36.
- [31] 司显柱. 翻译研究关键词[M]. 上海: 东华大学出版社, 2018.
- [32] 陶振孝. 翻译过程中文化词语的选择——以《雪国》的译本为例[J]. 日语学习与研究, 2006, (01): 28-33.
- [33] 藤井省三. 村上春樹の中国語訳: 日本文化の土着化と中国本土文化の变革[J]. 日语学习与研究, 2009, (1): 111-117.
- [34] 王成. 翻译的文体与政治——“林译”文体论争之刍议[J]. 日语学习与研究, 2009, (1): 124-128.
- [35] 王东林. 《雪乡》三种中译本学习札记——兼谈日本文学翻译实践问题[J]. 外语与外语教学, 1986, (01): 82-85.

- [36] 王琪. 和歌汉译及诗歌翻译标准 —— 以《小仓百人一首》的短歌为例 [J]. 日语学习与研究, 2015, (1):106-112.
- [37] 王向远. 八十多年来中国对夏目漱石的翻译、评论和研究 [J]. 日语学习与研究, 2001, (04):40-45.
- [38] 王向远. 《古今和歌集》汉译中的歌体、歌意与“翻译度”[J]. 日语学习与研究, 2017, (6):103-117.
- [39] 王晓平. 日本文学翻译中的“汉字之痒”[J]. 日语学习与研究, 2010, (5):101-108.
- [40] 王志松. 翻译、解读与文化的越境 —— 也谈“林译”村上文学 [J]. 日语学习与研究, 2009, (5):117-122.
- [41] 王志松. 新感觉文学在中国二、三十年代的翻译与接受 —— 文体与思想 [J]. 日语学习与研究, 2002, (02):68-74.
- [42] 肖辉. 近 20 年中国译学研究之回顾 [J]. 上海翻译, 2011, (4):22-26.
- [43] 许钧, 穆雷. 中国翻译学研究 30 年 (1978-2007)[J]. 外国语, 2009, (1):77-87.
- [44] 许薛, 戈玲玲. 基于言语幽默概论的幽默文本翻译模式研究 —— 以《阿 Q 正传》及其英日译本为例 [J]. 外语学刊, 2016, (2):88-93.
- [45] 杨伟. 2013-2014 年日汉翻译研究综述 [J]. 日语学习与研究, 2014, (4):33-40.
- [46] 杨晓辉, 于英杰. 再议国内日语口译研究的现状与发展趋势 [J]. 大连海事大学学报, 2010, (5):109-111.
- [47] 郑强. 关于文学作品翻译中的理解问题 [J]. 日语学习与研究, 1990, (2):27-40.

在日汉语学习者和网络流行语

—— 问卷调查的分析研究

郑剑华
东京学艺大学

中国经济飞速发展，文化生活日新月异，二十多年来社会上涌现出大量网络新词，让学习汉语的外国朋友眼花缭乱、目不暇接，他们对网络流行语既好奇，希望多学习多了解；又紧张，因为特别的造句造词方式和特别的语境，让学习者无从判断词语的含义。进入了 E 时代，大量网络流行语进入我们的生活，电影、电视剧、报纸、杂志、小说甚至教科书中都跳跃着网络流行语，如“给力”、“3Q”、“逆袭”、“坑爹”等等，有些网络词语随着岁月而消失，而有些词语生命力顽强，至今还在使用。向学生们介绍网络语言，让他们了解网络语言的前世今生，懂得网络语言社会背景和语法修辞特点，我认为是汉语教学的重要内容之一，为此我想就学生们对汉语网络流行语的理解和认知做问卷调查，除了探寻在汉语教学中的传授网络流行语的适当方法，还希望通过对网络流行语的介绍，引导学生认识网络流行语的语言价值，了解网络流行语的文化意义。

一，关于问卷调查

1，调查内容

语言是文化的载体，网络流行语不仅反映当前的社会现象，也表现出了人们的生活方式和思维状态。为此，我选择了 36 个在网络和新闻媒体中经常出现的网络流行语，不同于一般的问卷调查表，本次调查不是在给出的几种答案上进行选择的方式，而是请学习汉语的同学根据自己对该网络流行语的理解写出词的意思，要求回答者尽量在问卷上做出回答。

2，调查目的：了解汉语学习者对当前流行的网络语言的认知和理解情况。

3，调查时间：2019 年 6 月～7 月

4，调查对象：在日本东京地区汉语学习者

5，调查方式：采取问卷回答方式，在课堂上回答。

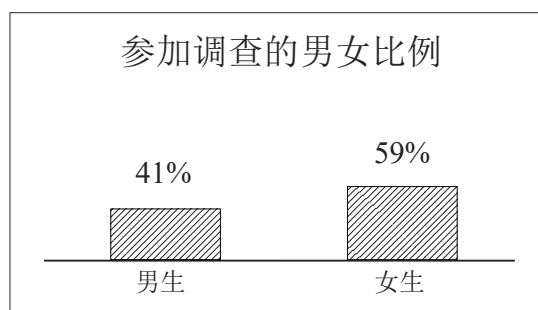
6，调查要求：时间 15 分钟左右，不可互相商谈、查字典，可以用中文和日语回答问题。

二，问卷调查结果分析

在几百份答卷中抽选出 110 份，并选出其中的 18 个常用网络流行语进行分析。

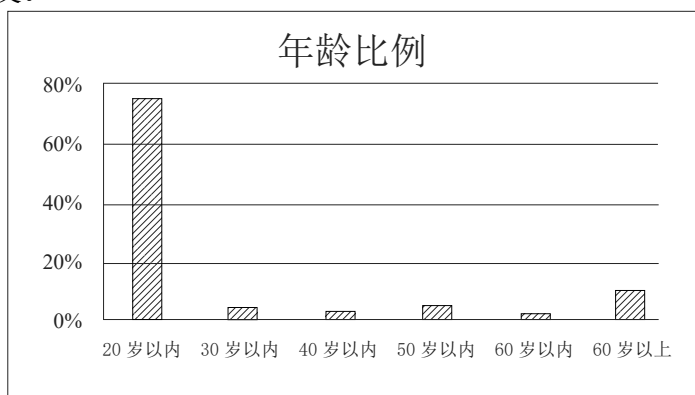
1, 答卷人的性别比例

在 110 份答卷中, 男生占 41%, 女生占 59%。在日本的汉语学习人群中, 基本上女生多于男生。

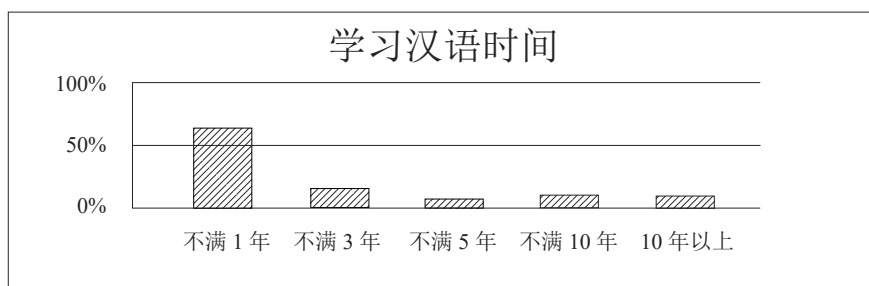


2, 答卷人年龄比例

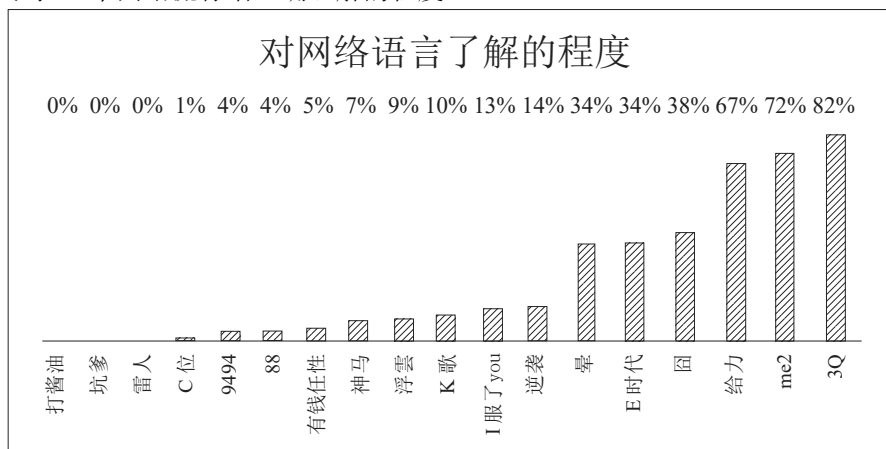
本次问卷调查中在校大学一年级学生占主要比例, 为 74%, 其余的人员基本上是在业余时间学习中文。



3, 答卷人汉语学习时间状况

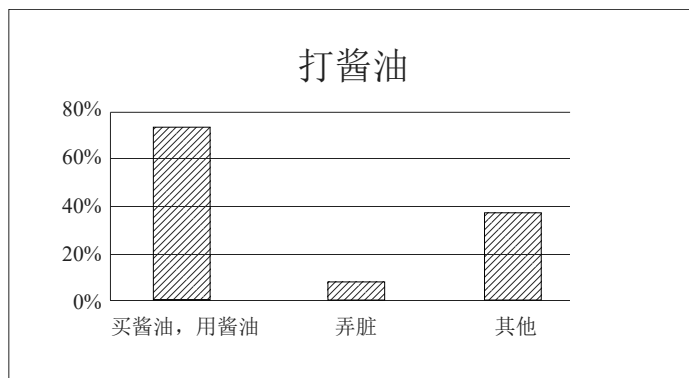


4, 答卷人对 18 个网络流行语正确理解的程度



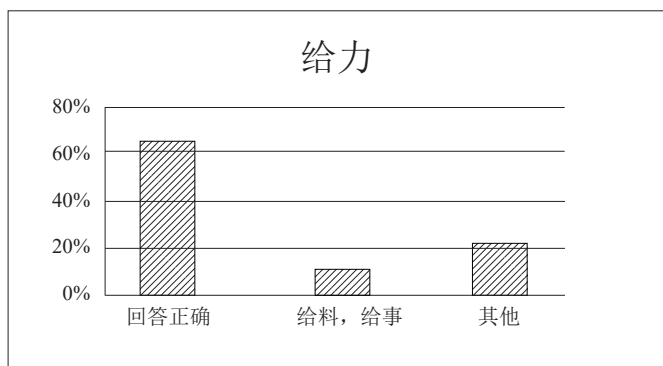
5. 分析抽选的网络流行语

a. 打酱油，



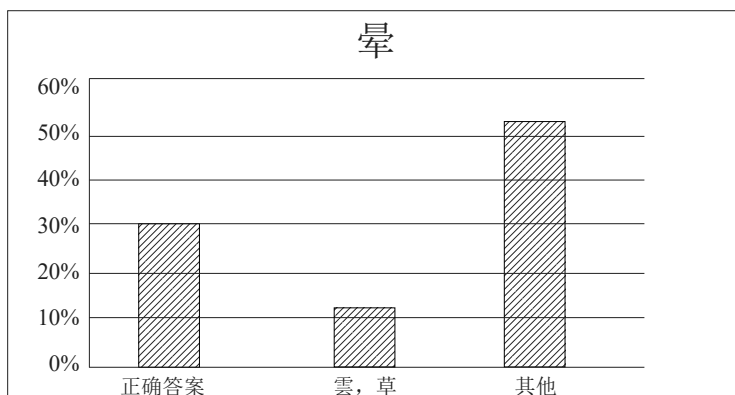
“打酱油”曾经是2008年十大网络流行语之一，来自对普通人采访时路人的回答，“我只是打酱油路过而已”。“打酱油”一词用于比喻，意思是“不关我的事，和我没关系”。日语有“酱油”一词，也有“打”一词，有73%的人回答“买酱油”、“用酱油”，还有人引申到“打翻、弄脏”，而很少有人真正懂得其含义。

b. 给力，



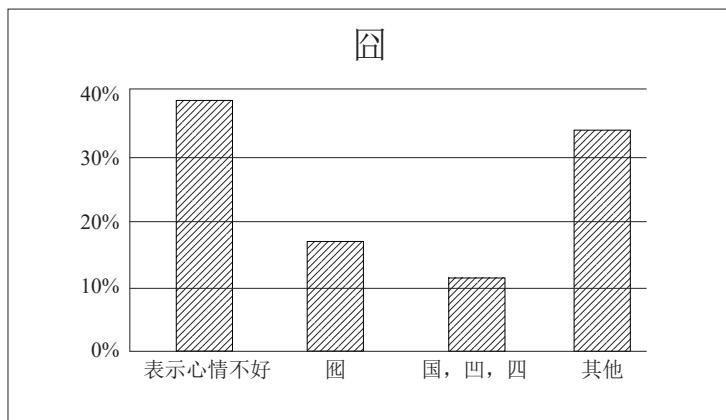
“给力”是2010年十大网络流行语之一，本出自动漫《西游记》的中文配音，作形容词，意思是“很带劲”，“酷”，“棒”，“很有意思”；作名词的意思相当于“震撼”；作动词有“给予支持”、“给予帮助”、“出力”的意思。因为日语中有“给力”这样的汉字，所以在人们的回答中基本接近原意的占67%。还有些人看到“给”而想到日语中的“给料”、“给食”，而看到“力”想到“能力”、“体力”。

c. 晕，



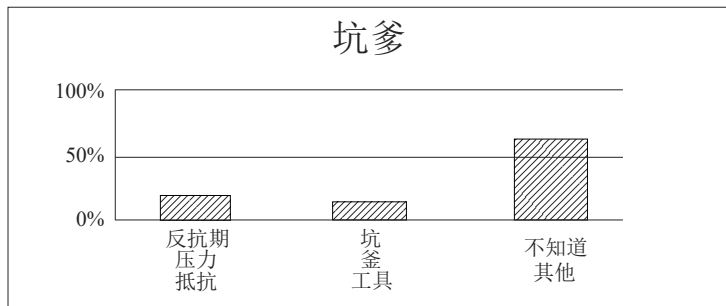
网络语“晕”有“十分无奈”、“受不了”、“不置可否”的意思,常以“我晕”、“晕了”、“真晕”的形式出现,当你对他人的所作所为感到极端惊讶时,你也可以说“晕死”。总之,“晕”是一个表示你当前状态的词,任何让你无可奈何、受不了的事,你都可以冠以无奈的表情说“晕”。可见,这里“晕”已经不是简单的头晕目眩,头脑发昏。网络上常说“看不懂不叫看不懂,叫——晕”。问卷调查中回答字面意思“晕”的占34%。而因字的形状近似“雲”,也有人猜是“云”,回答其他意思的和没有回答的人数占的比例也很高。

d, 囧 ☹,



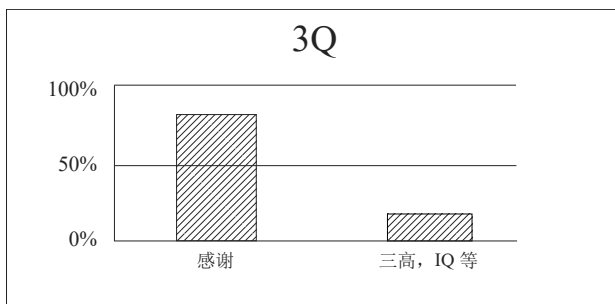
“囧”字原来的意思:光明。网义:郁闷、悲伤、无奈、无语等等,指处境困迫,喻尴尬,为难。因“囧”和“窘”读音相同,所以人们以这个字的形象表示“尴尬”、“受不了”等意思。“囧”字不但在网络文化中流行,在传统的文化媒体上也频频出现,如“电影《人在囧途》获得十几亿的票房”。在问卷调查上显示,回答“心情不好”的占34%。日语“囧”有“诱惑”、“引诱”的意思,与“囧”字形似,故而回答“囧”的占17%。以字形来猜汉字的意思,还有人回答“国,凹,四”。

e, 坑爹,



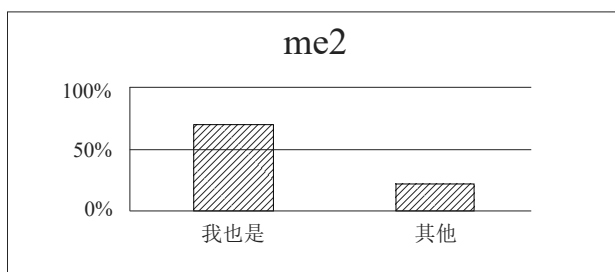
网络语“坑爹”最早出现于动漫《魔兽世界》,表达出内心的不满,有被欺骗的意思,类似“坑人”、“无语”。“坑爹”也可指“坑我”,例:这游戏太坑爹了。“坑爹”本是地方方言,现在是网络常用语。问卷调查显示,人们回答“反抗期”、“抵抗”、“压力”的占19%。回答“坑”、“釜”等占18%。“坑爹”来自方言,且原义又被引申,所以对汉语学习者来说有理解难度,这词的正确回答是0%。

f, 3Q



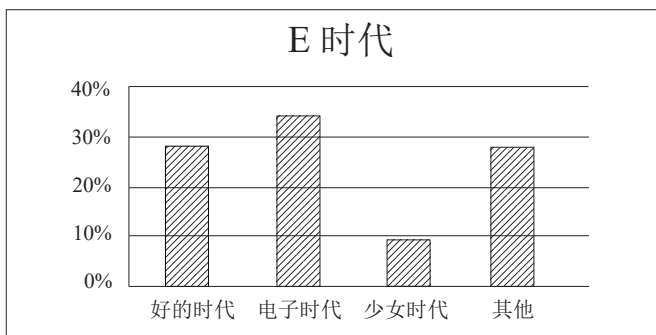
网络语 3Q 同英文 (THANK YOU) 读音相似, 网民们上喜欢用 3Q 来表达感谢, 这也算是一个中式英语吧, 言简意赅, 让人表达谢意的同时又不失可爱。问卷调查显示回答“感谢”的占 82%, 另外回答“三高”、“IQ”的占 18%。“3Q”是本次问卷调查中正确率最高的一词。

g, me2



网络语“me2”就是英语“me too”, 意为“我也是”。同“3Q”一样, 这种英语、字母、数学混搭的网络词在问卷调查中显示出较高的正确率, 仅次于“3Q”, 对“me2”一词回答“我也是”, “我也同样”的占 72%。看来对这样的网络流行语, 网民们的感觉是相通的。

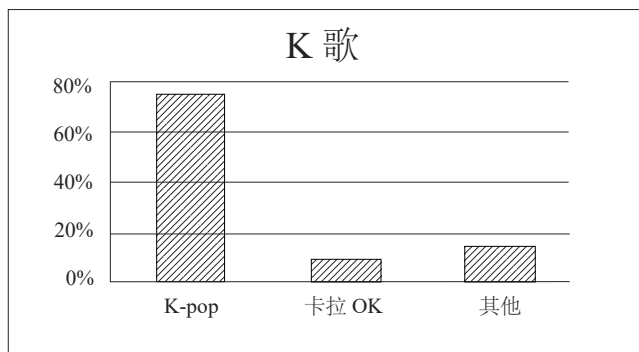
h, E 时代



“E 时代”中的“E”是英文 **electronic** (电子的) 的缩写! E 时代指电子时代! 就是网络普遍使用在办公、生活和各个领域的时代, 就是网络时代, 信息时代。问卷调查显示回答“电子时代”的占 34%, 而回答“好时代”的占 28%, 日语“良い”(好)的发音和“E”相同, 所以, 人们从“E”的发音联想到“良い”, 也合乎情理。回答流行歌舞组合 (E-Girls) 和江户时代 (Edo) 的人也有不少。

i, K 歌

和“E 时代”同样的构词方式还有“K 歌”，“C 位”。

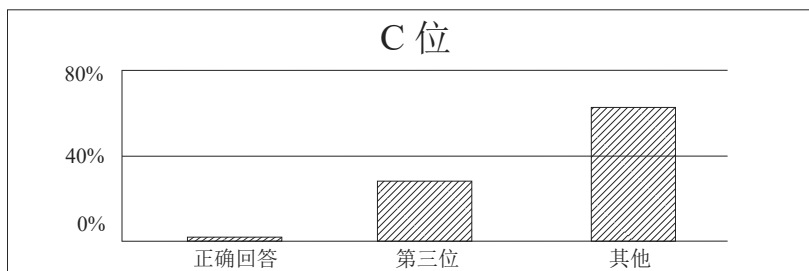


K 歌，在卡拉 OK 点歌唱歌的意思。还有一种说法是：K 有 PK 的意思，PK 就是比赛，说法来源于网络游戏，K 歌也就是比歌。现在流行全民 K 歌。问卷调查中，回答“卡拉 OK”的只占 10%。有 76% 的人回答是“K-pop”。

K-pop 是指韩国流行音乐（英语：Korea-Pop，简称 K-POP，朝鲜语：가요）是一音乐种类。指源自韩国的流行音乐，是韩语、电子音乐、DANCE-POP、嘻哈音乐的结合。（自百度）

也许“K”象征“Korea”、“歌”字故名思意就是唱歌或歌曲，回答问卷调查问题的有近 80% 是 30 岁以内的年轻人，自然对目前人气旺盛的韩国流行音乐比较熟悉。

j, C 位

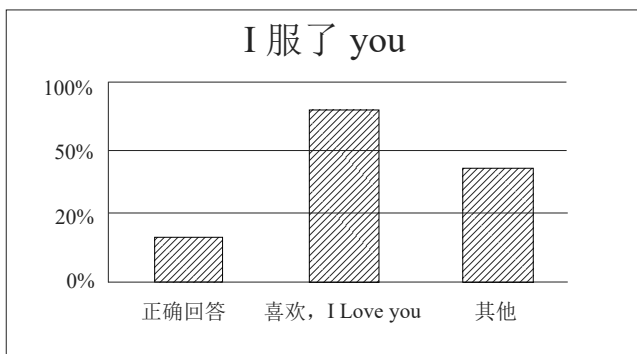


网络流行语“C 位”，来源于《英雄联盟》等游戏领域，是 Center，核心位置的意思。“C 位”一词逐渐扩大到娱乐圈，在合影、海报、舞台表演等时候，只要当某一个人在团队中的处于中心位置时，人们便称呼他是 Center 位。（自百度）

2018 年 12 月 19 日，“C 位”入选国家语言资源监测与研究中心发布了“2018 年度十大网络用语”。

问卷调查中正确回答只占 1%，而 32% 的人回答“第三位”，也许因为在 ABC 中 C 位于第三。

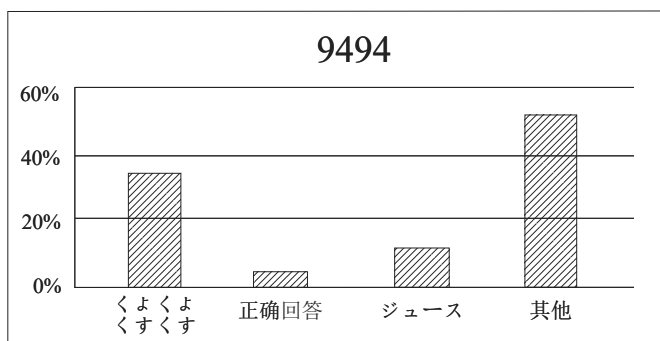
k, I 服了 you



这是调查中唯一的一个句子。意为“我服了你”，有无奈的意思。

调查显示回答正确的只占 13%，有 52% 的人回答“I love you”，大概是句型相似，故而如此回答。

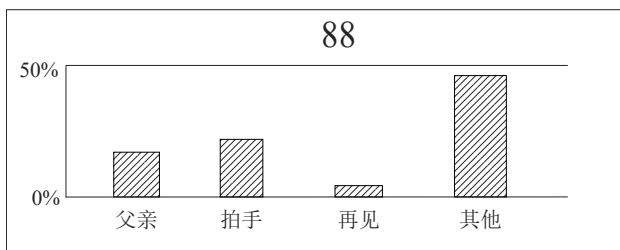
l, 9494



9494 是“就是就是”的意思，这是数学拟音，表示赞同别人的意见和建议。在键盘上输入数字比输入汉字要快些，这种表达方式深受网民喜爱。

问卷调查显示回答日语“くよくよ”（闷闷不乐）、“くすくす”（窃笑）的占 32%，看来不同国家的网民们思维方式都是相通的，中国的网民是用数字谐音创造新词，日本网友们也以 9494 谐音表示某种状态、心情，不得不说数学谐音有异曲同工之妙。

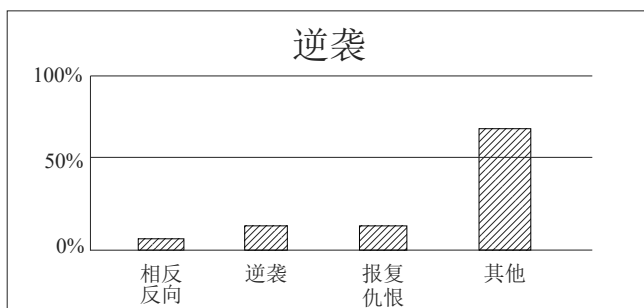
m, 88



网络语 88 是英语“bye bye”的谐音，意为再见、拜拜。

调查显示 21% 的人回答“父亲”（日语パパ），回答“拍手”（日语パチパチ）占 28%，回答正确的只占 4%，数字 8 在日语的发音是“は”，所以回答中带“は”的音比较多，还有人回答“はは”、“お母さん”、“おばあちゃん”。

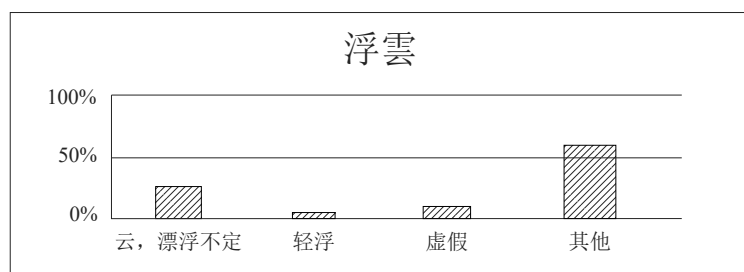
n, 逆袭



出自日本的动漫，传入中国后作为网络用语流行，形容本应该是失败的行为，却最终获得了成功的结果。这个词属于和制汉语，意思是反攻或反击。是2013年的十大网络流行语之一。

问卷的回答“相反、反向”的占8%，回答“逆袭”占14%，回答“复仇、报复”的占15%。

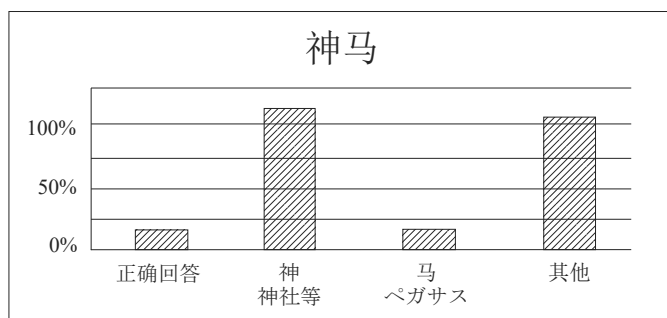
o, 浮云



意思就是像云那样，指比较虚的东西，转瞬即逝，不值一提，有点感叹、唏嘘的语气。这是近年的网络流行语，常常可以听到有人说“都是浮云”、“神马（什么）都是浮云”之类的话，就是说都是过眼云烟，不必太在意。（自百度）

回答“云，漂浮不定”的占34%。其中正确回答的占9%，意为虚假、虚幻，不必在意。回答“轻浮”占4%，因日语“浮気”和“浮云”形似。

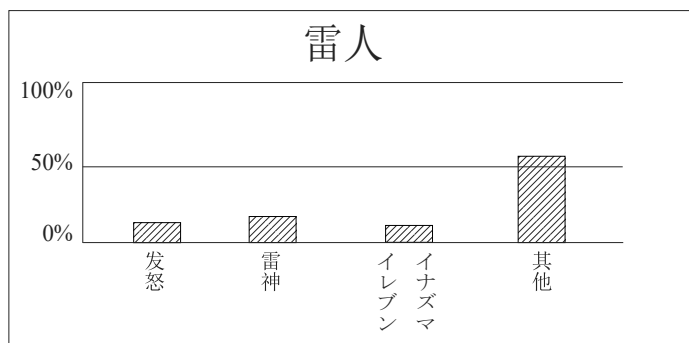
r, 神马



网络语“神马”就是“什么”的意思，和“浮云”经常一起出现，“神马都是浮云”就是“什么都无所谓，不值一提”。

正确回答占7%，回答“神、神社、神的力量”占45%，回答“天马、ペガサス、神仙的马”占7%。

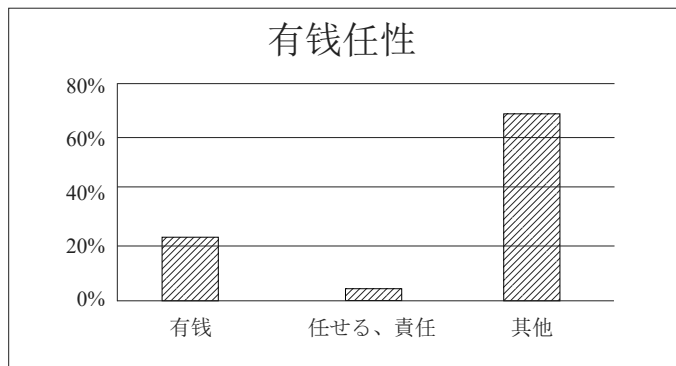
s, 雷人



网络语“雷人”意思是出人意料，格外震惊。常说：“被雷到了”。

回答“发怒”占13%，回答“雷神”占17%，回答动漫中的人物“イナズマイレマン”、“スーパーサイヤ”占12%。正确回答为0%。

t, 有钱任性



“有钱任性”是2014年的网络流行语，本来是对有钱人做事的风格有嘲讽的意思，现在是网络上的调侃语。原句是：有钱人就是这么任性。现已引申出：我有钱，我任性，年轻就是任性。这是个缩略词，显示出简单概括的造词方式。

问卷调查显示：25%的回答是“有钱”，5%的回答“任せる，責任”（托付，负责）。“有钱”二字根据字面很容易猜出意思，而“任性”二字在日语中很少出现，正确回答为0%。

三，网络流行语词构词特征和特别语法现象对认知的影响

(1) 打酱油，

本来是一个采访事例，但是在网上被传播开来，我们分析这句话的内在含义可以发现除了有事不关己麻木不仁的冷漠外，还带着对社会责任感欠缺的意思。这是修辞手法中的比喻用法，而且，这个比喻得到了进一步的引申，它反映了目前一种普遍的社会现象，当然也有无可奈何、无能为力的遗憾。“打酱油”在问卷调查上正确回答率是0%，对于学习汉语的外国人来说，了解这样的词汇必须先了解词汇产生的社会背景，在了解社会的同时了解文化。

(2) 坑爹, 雷人,

这两个词也是在问卷调查中正确回答率为 0%。坑爹, 这个词构词并不复杂, 了解“坑人”, 就会知道“坑爹”是同样的意思, “雷人”则是夸张的修辞手法。日语中有许多汉字, 有些汉字同现代汉语同字同义, 也有些则相差甚远, “望文生义”是很多学汉语的人识别生词的直接方法。这次问卷调查表上的汉字是现代汉语简体字, 很多人用联想方式, 猜词汇的意思。

汉字是音, 形, 义三结合的表意字, 从结构规律上分析, 汉字主要有六种形式, 即象形、会意、形声、指事、转注、假借。象形字、会意字容易猜出其含义, 而其他的构词法却很难猜出词意。

(3) 晕, 囧

这两个词回答正确率达到 34% 和 38%, 晕字是形声词, 成为网络流行语是用了夸张的手法, 表示理解不了, 接受不了。“囧”字是象形, 让人猜到是脸部表情, 原来的意思是光明, 而现在代表悲伤、郁闷、无奈。这两个词都是引申的用法, 是在原来旧词的基础上产生了新的含义。

有些网络语言的产生显示出了基本的认知模式, 就是网民们把一些毫不相关的词联系在一起, 在旧词的基础上创造出一个新词。而且这些新词带着趣味性、幽默性, 让人产生很多联想。这也许是网络流行语受欢迎的原因之一。

(4) 9494, 88

这两个词是谐音词, 9494 是“就是就是”汉语的谐音。88 是英语 bye bye 的谐音。虽然回答正确率不高, 只有 4%, 但是答卷中显示了日语的谐音词, 如“くよくよ、くすくす”; “パパ、パチパチ、おばあちゃん”等。由此可见词汇的语音和意义是统一的, 人们根据词的音和义创造出新词, 这样的网络语言符合年轻人的心理, 表现出活跃、新奇、灵活、时尚, 更适合传播互动, 这种造词方式则是对传统语言学的挑战, 在语言学上被称为变异。

(5) C 位, E 时代, K 歌

都是英语汉语混合词, “E 时代”回答正确率 34%, 回答的人对 E 的理解不同, 有人认为是日语“良い”的谐音, 或是江戸“Edo”的谐音, 更多的人认为是网络信息的缩写。C 位和 K 歌构词相同, C 是英语 Center 的头字母, 而 K 则是“PK”的缩写, 有些人联想到 C 是第三位, 还有人联想 K 是韩国歌 K-pop, 虽然正确率不高, 但中国网民和日本网民对英汉混搭的词都表示出了理解和认可的态度。

(6) me2 和 3Q, I 服了 you

me2 和 3Q 是英语和数字混搭, 日本的网民们能理解这种构词形式, 回答正确率达 72% 和 82%, 看来这样简单的数字和英语混合词是世界网民共同的爱好。而“I 服了

you”，这样的英汉混和的句子，让回答者产生困惑，毕竟带“服”字的日语词汇较多，有“敬服”、“服装”、“服从”等，对这个词多数人回答是“I love you”，回答正确率是13%。

(7) 神马和浮云

“神马”是“什么”的谐音，而浮云则是比喻无实际意义的事物。这两个词是2010年左右出现的网络语，因为有近10年的传播和应用，有几年汉语学习经历的人大概会知道这词的含义。

(8) 逆袭，给力，有钱任性

“逆袭”和“给力”出自于动漫，这两个词和日语的汉字形状和意思都接近，可以“望文生义”，人们回答的正确率为14%和67%。而“有钱任性”则是缩略词，“有钱”两个汉字和日语相似，只是“任性”难以猜测，“有钱任性”是主谓结构，不是并列结构，用“望文生义”的方法也只能猜对几分。

四，调查的局限性和调查的意义

感谢很多老师的支持，这次收到400多份答卷。

1. 由于事先没有考虑到学习者的年龄层次和掌握汉语程度的比例，很多初学者反映答题有难度。
2. 特别是采取了不同以往的答卷方式，不以单纯的选择方式来回答，而是根据自己的理解写出这些网络流行语的含义，回答需要20分钟左右，有些人难以坚持到底，所以答题上留下了很多空白。
3. 问卷调查的目的是了解人们对网络流行语的理解情况，如果卷面采用日语的汉字也许更能贴近学习者。

语言是随着人们交流的需要而产生，也是为了传递信息和获取信息而存在。

网络流行语以其生动形象、诙谐有趣、构词独特、形式多样的特征活跃在社会的各个层面，它反映出了文化和社会现象，反映出普通民众的生活状况，也折射了现实社会中阴暗和冷漠，它冲击了语言的规范，以趣味、娱乐、轻松、快捷为目的，随心所欲地造词，标新立异地把旧词变成新词。网络流行语对人们的生活影响越来越大，由此看来，向汉语学习者介绍网络流行语是很有必要。在对外汉语教学中，网络语言必会影响学习者对汉语的认知，初学者只有全面了解了汉语的基础语法及修辞手法，理解网络流行语特别的造词方式，处理好新词和现代汉语的关系，更需要理解特定的语言环境和社会心理对语言的变化、变异产生的影响，在此基础上了解网络语言才能更有利于学习汉语。教师应以介绍积极向上的带有正能量的网络语言为主，让学生们理解语言所包含的情感，了解网络语言特别的修辞语法。

互联网的全球性和国际化，让世界人民联系得更加紧密，网络语言也是一个窗口，

它反映了中国社会的物质和精神生活的多项层面，在学习汉语时，理解和掌握一些常用的网络词语，能扩大了学生的词汇量，提高学生们的学习兴趣，更可以让他们了解最新的文化发展，了解国情民情，进而达到汉语水平的提高。

参考文献

- [1] 相原茂 視覚でさぐる中国語 —— アンケート調査。《月刊中国語》
- [2] 卢植 论认知语言学对意义与认知的研究《外语研究》2003.4
- [3] 周晓凤 网络流行语现象的语言文化分析。《东北师大学报》2014.3
- [4] 杨丽 中文网络流行语的认知解读。《语文建设》2014.(15)
- [5] 李艳华 网络流行语的构词方式和文化内涵。《语文建设》2013. (30)
- [6] CNNIC 《中国互联网络发展状况统计报告》. 中国互联网络信息中心

翻译是难以言表的满足而又幸福的过程

——阎连科小说日译者谷川毅访谈录

卢冬丽
南京农业大学

谷川毅先生^①是阎连科著作在日本译介和传播的重要汉学家，至今已翻译阎连科的长篇小说《为人民服务》（2006）、《丁庄梦》（2007）、《受活》（2014）、《年月日》（2016）、《坚硬如水》（2017）和短篇小说集《黑猪毛白猪毛白》（2019）。2014年《受活》获日本Twitter文学奖。本文通过对谷川毅先生的访谈，期望了解阎连科作品在日本的译介过程、译者主体性和创造性、翻译中的文化诠释、日本社会受容以及中国文学海外传播的关键因素等问题。

一、阎连科作品在日本的译介

卢冬丽：众所周知，阎连科《为人民服务》这部作品在中国被查禁，您翻译的日译本《人民に奉仕する》腰封上赫然写着“即発禁処分！問題小説！”。接着第二年出版的日译本《丁庄梦》在中国也被禁了。您翻译这两部作品的翻译契机是什么？是您自己主动要求翻译，还是出版社因“被禁小说”的特殊性主动要求您翻译的呢？

谷川毅：如果只是说翻译契机当然是出于对阎连科小说的热爱。其实，在翻译《为人民服务》之前，我已经翻译了阎连科的短篇小说《革命浪漫主义》。这个短篇的日语翻译发表在我主编的中国文学期刊《火锅子》杂志（2004年11月出版的）上。《受活》的日文版在日本文学界引起巨大反响之后，我在自己博客上公开了这篇小说的日语电子版。《为人民服务》被禁之前我已经跟作家阎连科一见如故了，最初是诗人、城西国际大学教授田原引荐我认识了他。这部长篇最初是受日本出版社的委托开始翻译的，可以说是被动接受。日本读者一般比较喜欢阅读揭露社会黑暗面或者说暴露黑暗现实内容的小说和其他题材的作品，不仅仅对中国的小说是这样，我想其他语种的国家也肯定存在着不少这样的读者——即对发生在世界各国、类似于《为人民服务》有着强烈荒诞现实感内容的小说充满好奇吧。这两部小说都被禁了，特别是《为人民服务》被禁的时候据说上层对阎连科的态度相当严厉。作为一种商业行为，对出版社来说“被禁”这个事件无疑是很重要的因素之一。《为人民服务》表现和描述的是围绕师长夫人和公务班长之间乱搞男女关系的故事，政治和性的结合不仅给日本读者注射了一针兴奋剂，而且也给不同国家不同体制下的日本读者提供了巨大的思考和想象空间。《丁庄梦》讲述的是发生艾滋村的故事，对日本读者来说只要有这个“艾滋村”一个词的出现就足够了，相信这个词汇对于无论是发达还是发展中国家甚至比较落后的国家来说都是十分敏感的。这两部长篇除了让日本读者感到非常震撼之外，更重要的我认为是作者凝视世界的姿态和对文学本质以及人性深刻的揭示。

卢冬丽：相比《为人民服务》、《丁庄梦》的“紧急”出版，您翻译的《受活》在2014年由河出书房新社出版，节奏就缓慢了些，是否跟《受活》的翻译难度有关？另外，阎连科的《四书》由静岗大学的桑岛道夫翻译，将由岩波书店发行出版，《炸裂志》由泉京鹿翻译，自2014年《早稻田文学》秋季刊开始连载，读者对阎连科本人自诩的“神实主义”写作手法充满期待。不知您与另外两位学者就阎连科作品的翻译是否有交流？您认为三位阎连科作品的日译学者具备哪些独特的个人翻译风格？

谷川毅：《受活》出版节奏缓慢的原因除了河南俚语的翻译难度以外还存在几个外在的因素。其一是日中两国之间的关系紧张所致，2005年4月的中国国内反日游行以后，日本人对中国的好感度普遍下降。其二是日本出版界面临的图书销售滞缓之困境。这一点我想中国的图书市场也应该一样吧。网络和电子图书的日渐发达，购买纸质图书的人越来越少，纯文学方面的书尤其突出。各个出版社在翻译出版外国纯文学作品时都变得十分谨慎，对大多数十分优秀的外国纯文学作家的作品市场和网络销售缺乏自信，这应该是时代的大势所趋。我跟饭塚容教授、桑岛道夫教授以及翻译家泉京鹿都很熟悉。不过我们在翻译方面没有太多交流，大都是各干各的，各走各的路。我认为一位作家在同一个语种中能有多位译者是一件好事，无论是对作家还是译者的母语读者。每位译者都有自己的翻译理念和语感甚或说美感追求。就三位译者而言，对普遍的日本读者来说，肯定都存在喜欢和不喜欢的读者，这无可厚非，我觉得也非常正常。因为读者的审美趣味是多种多样的，不可能一刀切似的千篇一律喜欢某一位译者的翻译。日本人的翻译理念基本上都是比较尊重原作的翻译，如果一定要找出译者之间风格的话，那应该是语感和修辞使用的区别吧。

卢冬丽：出版社在海外文学译介方面起着重要的作用。您认为日本的文艺春秋和河出书房新社等出版社在阎连科作品日译的题材选择与营销方面起了什么作用？就作品的翻译策略和日本读者受容问题，您与出版社两者中哪一方占据主导地位？

谷川毅：文艺春秋出版社在日本是最大的综合出版社之一，每年出版的包罗万象的图书中，既有面向一般大众的周刊杂志，也有面向小众的文学和文艺月刊以及专业性很强的杂志；文学、文化、历史、科技、医疗等方面的图书数不胜数。作为一家有实力而又有规模的大出版社，接受出版一位外国作家的作品肯定会对这些作家登陆日本起到一定的宣传作用。河出书房出版社是以出版纯文学为主的，出版社的规模尽管相对较小，但这些年这家出版社出版了很多轰动日本文坛的境内和境外的作家作品，可以说是非常有眼光的出版社。在纸质图书市场日渐萎缩的当下，除了像村上春树、东野圭吾、多年前流行过的昆德拉等这些畅销的作家之外，很难说译者会有什么主导地位，我想大部分的主导地位还是在出版社这一方吧。

二、译者主体性和翻译策略

卢冬丽：有读者指出，《为人民服务》译文中数十行都是以“他说、她说”的形式描写两人的会话。汉语中主语是必须的，而日语中即便没有“他、她”之类的主语，按照

文脉也能理解上下文。读者认为《人民に奉仕する》偏直译，过度忠实原文，您怎么认为呢？这是否跟“紧急翻译出版”有关？

谷川毅：跟“紧急翻译出版”也不能完全说毫无干系。这本书的翻译时间确实短促，几乎是一鼓作气译完的。当然也跟出版社责编的建议有关，他们希望我尽可能译出原作的原貌，说白了就是尽量的尊重原作。因此我选择了直译，尽量让原作的语言和艺术氛围呈现在译作之中。读者指出的偏于直译是对的，译文里多次出现的“他说和她说”，对文学修养一般的日本读者来说有一定的理解难度，语言的节奏感好像也存在有不是十分到位之处。

卢冬丽：2007年《丁庄の夢》被日本网站评为翻译最佳作品，2015年《愉楽》成为日本第一界翻译大奖最终候选作之一。读者对您的翻译大加赞赏，认为译文优美，可以用日语细细品味原文肆意纵横、奔放洒脱的语言。相比前两部著作，《坚硬如水》作品的基调是革命口号震天响革命歌曲漫天飞，革命语言无处不在，阎连科在创作中还有意将戏曲艺术融入文本中，使得小说语言具有唱词化倾向。另外，最新翻译出版的《年月日》以及和《黑猪毛白猪毛》，都具有不同的语言风格和时代气息。这应该符合阎连科本人的期待，不同的作品使用完全迥异的语言，您是如何应对不同语言风格的挑战的？

谷川毅：我并没有特别留意文学作品的文体本身去进行翻译，而是根据作品本身传达的氛围选择合适的语言。阎连科不同的作品语言文风的不同，比如《坚硬如水》中，革命标语和革命歌曲慷慨激昂，文学语言充满歌曲节奏和韵律感；《年月日》使用了神话和童话般的语言；短篇集《黑猪毛白猪毛》为了能够让读者感受到农村的氛围，阎连科特意使用方言描写。另外，《奴儿》让人想到《年月日》，所以说，虽然也是描述农村的，但作者在这部短篇里面却极力避免使用方言。《柳乡长》让人感受到《受活》的氛围；《去服兵役吧》则弥漫着散文调的轻快感；《革命浪漫主义》中夸张的幽默表现手法；《思想政治工作》中指导员循循善诱等等，我很想把这种感觉用日语再现出来。所以说，我在翻译的时候是尽力再现我自己所感受到的作品本身的氛围。

卢冬丽：阎连科作为当今中国文学的先锋作家，文学中大量乡土语言的使用是其一大特色。您是否担心这种语言会给日本读者带来陌生感和阅读障碍？在翻译中您采用了什么样的策略来缓解日本读者的抗拒心理吗？

谷川毅：很多读者如此赞赏我的翻译对于译者的我来说当然是一种莫大的鼓励。但是，在感到高兴的同时，也伴随着一种油然而生的强烈的责任感。如果说《受活》翻译是成功的话，或许跟我有意识地使用了广岛方言有关吧。广岛方言的特点是文末的“～じゃ”“～なんじゃ”等，这在日本的动画片《まんが日本昔ばなし（日本传说故事）》里也常常被使用。一般的日本读者看到或听到广岛方言差不多都会产生一个偏僻农村老爷爷老奶奶说话的感觉，大概基于这一日本读者的共同感觉，很多读者接受了我的翻译。我在翻译《为人民服务》和《丁庄梦》的时候，几乎没有使用广岛方言，只是在人物对话里偶有所用。至于我为什么在翻译《受活》时使用了那么多的广岛方言，记得在

我刚刚一字一句细读完《受活》不久，在日本举行的中国当代文学研究会上，有一位学者发表了关于《受活》的研究报告，与会的一位女学者说，看这部小说产生一种如同老家的爷爷给我讲故事的感觉。我听了她的发言后，完全同意她的观点。之后我一直在思考，读者看《受活》为什么会产生这样的感觉？我想跟原作里反复出现的助词“哩”有很大关联吧。这个“哩”除了对话部分之外，本文里也常常出现。我觉得“哩”在《受活》这部长篇里产生了独特的节奏感。作为译者，我想尝试把这个独特的节奏感用广岛方言翻译出来。当然并非有“哩”的地方都用广岛方言翻译出了，有时要根据句势的递进和文脉的流淌以及日语的语言节奏做少量的调整，尽可能在感觉译文有抗拒感的地方和上下文的前后衔接处做一些协调处理。《受活》描述的应该是河南西部耙耧山脉最深处发生在荒僻小村庄的故事吧。我想通过使用广岛方言，把原作者独具匠心的表现力和农民鲜活的感情色彩置换到日语之中。因为日语中的普通话对表现这种农民感情丰富的对话有一定的局限性。

从读者反应来看，我使用故乡的广岛方言翻译是奏效的。不过，我并不是使用广岛方言忠实再现原文，而是跟编辑反复探讨，将读者可能难以理解、难以阅读的地方用简单易读的日语表达出来。所以我在翻译阎连科作品中使用的广岛方言，既是广岛方言又不像是广岛方言。这种翻译手法恰到好处地酿造了译文的乡土风格，这点毋庸置疑。不少读者很喜欢我译文中的广岛方言，想必也是这个原因吧。所以，我认为翻译是可以消除阎连科作品中方言带来的阅读障碍。我本人特别喜欢阎连科作品中的“泥腥味儿”，这也积极推进了我的翻译工作。

卢冬丽：阎连科认为原作者与译者的“信任和尊敬、精神共鸣”以及译者的“自由”尤为重要。“精神共鸣”是译者要喜欢和爱他翻译的作家和作品；译者和他（她）要有相似的文学观和世界观；译者要能译出作家叙述中的韵律和节奏。他认为“作家和翻译家对文学共有的大理解远比字、词、句子、段落的意见统一或分歧更重要”，“我宁要翻译中韵律的完美，而不要机械翻译的字词之完整”。对于译者的要求，阎连科本人尤其希望“译者有一定的写作能力和创作经验，能是个作家就最好了”。阎连科在给日本读者的信中说“翻译是与原作完全不同的另外一种创作”。您怎么看待阎连科“精神共鸣”和“译者自由和创造”的翻译观的？您在翻译中享受了多大的“自由空间”，又是如何把控自由的“度”？

谷川毅：跟阎连科认识之后，他对我的“信任和尊敬、精神共鸣”常常让我不仅充满了幸福感，而且对我也是一种莫大的鞭策。译者遇到这样宽容的作者是幸运的。在他的这种态度之上，我的翻译工作才得以“自由”地进行。但是，这个“自由”不等于“放任”。译者应该尊敬原作和原作者的意愿（指健在的作家），不应该随意删减、改译、编译，甚至是僭越原作不着边际的意译。译者有一定的写作能力和创作经验是很理想的。我虽说也偶有舞文弄墨，但还谈不上有什么丰富的写作能力和创造经验。尽管写和翻译是完全不同的两种行为，但我倾向于两者都要具有创造性。写有写的创造方式，翻译也有翻译的创造方式。《受活》在日本出版后，旋即引起文坛和无数批评家以及日本作家、读者的

强烈关注，或许跟我在翻译过程中发挥了一点的创造性有关吧。在翻译《受活》时，这种翻译过程是一个难以言表的满足而又幸福的过程。

三、日本受众的关注视角

卢冬丽：《丁庄梦》在日本热销，甚至被翻译成盲文出版，让人震惊。不过有些书店将他放在纪实类作品书架上出售的，这是否说明日本读者希望透过小说探视中国社会现状的心态？相似的，日本读者关注《为人民服务》主要是因为小说中的政治呐喊吗？

谷川毅：回答是肯定的，但并非百分之百都是这样。日本的确有不少读者十分关注中国社会中的荒唐现状，他们想通过中国作家的小说故事来了解中国的社会现实和中国人的生存状态。《丁庄梦》恰恰就是这么一部反映中国社会荒唐现状的小说，所以书出版后很多读者争先恐后的想先睹为快。《为人民服务》也同样，只是这部小说的政治性隐喻性要比《丁庄梦》强烈很多，不过我想，应该也有不少日本读者对荒唐的故事情节抱有强烈的好奇心。

卢冬丽：读者对《受活》的评论焦点集中在阎连科魔幻现实主义的写作风格、小说的语言张力、丰富的想象力和叙事结构。法国出版人陈丰说：“阎连科的作品在法国出版后，无论是书评、媒体采访还是与读者见面，中国政治最多只是一个引子，大家关注的还是文学本身。”当政治与文学冲突的时候，让步的总是政治。伊藤正幸在《朝日新闻》上发表书评，开篇就称赞“阎连科的创作有着挖掘人和大地的力量，其想象力像铅球一样可以无限延伸。语言表现上，时而文语，时而口语，故事叙事不遵章法，天马行空，如自由自在翱翔在宇宙中的游龙，在年月中穿梭。”日本主流媒体和知名评论家从文学结构、语言特色等角度评论作品，同时试图揭示作品隐喻的深层社会问题。不知这是否从一定程度上说明读者关注的视角从先前的政治呐喊、社会窥视转向著作的文学价值本身？

谷川毅：是的。为什么会产生这种效果呢？大概跟日本著名文学评论家丰崎由美的存在有密切关系。日本读者里有很多她的粉丝。丰崎极其推崇拉美文学故事情节的出乎意料而又充满娱乐性的小说，据说《受活》出版后，有相当一部分读者为期待这本书的娱乐性而买书，《受活》没有辜负他们的期待。日本读者把一部中国当代小说视为娱乐小说的现象几乎从未有过，在这一点上，《受活》可以说具有开天辟地的划时代意义。《受活》出版后，曾有批评家和日本读者感慨，也许因为《受活》，使他们对当代小说的看法发生了改变，从而也改变了他们对当代文学的期待。

卢冬丽：《丁庄梦》日译本的题名特地加上副标题“中国艾滋村怪谈”。“艾滋村”和“怪谈”这些字眼使原本的“梦”亦真亦幻，诡异而又真实，引人遐想。不知您添加这个副标题的初衷是什么？另外，您没有使用《受活》法译和英译的篇名《Bons Baisers De Lenine》《Lenin's Kisses》，日译为《愉乐》，透过题目您向读者传递什么信息？

谷川毅：“中国艾滋村怪谈”这一副标题不是我加的，是河出书房的编辑为促销这

本书深思熟虑之后添加的。日语中“奇谈”的意思是很罕见的、谁都想听的故事。《受活》的法译、英译的书名都很有意思。特别是英文书名《列宁的吻》，猛然看到这个书名很刺激，会突然产生强烈的好奇心，当然也有欧美人的潇洒、俏皮和幽默感。日语书名的《愉快》直接置换了河南方言“受活”之意，这个书名是这本书的责编岛田和俊想出来的。起初我觉得太过于直接，没有太多的回味余地，担心对日本读者的吸引力不会太大。不过书出版后，尤其在很多读者看完这部长篇之后，觉得《愉快》这个书名十分到位。现在反而觉得，《愉快》这个书名向读者传递了这一词汇背后隐藏的无限信息，包括文学、文化和生活习惯上的等等。

卢冬丽：您在译者后记中写道“《愉快》给人们呈现了一个颠倒的世界”，包括季节、时间、数字、故事结构和最终整个世界的颠倒，酿造小说的魔幻色彩。阎连科的小说语言完全颠倒了人类五官的感触，特别擅长使用色彩词，化静为动、化动为静，从语言表达达到故事叙事无不给读者营造一个颠倒的世界。您认为阎连科透过一系列的“颠倒”想要诠释的是什么？

谷川毅：关于这一问题，桑岛教授在他的论文《管窥阎连科小说中的伦理以及围绕翻译伦理的综合研究》里已经剖析得十分详细了。他在这篇论文里写到：“住在受活村的残疾人尽管在身体上是人间之下（低于健康者的非人般的生存状态），可是，无论文革还是当下的经济发展至上主义，阎连科向读者诉求的难道不正是住在受活村的他们、比在缺少伦理的世界里活着的健全人更正当、更幸福吗？阎连科使用充满滑稽的笔调和与之相吻合的文体，使我们看到了被他倒置了的价值观。”他的这一观点我完全赞同。

四、翻译中的文化诠释

卢冬丽：《为人民服务》和《丁庄梦》分别是在中国政治语境和经济语境下的爱情寓言，《受活》结合了政治语境和经济语境，且极具地方特色，带有浓厚的区域色彩和民族性。本质上来说，这三部著作都体现了中日文化语境的差异。作品中的文化翻译，不是简单地异化或归化可以概括的，而是一种混合体。您在翻译中是如何诠释原著的异文化特性的？

谷川毅：与其说诠释，莫如说我更想通过翻译让中日之间的文化差异活生生地呈现在文本之中，从而使日本读者更能感同身受地体味到这种文化差异所带给他们的心灵冲击和阅读快感。这一点是我翻译的基本方针也是最为留意之处。如果完全将其“日本化”，我觉得第一是对原作的亵渎，其次就会使原作的艺术风貌丧失殆尽。这一点作为译者的我，我觉得是不可取的。

卢冬丽：中国文学的海外传播很大程度上取决于翻译。某些译者在文学著作的翻译中进行删减、改译、编译，以符合目的语读者的期待视野和审美。然而，文学界对此多有批判之声。有学者认为经过“美化”翻译后的中国文学其实是一个“影子”，会导致中国文化的“误读与扭曲”。不知道您对“迎合目的语读者的美化翻译与文化扭曲”是怎么

理解的？

谷川毅：我认为在翻译过程中盲目地进行删减、改译、编译缺乏对原作的真诚和尊重。日本的翻译界我想大部分都持有这种翻译理念吧。尊重原作和原作者的态度非常重要。基于这一点，日本翻译家在翻译过程中很少武断地进行删减、改译和编译等等。

五、中国文学作品“走出去”

卢冬丽：中日的文学交流中，中国文学作品在日本的传播远远低于日本文学作品对中国的输出，中国文学处于弱势地位。日本人常有一种优越感，“居高临下”审视中国文学。这也影响日本读者对中国文学的期待视野和接受心理，中国小说在日本的传播是一个艰难的过程。您认为中国小说在日本的传播受到哪些因素的影响？中国小说要如何更好地走向海外？

谷川毅：这确实是一个一言难尽的问题。比起日本文学在中国的传播，中国文学在日本的译介和推广非常薄弱也非常边缘，正像我刚才谈到的，跟中日两国之间难以化解的历史恩怨和体制以及意识形态的对立这种特殊的关系分不开吧。不过我想这个因素的改善还会需要漫长的时间，而且也需要具体的文学和文化产品。就此而论，我觉得《受活》是化解这种隔膜的最好代表！可以说，被译介到中国的中国当代文学作品，很少有像《受活》在日本举国引起大规模的普遍关注，这部作品中，原作者那天马行空的想象和无懈可击的诗性语言之张力，以及荒诞和超人的故事情节等等彻底的抓住了日本读者的阅读心里和好奇心。只有像这样的作品才能越过无数语言，甚至克服国和国之间的负面因素以及之外的一些文化困境。不过，从我对中国当代文学有限的阅读中，小说跟中国现代诗一样，在日渐引起各国读者和批评家的注意，相信在不远的将来，中国现代文学一定会成为世界文学最为重要的一个存在之一，这一点很值得期待。

六、结语

卢冬丽：从2006年至2019年十多年间，您不断有译著出版，可以说是高产又高效。我想一定是您本人对阎连科文学的热爱和勤奋，才会有这么多的译著，获得日本读者和社会的广泛关注。作为阎连科译著在日本翻译和推介的核心力量，您如何看待自己这十多年的翻译行为，从译者行为规律的角度来说，您的翻译行为有什么规律吗？最后，我还想问您下今后的翻译计划，很期待您有其他的译著。

谷川毅：翻译阎连科的作品非常偶然，并不是我自己在数不清的中国作家中寻寻觅觅找到他的。没有田原的介绍我不可能接触阎连科的文学。然后，又非常的偶然，因为《受活》的翻译而备受关注。所以，我觉得自己非常的幸运。今后我会心怀感激继续努力翻译下去，来感谢这份幸运。只要有读者喜欢、有读者想读我翻译的阎连科的作品，只要读者有这份期待，我定会竭力做好翻译，哪怕再多一篇，也想呈现在读者的面前。

说到今后的计划，我争取早日完成《日光流年》的翻译工作。如果出版社还有其他的翻译需求，我也会尽量满足。目前我还在翻译盛可以的《息壤》，这部作品跟阎连科的

风格完全不一样，刚开始翻译的时候真的非常痛苦。或许因为她是女性作家的缘故吧。尝试挑战其他作家的作品，这个翻译过程对今后阎连科作品的翻译必定有所裨益。

注)

(1) 谷川毅：男，日本名古屋经济大学教授，从事现当代中国文学研究。

※ 本文受 2019 年度南京农业大学中央高校基本科研业务费人文社科基金资助，项目编号：SKYC2019016；受 2019 年度江苏省高校哲学社会科学研究基金项目资助，项目编号 2019SJA0051。

論文執筆者一覧

林 璋	福建師範大学	教授
宮 偉	城西国際大学	教授
劉 曼	上海理工大学外語学院	副教授
杜 勤	上海理工大学	教授 外国語学院日本語系主任
蔡春曉	重慶師範大学	講師 北京外国語大学日本学研究中心博士研究生
匡 伶	南京師範大学	P D
陳慧玲	華中科技大学	副教授
舒 熾	湖北省蕪湖市横車鎮人民政府	職員
方芝佩	華東師範大学	博士研究生
鄭劍華	東京学芸大学	講師
盧冬麗	南京農業大学日語系	副教授

『日中翻訳文化教育研究』論文執筆要領

1. 投稿は日中翻訳文化教育協会の正会員に限り、原稿は未公開のものに限る。
2. 原稿は横書きとし、使用言語は日本語または中国語とする（英語も可）。
3. 原稿は原則として、日本語については常用漢字を使用し、中国語については簡体字を使用するものとする。ただし、必要があればその限りではない。
4. 日本語の原稿は 43 字× 35 行× 10 ページ以内、中国語の原稿は 20 字× 35 行× 20 ページ以内とし、手書きの原稿は不可とする。
5. 原稿の上限は、文字数ではなく、原稿のページ数による。引用文等の字下げおよび改行等による空白も文字数に換算されるので注意すること。また、図版を必要とする場合も、相応の文字数分を含めるものとする。なお、図版のデータは本文のデータとは別に提出すること。
6. 注は各章・節ごとに付けず、文末にまとめて付すこととする。また、注番号はすべて通し番号とし、本文中に（ ）付き数字により示すこと。ソフトウェアの注機能等は使用不可とする。
7. 引用箇所等のインデントは、行頭にて（2 字下げ）（3 字下げ）等と明示すること。
8. 応募時に、原稿とは別に 2000 字以内の論文要旨を添付すること。
9. 原稿は電子メールによる投稿とする。郵送および持参は認めない。
10. 投稿時の事故に備え、提出前にあらかじめ論文原稿のデータを複製しておくことが望ましい。
11. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は必要最小限のものについてのみ認める。
12. 論文抜刷は作成しない。
13. 掲載論文については、その著作権は日中翻訳文化教育協会に帰属するものとし、ホームページ等に公開することがある。ただし、当該論文が第三者の著作権その他の権利の侵害問題を生じさせた場合、一切の責任は執筆者が負うものとする。なお、掲載された論文の執筆者は、無許諾かつ無償で当該著作物の再利用をすることができる。



【活動報告】2019年3月～2020年2月

- (1) 第一回理事会 (於東京) 2019年3月31日 (日)
- (2) 第6回 日中翻訳文化サロン (於東京) 2019年3月31日 (日)
東京四ツ谷主婦会館プラザエフにて実施。参加者 25 名。講演者は、当協会松岡榮志会長。
エッセイ集出版記念講演、演題は『私と中国 40 年』－思い出の日々と懐かしき人々。
- (3) 第七回 中日・日中翻訳実践セミナー (於広州) 2019年4月12日 (金)～14日 (日)
広州市の広東外語外貿大学にて、当協会と広東外語外貿大学の共催、立思外国語学園、中国対外友好合作服務中心などの賛助にて実施。参加者 21 名。各講義の内容及び講師は以下のとおり：
中日翻訳実践講座：松岡榮志 (日中翻訳文化教育協会会長)
中日通訳実践講座：李国棟 (西安交通大学副教授)
中日通訳実践講座：宮首弘子 (杏林大学教授)
日中翻訳実践講座：施小煒 (上海杉達学院教授)
中日翻訳実践講座：林 璋 (福建師範大学教授)
中日翻訳教育講座：杜 勤 (上海理工大学教授)
中日翻訳教育講座：吳 楓 (広東財經大学教授)
日中翻訳文化講座：錢曉波 (上海對外經貿大学副教授)
このセミナーは、国際交流基金からの賛助を得、同基金の金子主任助理、高崎先生も来賓として参加。
- (4) 第二回理事会 (於広東外語外貿大学) 2019年4月13日 (土)
- (5) 第一回桜花杯江蘇省、浙江省、上海市重点大学生日本語通訳コンテスト (於杭州)
2019年6月8日 (土)
杭州市の杭州師範大学にて、中国日本語教育学会上海分会と新世界教育グループによる主催、当協会、立思外語学園の賛助にて実施。参加者 23 名。当協会松岡会長が、審査委員長。運営委員長は、錢曉波理事。
- (6) 第八回 中日・日中翻訳実践セミナー (於貴州) 2019年10月18日 (金)～20日 (日)
貴陽市の貴州大学外国語学院にて、当協会と貴州大学外国語学院の共催、立思外語学園、中国対外友好合作服務中心の賛助にて実施。参加者 24 名。各講義の内容及び講師は以下のとおり：

中日翻訳実践講座：松岡榮志（日中翻訳文化教育協会会長）

日中翻訳実践講座：施小煒（上海杉達学院教授）

中日翻訳教育講座：杜 勤（上海理工大学教授）

中日翻訳実践講座：丁国旗（広東外語外貿大学教授）

中日翻訳実践講座：林 璋（福建師範大学教授）

中日翻訳実践講座：宮 偉（城西国際大学教授）

中日通訳実践講座：李国棟（西安交通大学副教授）

中日翻訳文化講座：銭曉波（上海對外經貿大学副教授）

(7) 第三回理事会（於貴州大学）2019年10月19日（土）

(8) 第一回北京市、天津市、河北省三地区大学院生中日翻訳コンテスト（於北京）

2019年11月16日（土）

北京市の北京師範大学にて、当協会と北京師範大学外国語文學院の共催、立思外語学園、中国対外友好合作服務中心、徳天衆公司などの賛助で実施。第一次審査参加者89名、第二次審査参加者30名。北京大学、清華大学、北京外国語大学、北京第二外国語大学、對外經濟貿易大学、天津外国語大学などの修士、博士課程（MTIを含む）の学生が参加。授賞式には、北京日本大使館から藤岡参事官、国際交流基金から高橋所長が来賓として参加。

(9) 第二回中日翻訳文化教育公開講座（於深圳）

2019年12月7日（土）、深圳市内HOTEL HYATT PLACEにて、当協会の主催で実施。各講義の内容及び講師は以下のとおり：

松岡榮志：日本80年代以后的中日翻译教育概観

杜 勤：認知翻译学视角下的日汉翻译实践

丁国旗：跨文化交际与文本平衡——以笔译实践为例

【今後の活動予定】詳細については、ホームページまたは案内メールにて確認下さい。

(1) 『日中翻訳文化教育研究』第5号刊行 2020年3月

(2) 第1回日本語MTI教員養成翻訳・通訳教育国際シンポジウム（於東京）

2020年3月21日（土）～24日（火）

当協会と城西国際大学と、杏林大学の共催にて実施の予定。参加予定人数30名。

※ コロナウイルスの蔓延により延期、開催時期未定

(3) 第九回 中日・日中翻訳実践セミナー（於ハルビン）2020年5月8日（金）～10日（日）

黒竜江省ハルビンの黒竜江大学にて、当協会と黒竜江大学の共催にて実施の予定。参加予定人数20名。

※ コロナウイルスの蔓延により延期、2021年5月頃を予定。

一般社団法人日中翻訳文化教育協会会員規約（2015年4月1日施行）

第1条（代議員制の採用）

当協会には次の会員を置く。

- (1) 正会員：当協会の目的に賛同して、次条の規定により入会した大学の教員、もしくはそれに準ずる者。
- (2) 準会員：当協会の目的に賛同して、次条の規定により入会した大学院生、もしくはそれに準ずる者。
- (3) 団体会員：当協会の目的に賛同して、次条の規定により入会した研究所、研究・教育団体、その他民間団体。

第2条（入会手続き）

当協会への入会を希望する者は、所定の入会申請書類に必要事項を記入し、事務局を通じて理事長に提出し、理事の多数決による承認を受けなければならない。

前項の入会申請をするためには、正会員及び法人会員の場合は理事1名の推薦を要し、準会員は正会員1名の推薦を要するものとする。

入会后、申請内容に変更が生じた場合、会員は速やかに事務局へ届け出なければならない。

第3条（入会金及び会費）

当協会の事業活動運営費用に充てるため、会員は別途定める会費を納めなければならない。

既納会費は、いかなる事由があっても返還しない。

第4条（会員の資格取得）

会員の資格は、第2条の手続きの後、前条の会費を納入することにより取得するものとする。

第5条（会員の権利）

会員は、その種別に応じて次の権利を有する。

(1) 正会員は、当協会が発行する学術研究誌に投稿する資格を持つ。

(2) 準会員は、当協会が発行する季刊誌に投稿する資格を持つ。

(3) 正会員は、当協会が主催するセミナー等の講師を務めることができる。

(4) 正会員及び準会員は、当協会が主催するセミナー等に優先的に参加することができる。

(5) 団体会員は、当協会の主催する事業に優先的にパートナーとして参与することができる。

第6条（任意退会）

会員は、理事長宛に退会届を提出することにより、任意に退会することができる。

第7条（除名）

会員が次のいずれかに該当するときは、理事会の議決によって除名することができる。その際、当該会員に対して、理事会の1週間前までに理由を付して除名する旨を通知し、かつ理事会の場において弁明の機会を与えなければならない。

(1) 当協会の名誉を傷つける、又は当協会の目的に違反する行為があったとき。

(2) 当協会の定款または規則に違反したとき。

(3) その他除名すべき正当な事由があるとき。

前項により除名が決議されたときは、除名された会員に対して、理事長はその旨を通知しなければならない。

第8条（会員資格の喪失）

前二条のほか、会員が次のいずれかに該当する場合は、その資格を喪失する。

(1) 当該年度末において会費が未納であるとき。

(2) 全ての理事の同意があったとき。

(3) 会員が死亡したとき。

(4) 団体である会員が解散したとき。

2020年度役員

2020年4月1日予定

会 長	松岡榮志	副 会 長	侯仁鋒、徐一平	顧 問	章健、張中毅
常務理事	林洪、薛豹、高寧、杜勤、宮偉、関旭、周来友、李国棟、馮日珍、関久美子、坂口憲聡				
理 事	劉曉芳、范建明、李俄憲、施小煒、宮首弘子、林璋、陳多友、丁国旗、高仁德、陳慧玲、徐文智、祁福鼎、錢曉波、陳紅、楊鉄錚、王秋生、福田智匡、武田法子、山口千佳、周洋、范文、陳亞運				
東京事務局長	坂口憲聡	大連事務所主任	周洋	金華事務所主任	陳亞運

『日中翻訳文化教育研究』既刊号目次

創刊号 目次

(2016年3月31日 発行)

創刊の辞	松岡 榮志	1
以常识论翻译	高 宁	3
浅谈外事日语口译实践	李国栋・张长安	12
翻译随想三题	范建明	20
伊沢修二の『日清字音鑑』の字音についての考察—「o」と「ê」表記に焦点を当てて—	鄒 暢	25
中国の古典目録学に現れた「左図右書」	高仁徳	38
蕭友梅の音楽観に関する考察—音楽の力への確信とその「変化」について—	丸山貴志	53
【訳著摘録】『詩経』国風・周南	松岡 榮志〔訳〕	67

No.1 INDEX

A Discussion on Translation from the Perspective of Common Sense	GAO Ning	3
Practice of Chinese-Japanese Interpreting in Foreign Affairs	LI Guodong,ZHANG Chang'an	12
Three Topics of Translation Random Thoughts	FAN Jianming	20
A study of the pronunciation of Chinese characters in Shuji Isawa's "日清字音鑑" - Focusing on the phonetic transcription "o"and "ê"-	ZOU Chang	25
The Implication of "the Configuration of the Image on the Left and the Character on the Right (左図右書)" in the Classical Chinese Bibliographies	KO In-duck	38
On Xiao Youmei's View of Music: His Belief in the Power of Music and Nationalism in the Late 1930s' Shanghai	MARUYAMA Takashi	53

第2号 目次

(2017年3月31日 発行)

浅析公示语汉译的现状 & 策略·····	宫 伟	3
关于中国日语学习者日汉互译技能的现状分析 ——以上海市日语口译资格证书考试为例·····	杜 勤	14
语义指向与翻译·····	高 宁	20
日中言語における外来語の受容の仕方の相違について——マクロの視点から——·····	侯仁鋒	30
功能翻译理论视角下公示语汉日翻译策略研究·····	祁福鼎 · 施文	39
当代网络流行语与日本的汉语教学·····	郑剑华	46
漱石作品における「縹緲」の意象について·····	安勇花	53
风不平, 译难定——论文本语境转换中『風立ちぬ』的误译·····	陈 彪	63
北京公使館の中国語教育について·····	楊鉄錚	71
倉石武四郎旧蔵 F. L. Hawks Pott 著 “Lessons in the Shanghai Dialect” について·····	泉杏奈	82

No.2 INDEX

A Research on the Current Situation of the Chinese Translation of Japanese Public Signs - A Case Study on the Guidance Documents of Japanese Government·····	GONG Wei	3
An analysis on Chinese learners' skills on Japanese (to and from) Chinese translation - Base on exams of Shanghai Post Credentials for interpreters in Japanese language ····	DU Qin	14
Semantic Orientation and Translation·····	GAO Ning	20
Contrastive analysis of Japanese and Chinese approaches to loanwords - from a macroscopic perspective - ·····	HOU Renfeng	30
A Study on Chinese - Japanese Translation Strategy of Public Signs from the Perspective of Functional Translation Theory ·····	QI Fuding, SHI Wen	39
Internet catchwords and Chinese teaching in Japan ·····	ZHENG Jianhua	46
An Inspection of Foggy Image in Natsume Soseki's Works ·····	AN Yonghua	53
On the mistranslation of <i>The Wind Blows</i> from the contextual transformation ·····	CHEN Biao	63
A study of Chinese language education in Japanese legation in Beijing ·····	YANG Tiezheng	71
F. L. Hawks Pott “Lessons in the Shanghai Dialect” Archived in the Kuraishi Collection in the Institute for Advanced Studies on Asia at the University of Tokyo ·····	IZUMI Anna	82

第3号 目次

(2018年3月31日 発行)

浅析日汉旅游翻译中的问题及策略·····	宫 伟	3
中日文化词汇空缺及其翻译策略探析 ——以日译本《蛙》第二部内容为中心·····	行 娟, 李国栋	13
深度翻译的文化诠释与读者接受 ——基于阎连科《受活》日译本的分析·····	卢冬丽	22
日本語由来の中国語インターネット流行語に関する一考察·····	李旖旎	30
木下圭太郎訳『支那伝説集』の文体 ——魚返、佐藤、及川訳との比較を中心に·····	范 文	40
『聊斎志異』と柴田天馬 ——満洲渡航前後を中心に·····	郡司祐弥	54
日本語話者に対する中国語聴解テストについて ——多肢選択問題の作問方法をめぐって·····	陳淑美	64
【訳書摘録】『宋詞選』Ⅰ 北宋篇·····	松岡榮志 [訳]	75

No.3 INDEX

On the Problems and Strategies of Japanese and Chinese Tourism Translation ····	GONG Wei	3
An Analysis of the Cultural Lexical Gap in Chinese-to-Japanese and Their Translation Strategies ——A case study on the Japanese Version of <i>Wa</i> ·····	XING Juan, LI Guodong	13
The Cultural Interpretation and Reader's Reception of Thick Translation ——Analysis on Japanese Translation of Yan Lianke's Novel <i>Lenin's Kisses</i> ·····	LU Dongli	22
A Study of Japanese Loanwords in Chinese Internet Buzzwords ·····	LI Yini	30
The writing style of Kinoshita Mokutarou's translation <i>Folklore of China</i> ——In comparison with Ogaeri, Satou and Oigawa's translation ·····	FAN Wen	39
<i>Liaozhai Zhiyi</i> and Tenma Shibata ——Before he emigrates to Manchuria ·····	GUNJI Yuya	54
Chinese listening test for Japanese speaker ——How to Prepare Better Multiple-Choice Test Items ·····	CHEN Shumei	64
The anthology of Song iambic verse ——Part of the Northern Song Dynasty ·····	MATSUOKA Eiji	75

第4号 目次

(2019年3月31日 発行)

认知翻译学视阈下的翻译文本分析 ——以夏目漱石《心》的译本为例·····杜 勤, 毛 伟	3
漱石漢詩の早期創作 (一)·····安勇花	11
李白の詩歌における神話伝説の日本語訳に関する考察·····陳慧玲, 舒 燮	19
日本の閻連科時代 ——論閻連科作品在日本的译介·····卢冬丽	32
『天堂蒜薹之歌』の日本語訳本の研究 ——莫言の作風を表す表現の翻訳方略について·····白楊碩	41
清末日语教材词汇语义类别研究·····李旖旎	50
倉石武四郎『ローマ字中国語初級』と『Spoken Chinese』·····中山淳子	59
【訳書摘録】『宋詞選』Ⅱ・南宋篇·····松岡榮志〔訳〕	73

No.4 INDEX

Target text analysis in the context of cognitive translation ——Based on Chinese versions of <i>Heart</i> by Natsume Souseki ····· DU Qin, MAO Wei	3
Souseki's early works on Chinese Poetry(1) ····· AN Yonghua	11
The Study of Japanese Translation of Myths and Legends in Li Bai's Poems ····· CHEN Huiling, SHU Man	19
Japan's Yan Lianke era ——About the Translation of Yan Lianke's Works in Japan ····· LU Dongli	32
Study on the Translation Strategy of Mo Yan's <i>The Garlic Ballads</i> (Japanese Translation Edition) ····· BAI Yangshuo	41
A Study on Lexical-semantic Categories of Japanese Textbooks in Late Qing Dynasty ···LI Yini	50
Takeshiro Kuraishi “Chinese for beginners with pinyin (PINYIN ZHONGGUO-YU Chuji)” and “Spoken Chinese” ····· NAKAYAMA Junko	59
The Anthology of Song Ci (Ⅱ) ——Translation of the Southern Song Dynasty Period ····· MATSUOKA Eiji	73

< 電子書籍版奥付 >

日中翻訳文化教育研究 No.5

編集 一般社団法人 日中翻訳文化教育協会 (略称 : SETACS)
(The Society of Education for Translation And Cultural Studies
in Japanese and Chinese)
メールアドレス : office@setacs.org
URL : <https://www.setacs.org/>

発行 両風堂
URL : <https://www.ryofudo.jp/>

2025 年 3 月 31 日 電子書籍版発行

電子書籍化にあたって、表紙を分割し、電子書籍版奥付を追加

複製／改ざん禁止

©SETACS 2025

『私と中国 40 年』(『我与中国 40 年』)

松岡榮志 著

(東京学芸大学名誉教授、日中翻訳文化教育協会会長)



外文出版社 2019 年 3 月刊行

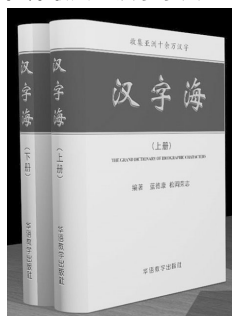
日本語版 68 元 中国語版 48 元

著者は東京学芸大学の名誉教授であり、日中翻訳文化教育協会の会長を務めている。同書は、著者と中国とのかかわりをエッセースタイルでまとめたもの。40年にわたり、著者は仕事の関係で日本と中国を足繁く行き来し、中国の発展や変化の姿を、目の前でドキュメンタリー映画が上映されているかのように見つめてきた。同書では、著者が立ち会った改革開放の歴史を証言している。その他、当時の写真や切符、著者自身が描いたスケッチなどが散りばめられており、懐かしい風景や思い出が色鮮やかに蘇るだろう。

——『人民中国』2019 年 6 月号

両風堂 出版目録

世界最大の漢字字典 10 万字収録



『漢字海』第2版(上・下)
東アジアの漢字をすべて収録

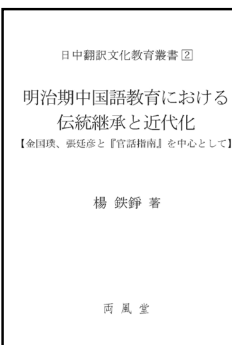
藍徳康・松岡榮志 主編
定価 55,000 円＋税
ISBN:978-7-5138-1500-0

日中翻訳文化教育叢書

①
『現代中国日本語教育の理論と実践』(林洪著)

日中翻訳文化教育叢書 ①
現代中国日本語教育の理論と実践
【研修カリキュラムと教材開発を中心に】
林 洪 著
両風堂

定価 6,800 円＋税
ISBN:978-4-90795-307-2



②
『明治期中国語教育における伝統継承と近代化』(楊鉄錚著)

日中翻訳文化教育叢書 ②
明治期中国語教育における伝統継承と近代化
【金国瑛、張廷彦と『官話指南』を中心として】
楊 鉄錚 著
両風堂

定価 5,800 円＋税
ISBN:978-4-90795-308-9

『日中翻訳文化教育研究』

日中翻訳文化教育協会 編
第1～5号 各2,500 円＋税
好評発売中
ISSN:2424-0869

音声ペンで学ぶ中国語入門

『北京の街角で』改訂新版

松岡榮志・馮日珍・木村守・関久美子 編著
B 5 判/235 ページ ◇発音編＋会話編 16 課
定価：2,800 円＋税 ISBN：978-4-907953-00-3



音声ペンで学ぶ

日・中・英・独・仏・朝『6 カ国語基本単語ドリル』

松岡榮志 監修、東京学芸大学多言語多文化研究会 編
A 5 判/135 ページ ◇基本単語約 600 語・あいさつ等文例付き
定価：1,800 円＋税 ISBN：978-4-907953-01-0



音声ペンで楽しむ

『漢詩・漢文朗読入門』(中国語・訓読付き)

松岡榮志 編著
A 5 判/94 ページ ◇中国語発音入門付き
定価：1,800 円＋税 ISBN：978-4-907953-02-7



音声ペンで学ぶ 中国語中級テキスト

『新・北京の春節』

松岡榮志 監修
B 5 判/140 ページ ◇全 20 課 (小学語文・成語故事・散文等)
定価：2,800 円＋税 ISBN：978-4-907953-06-5



両風堂 音声ペン

G-Speak

電池式(単4電池2本)
音量調節ボタン
イヤホンジャック
◇録音機能付き 定価：6,500 円＋税



お問い合わせは ホームページ：www.ryofudo.jp
または MAIL：inq@ryofudo.jp まで

定価 [本体 2,500 円＋税]